

第59図 1号石蓋土壙墓平・断面図

1号石蓋土壙墓

9号横穴墓の東側に近接する斜角約 20° の斜面上に位置する。標高31mを測る。墓壙は、現状では北側のみが残っている。墓壙の東側と南側は、急斜面のため流失し、検出できなかった。西側は、8号横穴墓の墓道によって切られている。

残存する墓壙は、地山を二段に掘り下げ、さらに土壙を掘っている。確認できる墓壙最大値は、東西長約2.8mである。蓋石は、7個の川床採集の大礫で東から西方向に積まれている。蓋石のすきまは安山岩の板石と地山の石で覆っている。土壙は、上面で長さ1.6m、幅0.5m、深さ0.45mの隅丸長方形を呈している。内法は、長さ1.43m、幅0.43mを測る。床面は、全面に小円礫を敷いている。南端は、小円礫が厚く敷かれ、枕石としている。礫は川床採集のものである。

築造時期は、立地や構造、および8号横穴墓との切り合い関係から見て、五世紀後半代の可能性がある。土壙の規模から、女性あるいは小児用の埋葬施設と推定する。(村上久和)

10号横穴墓

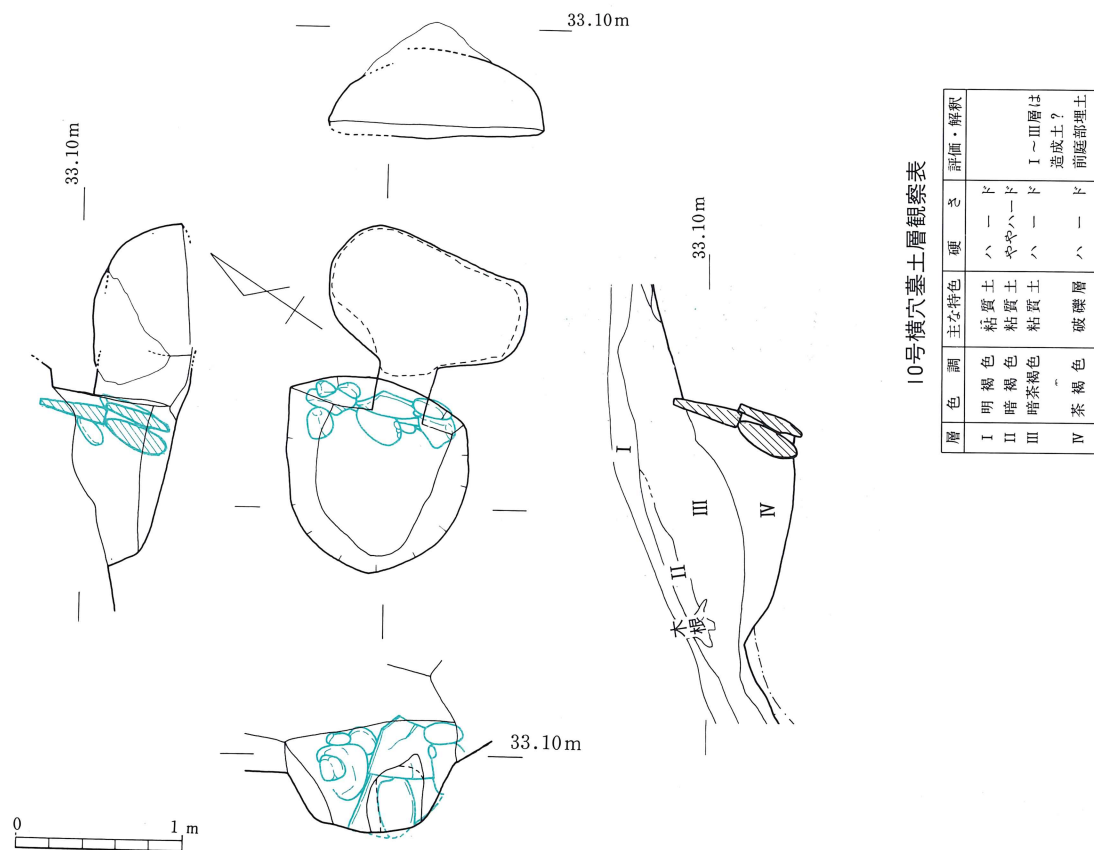
1. 立地、調査前の状況

10号横穴墓は、北支群北寄りの斜面上9号横穴墓の北3mの所に位置し、9号横穴墓同様南西方向に開口する。斜面の上方、標高32.9m付近に設けられている。全長は2.1mと小さく、主軸をN- 71.5° -Eにとる。保存状態は良好で、前庭部は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞部および玄室内の調査を行った。本横穴墓が調査概報Iで9号横穴墓としたものである。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ1.06m、幅1.1mで羨門部に向って拡がる平面形を呈している。床面は端部で



10号横穴墓土層観察表

層	色	調	主な特色	硬さ	評価・階級
I	明褐色	暗褐色	粘質土	ハ	I～III層は造成土？ 前庭部埋土
II	暗褐色	暗茶褐色	粘質土	ハ	
III	暗褐色	暗茶褐色	粘質土	ハ	
IV	茶褐色	暗茶褐色	破礫層	ハ	

第60図 10号横穴墓平・断面図及び縦断土層図

60°前後の角度で段落ちし、羨門に向かって約18°の傾斜で下降している。側壁の傾斜は60°を測り、羨門部壁の傾斜は90°を測る。

羨門部分は良く残っており、高さ0.54m、幅0.3mを測る。

閉塞施設は安山岩製板石と河原円礫を使用して構築されている。閉塞は次の4工程で行われている。第1工程は基盤直上に安山岩製板石を1個置き羨門を塞ぐ。第2工程は板石の支え石として30～40cm前後の扁平な河原石を置く。第3工程は羨門上面の隙間を第2工程の石を根石として40cm前後の板石をのせ羨門を完全に塞ぐ。第4工程は人頭大の河原円礫および地山包含円礫10個前後で第3工程の支えとなる。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされる。埋土は基盤層の2次堆積物で単一層である。埋土の状況から追葬は認められない。

2) 羨道、玄室

羨道部は狭く、床面で幅0.3m、長さ0.32mを測る。床面は18°の傾斜で玄室に向かって下降する。天井部は5°前後の傾斜で玄室に向かって下降する。玄室は平入り、略卵形を呈し、長さ0.72m、幅1.21mを測る。高さは天井部が若干崩落しているが、中央付近で0.5mと推定される。床面は標高32.5mでほぼ平坦である。玄室床面は、全面に直径5cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。横穴墓の規模から幼・小児専用横穴墓と考えられる。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内中央左側壁ぎわに頭位を北にした幼児人骨の頭蓋骨1体分のみが検出された。他に遺物は全く認められない。

2) 前庭部内

前庭部においても遺物は全く認められなかった。(村上久和)

11号横穴墓

1. 立地・調査前の状況

11号横穴墓は、北支群の北側7号横穴墓の墓道先端付近より南へ約6mの所に位置し、南西方向に開口する横穴墓である。斜面の下方、標高31m付近に設けられている。全長は3.32mを測り、主軸をN-56.5°-Eにとる。保存状態は良好で、前庭部・玄室は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、テラス状遺構の確認、閉塞施設の調査等を行った。閉塞施設の除去後、玄室内に埋葬人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第二解剖学教室の協力を得て玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

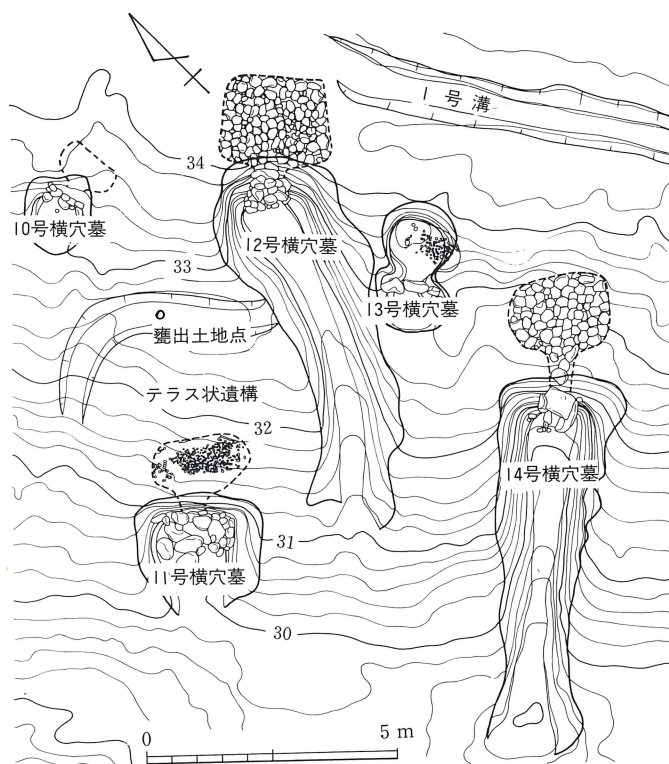
1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ1.7m、下幅は先端部で1.45m、羨門付近で1.3mを測る略長方形を呈している。斜面の下位に立地する関係上旧表土は流失しており、基盤層からの切り込みは認められた。切り込み部分から前庭部床面までの深さは0.3mを測る。前庭部床面は凹凸があるが、ほぼ7~8°の緩傾斜で羨門部へ続く。側壁の傾斜は左右で若干違うが60°前後を測る。また羨門部壁の傾斜は約75°を測る。羨門部分は天井部分が崩れているが、閉塞石等から推定して、羨門は高さ0.6m前後、幅0.5mを測る。閉塞施設は板石と河原および地山円礫を使用し構築されているが、これは最終埋葬時の状態を示している。まず、前庭部下部に初葬時の埋土が10cm程堆積し、その上に基底部をつくる。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の4工程に分けられる。第1工程はやや厚めの安山岩製板石1枚で先の埋土を基底部として羨門を覆う。しかし羨門全体を覆いきれず隙間を同じくやや小形の板石でふさぐ。この板石2枚は羨門側の面にベンガラが塗布されている。第2工程は、40~50cm大のやや大形の河原石を5~6個埋土を基底部として第1工程の板石の下面の支えとしている。第3工程は、人頭大の円礫20個前後からなり、第2工程の石を根石として第1工程の板石の中程までを覆う。第4工程は、70cm前後の大形の円礫5個前後からなり、第2工程の石を支え隙間を覆う。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされているが、この埋土中にも若干の円礫が含まれているところから、初葬時には全体を覆うように配石がなされていたと考えられる。

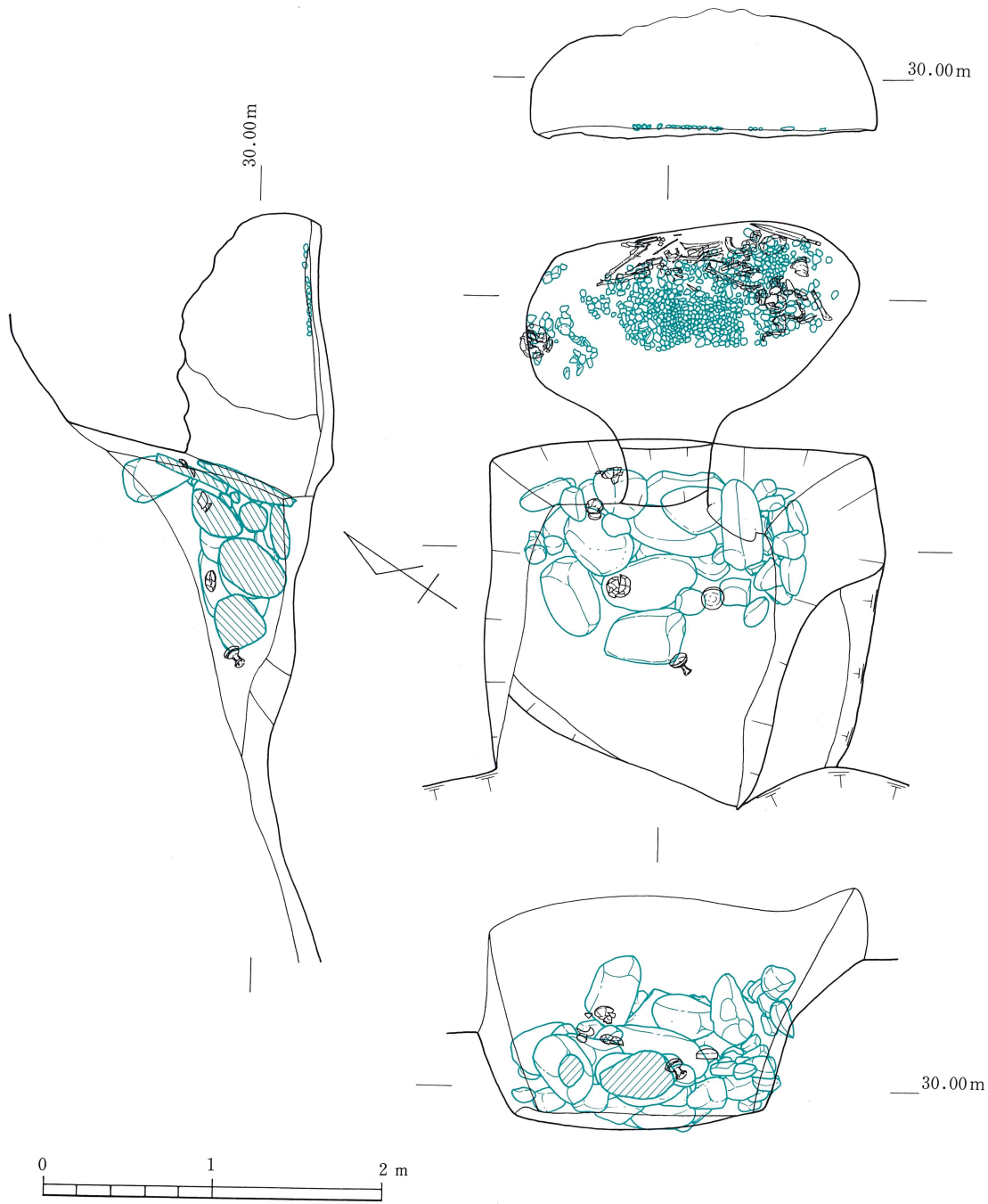
b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土はその性状から5層群16層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群は閉塞石下面に約1.5m前後の範囲にほぼ水平に約10cm前後堆積している。性状は基盤層の二次堆積で上面は第2層群によって削平されている。初葬時の埋土と考えられる。

第2層群は、第4工程の閉塞石上面から約1mの範囲で約10°の傾斜を持ち堆積している。最も厚い部分で約20cmの堆積が認められる。性状は基盤層の二次堆積で上部で硬く締っている。上面を第3層群によって切られている。第1次追葬時の埋土と考えられる。



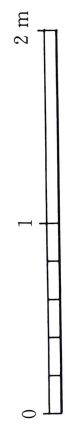
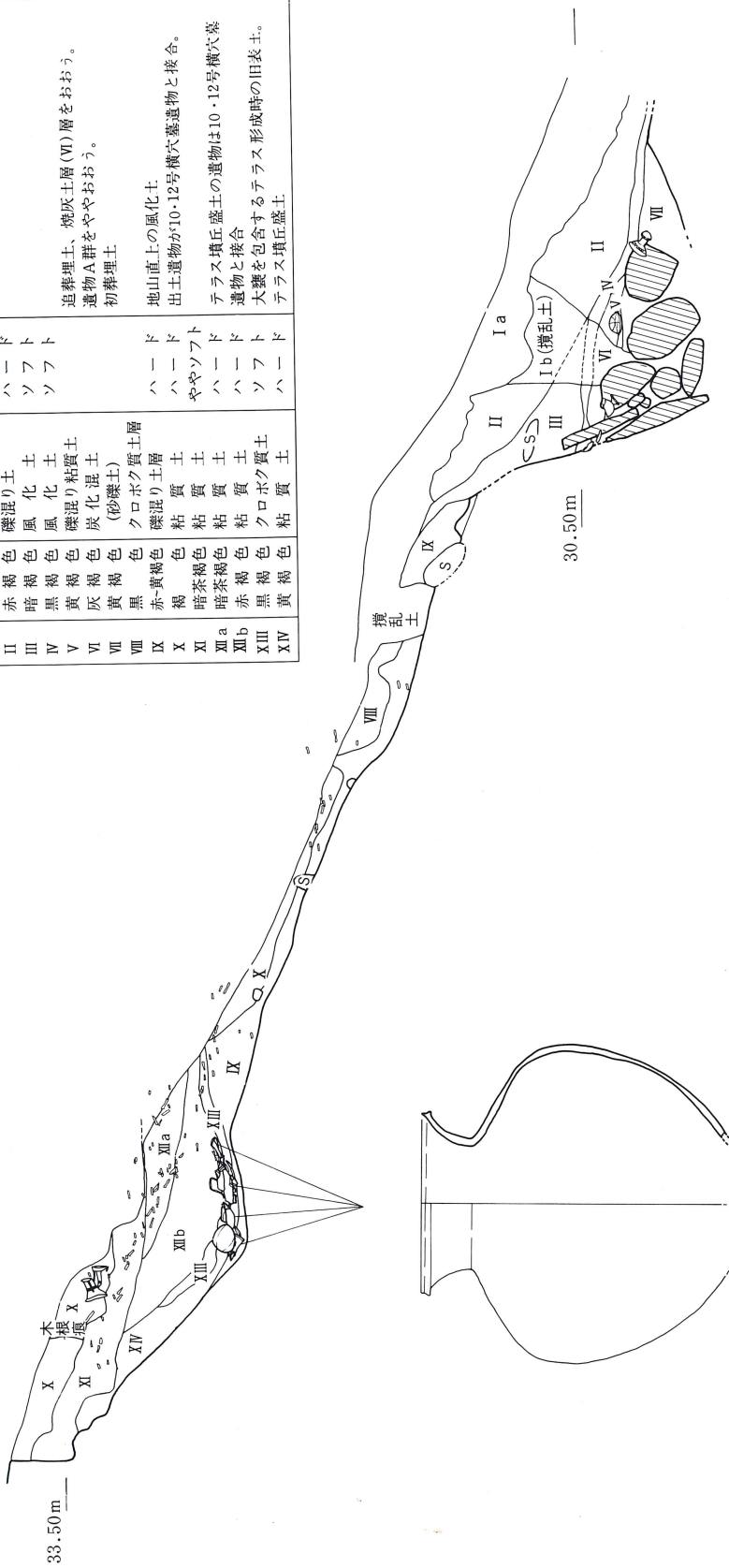
第61図 11号横穴墓テラス平面図



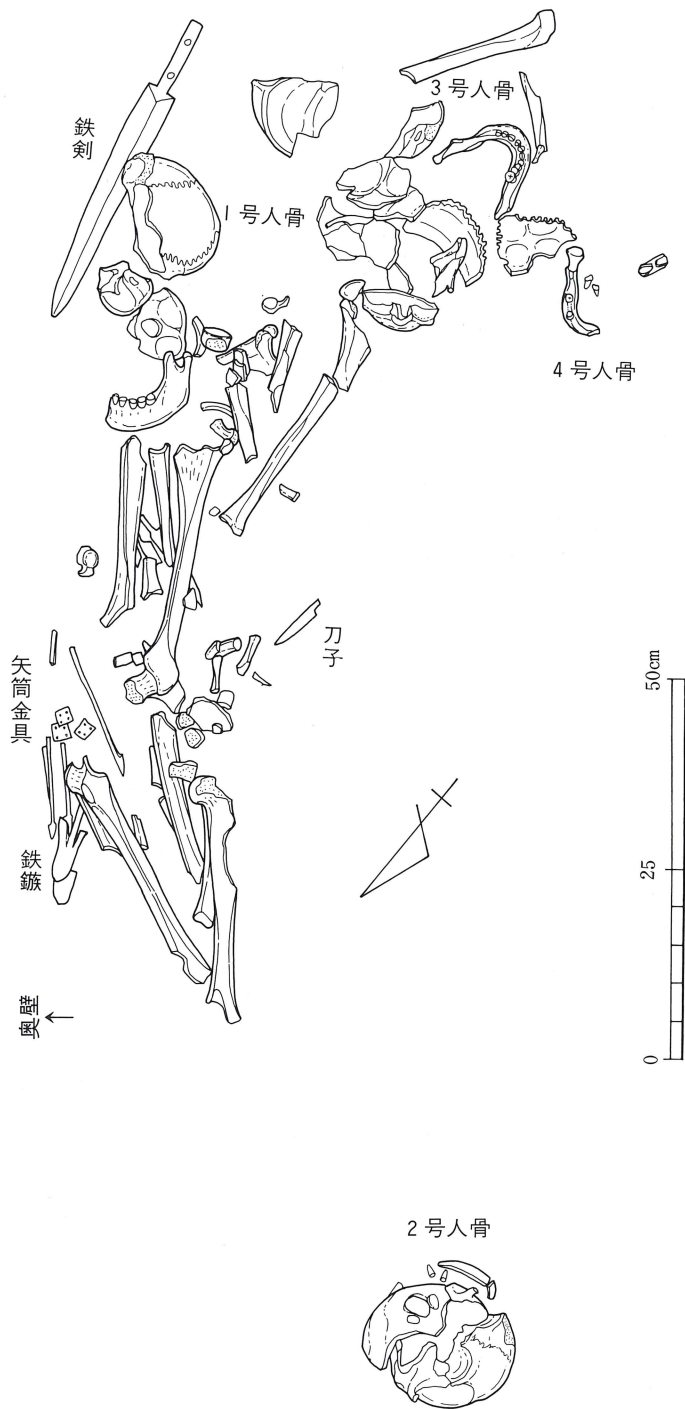
第62图 11号横穴墓平・断面图

11号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価	解釈
I a	暗褐色	土質	ソフト		山字掘時の攪乱土 追葬埋土、焼灰土層(VI)層をおおう。 遺物A群をややおおう。 初葬埋土 地山直上の風化土 出土遺物が10・12号横穴墓遺物と接合。 テラス墳丘盛土の遺物は10・12号横穴墓遺物と接合 大甕を包含するテラス形成時の旧表土。 テラス墳丘盛土
I b	黒褐色	粘質土	極ソフト		
II	赤褐色	礫混り土	ハソフト		
III	暗褐色	風化土	ソフト		
IV	黒褐色	風化粘質土	ソフト		
V	黄褐色	礫混り粘質土			
VI	灰褐色	炭化混土 (砂礫土)			
VII	黒褐色	クロボク質土層			
VIII	黒	礫混り土層	ド		
IX	赤-黄褐色	粘質土	ハ		
X	褐色	粘質土	ハ		
XI	暗茶褐色	粘質土	ド		
XII a	暗茶褐色	粘質土	ド		
XII b	暗茶褐色	粘質土	ド		
XIII	赤褐色	粘質土	ハ		
XIV	黒褐色	クロボク質土	ハ		



第63図 11号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第64図 11号横穴墓玄室内人骨出土状態

床面を平らにしており、先の羨道部落ち込みも埋められている。玄室中央から奥壁部分にかけて、南北に長さ1.85m、幅0.55mの範囲で直径7cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。なお、羨道、玄室内の天井および壁部には全面にベンガラが塗布されている。

3) 墳丘

本横穴墓羨門壁頂部の斜面上約4m東側付近に階段状の地山整形を行った後、盛土を行い墳丘を構築している。地山整形と墳丘盛土の北側部分は12号横穴墓の墓道により削られ、西側は斜面で流出しているために不明確となっている。地山整形は斜面に沿って直行しており、形状は隅丸方形を呈し、南北方向に3.8m以上、東西方向に2.5m以上認められた。墳丘の平面形は一辺が約4m前後の方形であると推定される。地山整形は基盤層を掘

第3層群は第1～4工程の閉塞全体を覆う。閉塞板石上面から約0.9mの範囲にほぼ水平に堆積し、深い所で約30cmの堆積が認められる。本層群はさらに3層に細分される。下層から(1)は基盤層の二次堆積で若干風化している。遺物群を包含する。(2)炭灰層で、主に灰と炭化物小片で構成され遺物上面を覆う。(3)基盤層の二次堆積で(2)層全体を覆う。本層が第2次追葬時の埋土と考えられ追葬に伴う挽火が認められた。

第4層群は羨門壁下面より約2mの範囲で約15°の傾斜で10cm前後堆積している。性状は風化が進んだクロボク質土壌で、腐植の形成により下層とは漸移層をなす。

第5層群は羨門壁上面より約2m以上の範囲で35°の傾斜で堆積している。深い所で80cm程の堆積が認められる。本層群は大きく二分される。下層は礫混りの風化土層で第4層群とは漸移層をなす。上層はきめ細かなクロボク質土層で風化が進んでいる。上下層に明瞭な区分はない。本層上面より山芋穴が掘られており、発掘時以前の表土であり、上部墳丘盛土の流入土と考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道部は床面で羨門幅0.54m、玄門幅0.75m、長さ0.52mの逆台形を呈する。床面は羨門から幅35cm、深さ5cmの落ち込みが認められる。天井部は崩落しているが推定高0.8m前後で水平に玄室天井に接続すると考えられる。玄室は平入り、略卵形を呈し、長さ1.10m、幅1.97mを測る。高さは天井部がほとんど崩落しているため不明であるが玄室中央付近で0.7～0.8m前後と推定される。天井部はドーム状を呈すると思われる。床面は標高29.65mで玄室奥壁に向かって約6～8°の傾斜で高くなっている。床面には7～10cm程度の基盤層起源の粘質な埋土を玄室から羨道部全面に行って

り下げて造り出している。上端線は現状では標高32.55mを測り下端までは約70cmの段差を持つ。墳丘は地山の二次堆積物を盛って構築されたもので最大0.4mの盛土が認められた。墳丘外表施設はない。残存する墳丘の最高所は32.7mを測る。羨門部上面からの見かけ上の墳丘は約1.2mになる。墳丘と地山整形の壁面の間は溝状となり黒色の腐植土と東側斜面からの流入土が堆積していた。この流入土および腐植土中より供献土器群が検出された。(村上久和)

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 4体が埋葬されていた。羨門部からみて頭蓋骨が右に3個、左に1個あり、玄室奥部に3体分の四肢骨が片付けられている。

1号人骨は、右(東南)に頭位をとる熟年男性で、頭は破損している。左肩関節はほぼ原位置を保つが、左右大腿骨には乱れがある。副葬品と考えられる鉄剣上に頭が、鉄鏃上に大腿骨がのる。

2号人骨は、頭を左(北西)に向けた成年から熟年にかけての男性である。大腿骨は近位を左に向けるが、右脛骨は逆方向で、左の脛骨・腓骨は玄室右奥にあって、大きく動かされていることがわかる。なお左大腿骨は、1号人骨に伴うと考えられる先端を左に向けた鉄鏃上に位置している。

3号人骨は、右(東南)に頭位をとる成年女性で、頭と上腕骨、寛骨・左右大腿骨が遺存していた。左右大腿骨は、1号人骨の大腿骨および副葬の鉄器上に位置している。

4号人骨は、玄室右(東南)の頭のみで、熟年女性である。体部骨は当然存在したと思われるが、羨門近くは土砂の流入のため、人骨は遺存していなかった。

さて、これら4体の埋葬順位は、1～3号人骨が玄室の奥へと片付けられた状態で、1号人骨が最奥にあることから、1号が初葬であると推定される。また、体部骨は遺存していないものの、片付けられていないという点で、4号人骨が最終埋葬であると考えられる。2号人骨と3号人骨は、いずれも片付けられているため、いずれが先か決め難い。したがって、11号横穴墓における埋葬は、1号→(2号・3号)→4号という順序で行われたと推定される。(田中良之)

b) 副葬品 1号人骨左側の奥壁に沿って鉄剣一振が左側腰部付近で鹿角装刀子2本が左側足部付近で細根鏃5本および広根鏃1本がそれぞれ先端を足方にして検出された。この鉄鏃群の周辺より金銅製矢筒金具が出土しており、矢筒に入れて配置されていたと考えられる。3号人骨は、左側腰部付近で鹿角装刀子1本が刀先を足方に向けて配置されていた。

2) 前庭部内

前庭部はほぼ中央付近で、層位的には最終埋葬に伴う遺物が検出された。ここでは閉塞石先端から直径約1mの範囲に灰層が見られ、その下面に須恵器高坏、坏蓋それぞれ1個体、上面に土師器碗2個体、脚付碗2個体がほぼ等間隔に検出された。須恵器高坏、土師器は破片となっており、最終埋葬時に再利用された可能性はある。

3) 墳頂部内

墳丘後方の墳端と地山整形部分が接するあたりに破砕散布の状態です須恵器甕が検出された。出土層位は地山整形部分下端の腐植土である。甕は口縁部が下位に胴部が上位に置かれている。底部は欠損している。以上の状況からこの甕は他所で破砕された後、当所に人為的に置かれたものと推定される。(村上久和)

4. 11号横穴墓出土人骨の所見

全体的に保存状態は不良であるが、成人頭蓋骨4体分、大腿骨3体分が識別された。また、片付けが行われてはいるものの、位置関係や形状から、ほとんどの部分は個体識別が可能であり、4体分の人骨が識別された。

11-1号人骨 (男性・熟年)

〈保存部位〉

頭蓋骨：頭蓋冠（右側頭部を破損）、左上顎骨片、下顎骨左半。顔面の大部分は消失している。赤色顔料の付着が認められる。残存する歯牙は以下のとおりである。

$\begin{array}{cccccccc cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / & \dot{I}^1 & / & / & / & / & / & / & / \\ \hline \dot{M}_3 & \dot{M}_2 & \dot{M}_1 & \dot{P}_2 & / & / & \circ & \times & & \times & \times & C & P_1 & P_2 & M_1 & M_2 & \circ \end{array}$

× 歯槽閉鎖 ○ 歯槽開放 ・ 遊離歯 / 破損・不明

体部骨：左鎖骨、左肩甲骨片、左上腕骨体上部片、左右大腿骨体部片、肋骨片と椎骨片少量。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起および眉弓の発達が良好であることから、男性と考えられる。

年齢：歯牙咬耗度が Broca の 2 度であることから、熟年と推定した。

〈形質〉

計測および観察の結果は付表に示す。頭型は中頭型 (M8/1=77.3)、高頭型 (M17/1=76.1)、尖頭型 (M17/8=98.5) を示した。顔面部の形態は不明である。頭蓋非計測的形質では、インカ骨、上矢状洞溝左傾、アステリオン骨 (左)、下顎隆起、前頭縫合の痕跡が認められた。

11-2号人骨 (男性・成年～熟年)

〈保存部位〉

頭蓋骨：頭頂部を破損した頭蓋冠。顔面部は失われている。歯牙は下顎右第 2 小臼歯と下顎切歯片が検出された。

体部骨：左右の大腿骨と脛骨、腓骨片。上肢及び軀幹骨はほとんど消失している。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起と眉弓の発達が良好である。また、下肢骨の筋付着部も良く発達しており、明かに男性である。

年齢：骨の大きさや骨端部の形状は明かに成人のものである。下顎第 2 小臼歯の咬耗度は Broca の 1 度であるが、咬耗はエナメル質のほぼ全域に及んでいる。歯牙については対咬歯牙との関係があるため、歯列全体を見る必要があると考えるので、本人骨の年齢については成年から熟年という広い年齢幅を推定しておきたい。

〈形質〉

後頭骨に膨隆が認められ、頭型は長頭型 (M8/1=72.3) である。下肢骨の柱状性や扁平性は認められない。頭蓋非計測的形質では、上矢状洞溝左傾、後頭乳突縫合骨 (左)、頭頂切痕骨 (左右)、前頭縫合、眼窩上縁孔 (左)、下顎隆起 (右) が見られた。顔面の特徴や身長等の詳細は不明である。

11-3号人骨 (女性・成年)

〈保存部位〉

頭蓋骨：脳頭蓋は、前頭骨、後頭骨片、頭頂骨片、側頭骨片 (左)。顔面部は上顎骨 (右側の大半は破損)、下顎骨。赤色顔料の付着が認められる。残存歯の歯式を以下に示す。

$\begin{array}{cccccc cccccccc} / & / & / & / & / & C & \circ & I^1 & I^1 & I^2 & C & \triangle & \circ & M^1 & \circ & / \\ \hline \times & \times & M_1 & P_2 & P_1 & C & I_2 & I_1 & I_1 & I_2 & C & P_1 & P_2 & \times & \times & \times \end{array}$

× 歯槽閉鎖 ○ 歯槽開放 △ 歯根のみ / 破損・不明

体部骨：左右鎖骨片、寛骨片、左上腕骨体部片、左右大腿骨。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起は小さく、眉弓の発達も弱い。また、大腿骨も細いことから女性と推定した。

年齢：歯牙咬耗度 (Broca の 1～2 度) から成年後半期と推定した。

〈形質〉

破損した部分が多いにもかかわらず、唯一顔面部が残っている個体である。上顔高は低い(63mm)、鼻根部の陥凹は弱く平坦な顔立ちである。咬合型式は鉗子咬合であり、歯槽性突顎がみられる。頭蓋非計測的形質では、眼窩上縁孔(左右)と明瞭な前頭縫合が認められた。1・2・4号人骨にみられた上矢状洞溝左傾は後頭骨が破損しているため確認できなかった。

11-4号人骨(女性・熟年)

〈保存部位〉

以下の頭蓋骨片だけが検出された：前頭骨片、頭頂部から後頭部にかけての頭蓋冠片、下顎骨片および歯牙3本。歯式を以下に示す。

$\begin{array}{c} \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \\ \times \times \overset{ウ}{M}_1 P_2 \times C \diagup \diagup \end{array}$	$\begin{array}{c} \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \\ \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \end{array}$	
× 歯槽閉鎖	ウ う蝕	/ 破損・不明

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起および眉弓の発達が弱いことから女性と推定した。

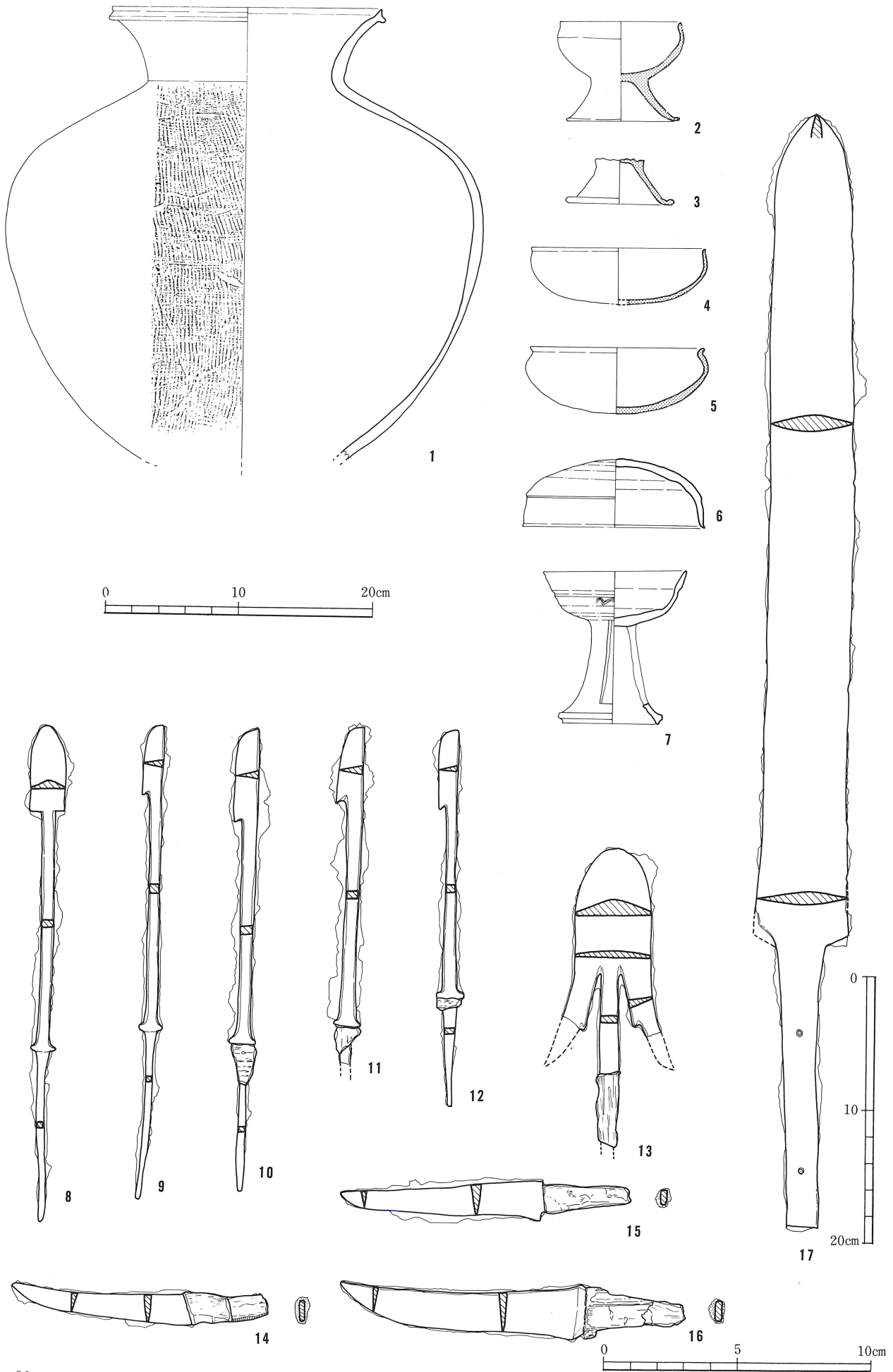
年齢：歯牙の咬耗度は Broca の2度であり、大臼歯の脱落がみられることから熟年と推定した。

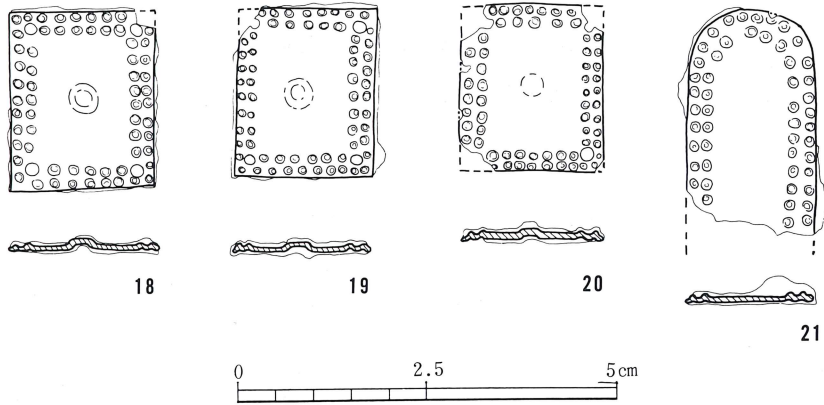
〈形質〉

顔面部や体格等の特徴については不明である。頭蓋非計測的形質では、上矢状洞溝左傾、舌下神経管二分(左)、後頭乳突縫合骨(左右)、前頭縫合、眼窩上縁孔(左)がみられ、また後頭骨に膨隆が認められた。

11号横穴墓から出土した人骨4体には、特に前頭縫合と上矢状洞溝左傾に興味深い共有関係がみられた。

(土肥直美)





第66図 11号横穴墓出土遺物実測図(2)

第20表 11号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	甕	・ 20 ・ 34 + α ・ 35.6	口縁部は、外反しながらのび、端部は外面に凹面をなす。胴部はよく張り最大径は、上方にある。	同心円のタタキの後ナデ	タタキの後カキ目	灰白色	2～3mm大の石英粒を含む	不良		
2	脚付碗	・ 8.8 ・ 7.5 ・ 9.5	坏部の口縁部は、内湾しながらのび、端部でわずかに直立するように屈曲し、肥厚し丸い。脚部は、下外方にのび、端部は丸い。	器面の磨滅のため調整不明	ナデ ヘラミガキ	赤褐色	白色砂粒を少量含む	やや不良	土師器	
3	脚付碗	・ 8.2 (底径) ・ 3.4 + α ・ -	脚部は下外方にのび、脚端部は肥厚し丸い。	ナデ	ナデ	茶褐色	雲母、石英粒を含む	良好	土師器	
4	碗	・ 13 ・ 4.5 ・ 13.2	坏部の口縁部は、内湾しながらのび、端部でわずかに、直立ぎみに屈曲し丸い。脚部は、下外方にのび、端部は肥厚し丸い。	ナデ	ナデ	茶褐色	雲母、石英粒を含む	良好	土師器	
5	碗	・ 13 ・ 5 ・ 13.6	口縁部は、内湾しながらのび端部で、外側に屈曲し丸い。底部は、浅く平ら。	器面が磨滅しているため調整不明	ナデ	赤褐色	白色砂粒を少量含む	不良	土師器	
6	坏蓋	・ 13.5 ・ 5.1 ・ -	口縁部はわずかに外反しながらのび端部は、内傾する面を有し、外へはねる。外面は、丸みをおびた稜がみられる。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	外青灰色 内灰赤褐色	1～3mmの白色砂粒、長石粒を含む	良好		
7	高坏	・ 10.7 ・ 11.6 ・ -	坏部の口縁部は、外反しながらのび端部は、細くなり丸い。外面には、稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、端部付近に凸面をなし端部は、丸い。二対の長方形スカシ窓あり。	ナデ 調整ナデ	ナデ 坏部に櫛描波状文	灰黒色	白色砂粒を少量含む	良好		

第21表 11号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
8	鉄鏃	18.5	3.2	1.3	0.4	0.3	0.3	
9	同上	17.6	2.6	0.7	0.4	0.2	0.35	
10	同上	17.2	3.5	0.8	0.5	0.3	0.3	桜樹皮巻残存
11	同上	12.5以上	2.8	0.9	0.5	0.3	0.3	
12	同上	14.0	3.0	0.7	0.4	0.2	0.3	
13	同上	11.2以上	8.1	2.8	0.6	0.3	0.3	重抉、木質残存
14	刀子	9.5以上	6.8	1.1	0.9	0.2	0.2	鹿角製柄残存
15	同上	10.8以上	7.5	1.5	0.9	0.3	0.2	同上
16	同上	12.7以上	9.1	2.0	1.2	0.3	0.3	同上
17	鉄剣	82.8	61.8	6.6	3.4	1.2	0.6	目釘穴2個
18	矢筒の飾金具							
19	同上							
20	同上							
21	同上							

12号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

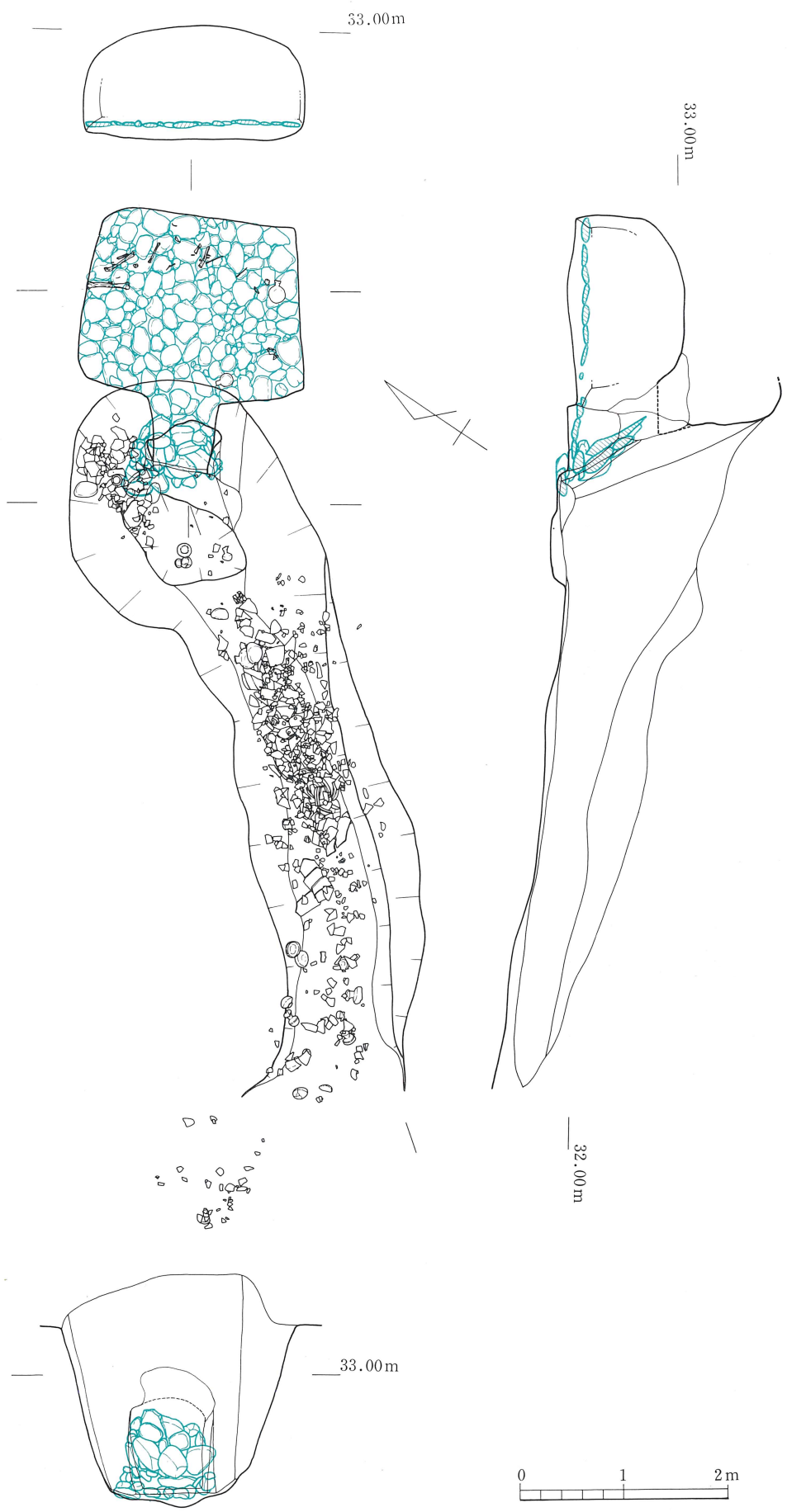
12号横穴墓は北支群の中央北側に位置し、南西方向に開口する横穴墓である。斜面の上部、標高31～34m付近に設けられている。全長8.9mを測り、主軸をN-56.5°-Eにとる。玄室、羨道、墓道ともに保存状態は良い。先行する11号横穴墓の墳丘東側周溝に沿って墓道が掘削され、墳丘を避けるために、墓道主軸は曲線を描いている。玄室には落盤土、流入土が見られたものの、保存状態は比較的良好であった。なお、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査はまず、墓道の平面形の確認と墓道内遺物の埋没状況の検討を目的とした縦・横土層断面図や遺物等の平面図作成を実施し、その後、玄室と羨道部分の調査を実施した。玄室床面には供献、副葬遺物の他に、人骨片も検出した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長7.5m、羨門部で上部幅2.2m、底面幅0.9mを、墓道入口で上部幅1.2m、底面幅0.7mを測る。壁高は最奥部の羨門付近で2.1mを測る。墓道の床面はほぼ平坦であり、羨門に向かって緩い傾斜で上る。なお、羨門の前面約1.0mの範囲に深さ15cmの浅い掘方が設けられている。なお、墓道先端から約5m羨門に寄った位置まで墓道幅は約0.3～0.7mと狭く、その後約0.9mに拡がり羨門部に接している。墓道の最奥部は約65°の傾斜をもつ壁となり、側壁と接している。側壁の傾斜は下部で80°である。

羨門の入口部分は上部が崩落している。立ち上り部分から復元すると羨門を囲んで7～10cmの深さに逆U字状の額縁状の掘りこみを設けていることがわかる。その高さは推定90cm、幅は下端で約70cm、上端で約80cmを測



第67图 12号横穴墓平·断面图

る。さらにその内側に高さ80cm、幅約60cmの羨門が穿たれている。羨道と墓道の間には約15cmの段差が設けられている。閉塞施設は額縁状の掘りこみを覆うように構築されている。配石の状態や墓道内埋土の観察からこの施設は追葬の過程で一度取り除き、再構築されていることが明らかになった。まず、羨門直下に人頭大からこぶし大の河原円礫を17個置いているが、これは先行する埋葬時の閉塞の残存部である。次にこの円礫の上に直接もしくは一定の埋土を行い、板石2個を敷く。これを根石とし、2枚の安山岩板石を立てかけて羨門を塞いでいる。さらにこれらを固定するように12個の河原石を板石の回りに配置している。この円礫は長径30cm大のものから、人頭大のものまでである。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土は比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で8層群22層に分層した。以下では堆積順に説明する。なお、本横穴墓の断面土層図は墓道全体が湾曲するために中心軸で作成できず、途中で屈折点を設けている。そのために堆積状態は傾斜などを正確に反映していない。

第1層群（Ⅸ・Ⅻ層）は地山と横穴墓形成以前の旧表土である。

第2層群（Ⅹb層）は墓道形成直後に床面に堆積した基盤土の二次堆積物であり、約20cmの層厚がある。墓道全域の床面に認められる。本層中の墓道端部付近に直径50cmの大石を含む3個の地山石の配石があるが、その性格は不明である。

第3層群（Ⅹa層）は羨門から1.5mの位置まで堆積し、上面は羨道に向って下降する。下位層群に類似した性状を示し、同層と下部の閉塞施設を覆って堆積している。僅かに炭化物片を含む。全体によくしまっているが、本層群上面に特に固い面がある。本層群を初期の埋葬時の埋土と推定している。

第4層群（ⅩⅢa～d層）は下位層群と一部で地山を切り、墓道全体に堆積している。全体に暗褐色の礫混り土であり、炭化物片を多く含む。本層中には須恵器片を主とする遺物C群がある。また、閉塞から4.7m付近の標高31.65mの位置に炭化物片の集中する部分がある。これは長さ0.5m、幅0.4m、厚さ1cm以下のものである。この地点で焼成されたものとみられた。

第5層群（Ⅶa～e層）は羨門部前面と閉塞施設を覆い、約45°の傾斜で堆積している。茶～黒褐色土であり、下部で硬くしまっている。閉塞に伴う埋土と考えられる。本層群の上部は凹凸があり、腐植土混入の風化土層と接している。本層群には遺物B群が分布する。

第6層群（Ⅳ～Ⅵd層）は羨門直下から墓道側6mの範囲に約15°の傾斜で堆積している。本層群の下部は黄～茶褐色礫混り土であり、上部は漸移しクロボク質の腐植土となる。上部からの侵食は下部まで及んでおり、長期間の地表面をなしていたと推定される。本層群中に遺物B群が分布している。炭化物片も多く含んでいる。また、本層群上部の羨門付近に遺物A群が分布する。

第7層群（Ⅱ・Ⅲ層）は褐色の粘質土であり、墓道の自然埋没に伴う風化流入土とみられる。

第8層群（Ⅰ層）は現地表をなす堆積物の一群である。

なお、本横穴墓の墓道前面の斜面部において横穴墓形成以前の風化土層を覆う堆積物を確認した。これは16号横穴墓でも確認されたものである。本横穴墓では墓道と接する付近の標高30.8～30.9m付近において地山の削り出しも認められ、この盛土が墓道前面の平坦面の形成と拡大を意図したものである可能性を推定させた。

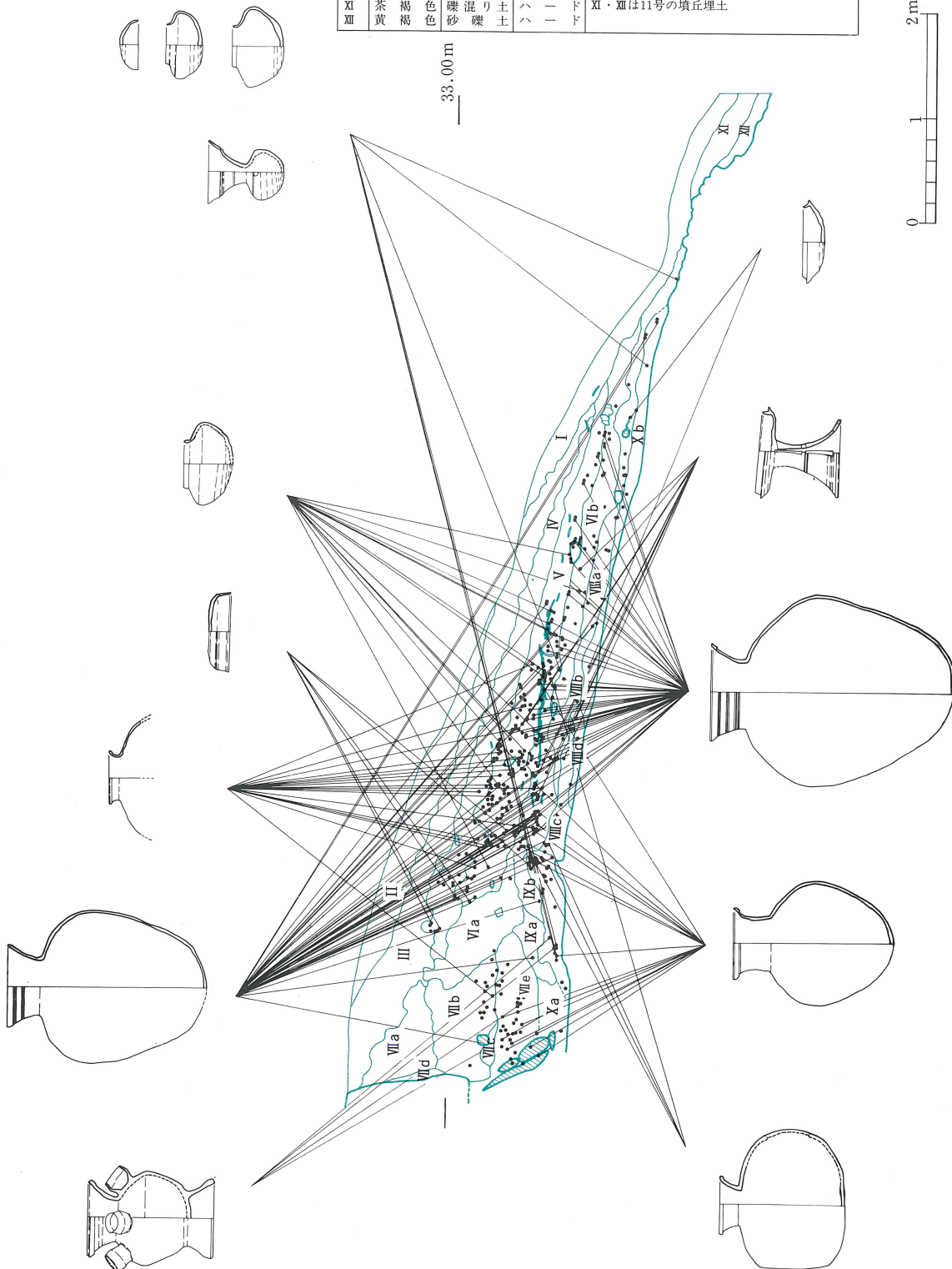
また、本横穴墓の北側の斜面にある溝状の遺構は、11号横穴墓の斜面上部、10号横穴墓の南東側に接して設けられているために、これらの初期の横穴墓と関連するものと考えていたが、遺構の切り合い関係と、出土遺物が本横穴墓と複数の接合関係を示すことから、何らかの関連遺構であると推定された。この溝状遺構内の埋土は墓道内第6層群に類似し、下部で茶褐色礫混り土であり、上部に漸移しクロボク質の腐植土となる。

2) 羨道、玄室

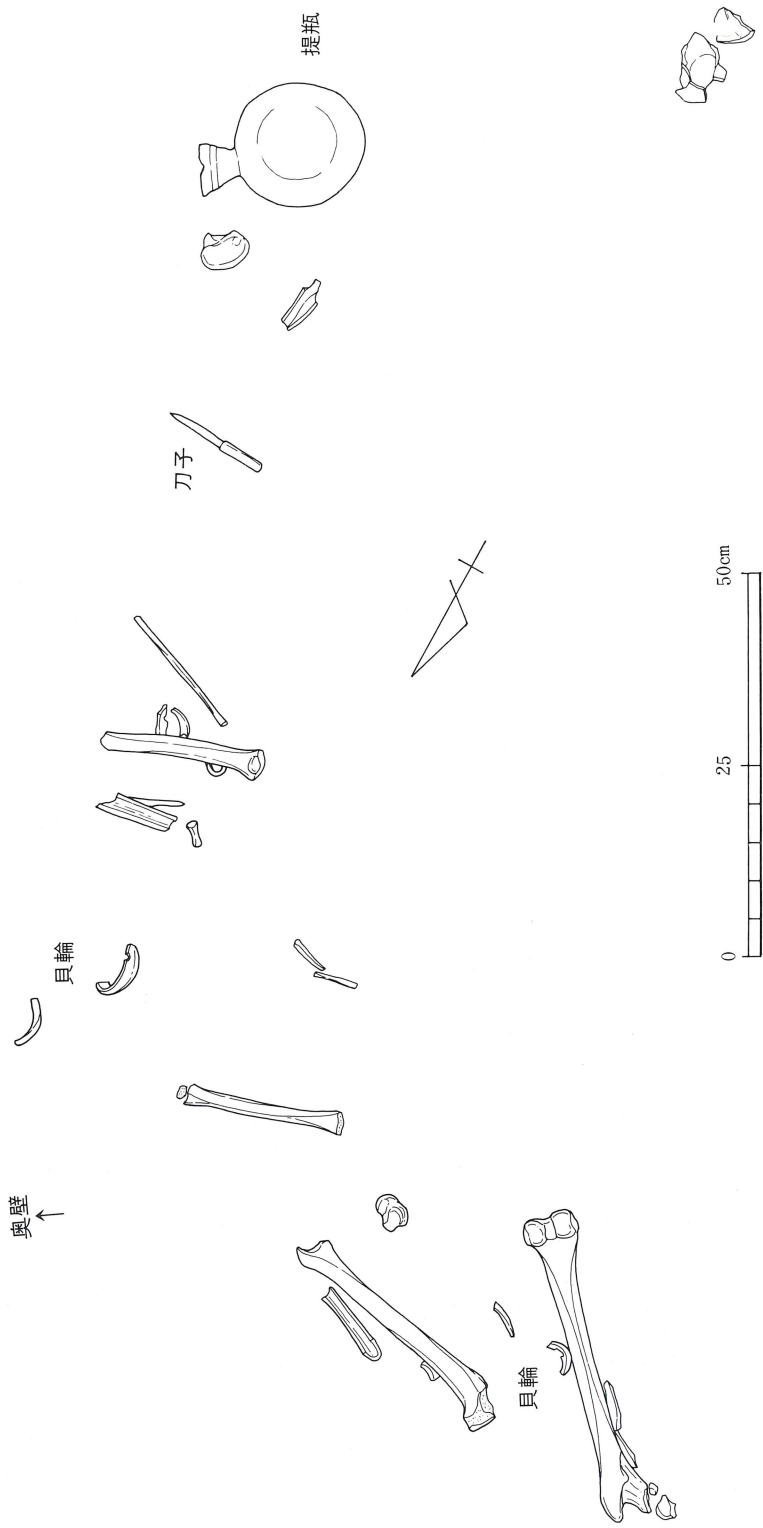
羨道は長さ0.7m、玄門幅0.7mである。玄室は長さ1.7m、裾部幅1.7m、奥壁幅1.9mの隅丸方形を呈する。平面観では右側壁の隅部のみがより鋭角をなしている。玄室床面には排水溝はなく、羨道部中央のみに幅16～19cm、深さ約5cmの排水溝が掘られている。玄室と羨道全体には10cm程度の埋土を行い、人頭大からこぶし大の河原石を敷きつめている。左奥壁ではこの礫床上に2個の河原石を配置し、石枕としている。天井は比較的保存

12号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I	茶褐色	腐植土	ソフト	I～III層は造成時埋土 土器片を含むが流れ込みと判断。 人為的な一括埋土と推定、中～下位に土器を包含。 上位に土器群、風化土(?)
II	黄褐色	礫混り土	ソフト	
III	明褐色	粘質土	ソフト	
IV	暗褐色	クボクボ質土	ソフト	
V	黄褐色	礫混り土	ソフト	
VIa	暗褐色	礫混り土	ソフト	最終埋葬閉塞埋土 VIII a～VIII c・X b 初葬埋土
VIb	暗褐色	礫混り土	ソフト	
VIIa	茶褐色	土塊	ハード	
VIIb	暗褐色	礫混り土	ソフト	
VIIc	赤褐色	礫混り土	ハード	
VIIe	黒褐色	混り土	ソフト	IX a～X a 追葬埋土
VIIIa	暗褐色	粘質土	ソフト	
VIIIb	暗褐色	粘質土	ソフト	
VIIIc	暗褐色	粘質土	ソフト	
IXa	暗褐色	粘質土	ソフト	XI・XIIは11号の墳丘埋土
IXb	暗褐色	粘質土	ソフト	
Xa	黄褐色	砂礫	ハード	
Xb	黄褐色	砂礫	ハード	
XI	黄褐色	砂礫	ハード	
XII	黄褐色	砂礫	ハード	



第68図 12号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第69図 12号横穴墓玄室内人骨出土状態

がある。

まず、B群としては須恵器の高坏（第72図29・33）、子持ち壺（第72図32）、埴（第71図2・4）、壺蓋（第71図1、第72図28）、甗（第71図3）、横瓶（第72図37）、土師器の高坏（第72図34）などがある。何れも集中せず、一部もしくは全体が破碎され、石などととも埋められている。

C群は羨門から墓道側に約2mほどのところから墓道端部までの広い範囲に分布している。須恵器の坏、甕を主体とする多量の破片で墓道が埋めつくされた感がある。須恵器には坏蓋（第71図5～7・10～16・18）、有

状態が良く、ドーム形を呈する。高さは中央付近で地山面から1.1mを測り、礫床上面から約0.9mの高さを測る。羨道部とは段で境界を設けている。なお、玄室壁面には掘削時の工具痕が明瞭に残されている。（吉留秀敏）

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 少なくとも2体が確認されている。1体は玄室左奥に散在する成人男性で、全く原位置を保っていない。もう1体は、玄室右側の小児頭蓋骨であるが、原位置かどうか不明である。（田中 良之）

b) 副葬品 玄室内には墓道部側に若干の落盤と流入土があったが、奥壁側は礫床が露出遺存していた。清掃後、床面上に人骨片、須恵器、鉄器などを検出した。副葬供献遺物としては、まず右側裾部付近と右側壁に近い部分にそれぞれ提瓶があり、玄室中央奥壁よりに刀子2（第76図46・47）と耳環1（第76図49）が点在していた。やや左側に寄ってイモ貝製腕輪2（第76図50・51）が約70cm離れてあった。また、奥壁左隅部に近接して鉄鏃1（第76図48）が敷石間に突き刺した状態で出土した。

2) 墓道内

墓道内ではA～Cの3群の遺物を検出した。出土した状況と層位からみてB群が最終埋葬時の埋土後の供献土器群である。C群は最終埋葬以後の土器群、A群とB、C群の上部はその後の遺物と先の遺物群の二次的な流入分布

蓋高坏（第71図19・20・22・23、第72図29・33）、埴（第71図9、第72図26）、壺蓋（第72図25）、甗（第72図27）、提瓶（第72図36・38）、器台（第72図39）、甕（第73図40、第74図41、第75図42、第76図43）などがある。

甕のうち大甕（第75図42）の破片の一部は14号、15号横穴墓の玄室上部の攪乱土中と、先の北側の溝状遺構内からも出土した。

A群は細片が多いが、有蓋高坏（第71図21・24）などがある。遺物は墓道内埋土の上部から墓道の両壁上の平坦面まで分布している。

本横穴墓北側の10号横穴墓との間に、斜面に沿った溝状遺構がある。これは幅約3.0m、長さ約7mを測り、11号横穴墓周溝に続く。埋土は黒褐色の風化土である。この遺構内からは7個体分の須恵器が出土している。その構成は甕4、提瓶1、坏1、高坏1である。このうち甕1、提瓶1、高坏1は本横穴墓A群、C群に接合関係がある。その他の甕3、坏1は小破片1～2点の資料である。

（吉留秀敏）

4. 12号横穴墓出土人骨の所見

玄室の奥壁寄りに2体分、入口側に頭蓋骨片1体分が検出された。これらを検討した結果、成人男性が1体以上、小児が1体、計2体以上の被葬者が埋葬されているという推定が得られた。

〈保存部位〉

頭蓋骨：成人のものと思われる前頭骨片と小児のものと思われる右側頭骨片の2体分が検出された。

体部骨：成人のもの和小児のもの2体分が検出された。成人のものは、右大腿骨、右脛骨、右上腕骨骨体部。小児のものは、左脛骨、左腓骨。

〈性別・年齢の推定〉

性別：小児の性別は不明である。成人の性別は、体部骨については粗線・ヒラメ筋線の発達が著明であることから、男性の可能性が強い。また、頭蓋骨も側頭線が良く発達しており、男性の可能性が強い。しかし、人骨はすべて原位置から動かされており、これらが同一個体に属するものかどうかは断定できない。

〈形質〉

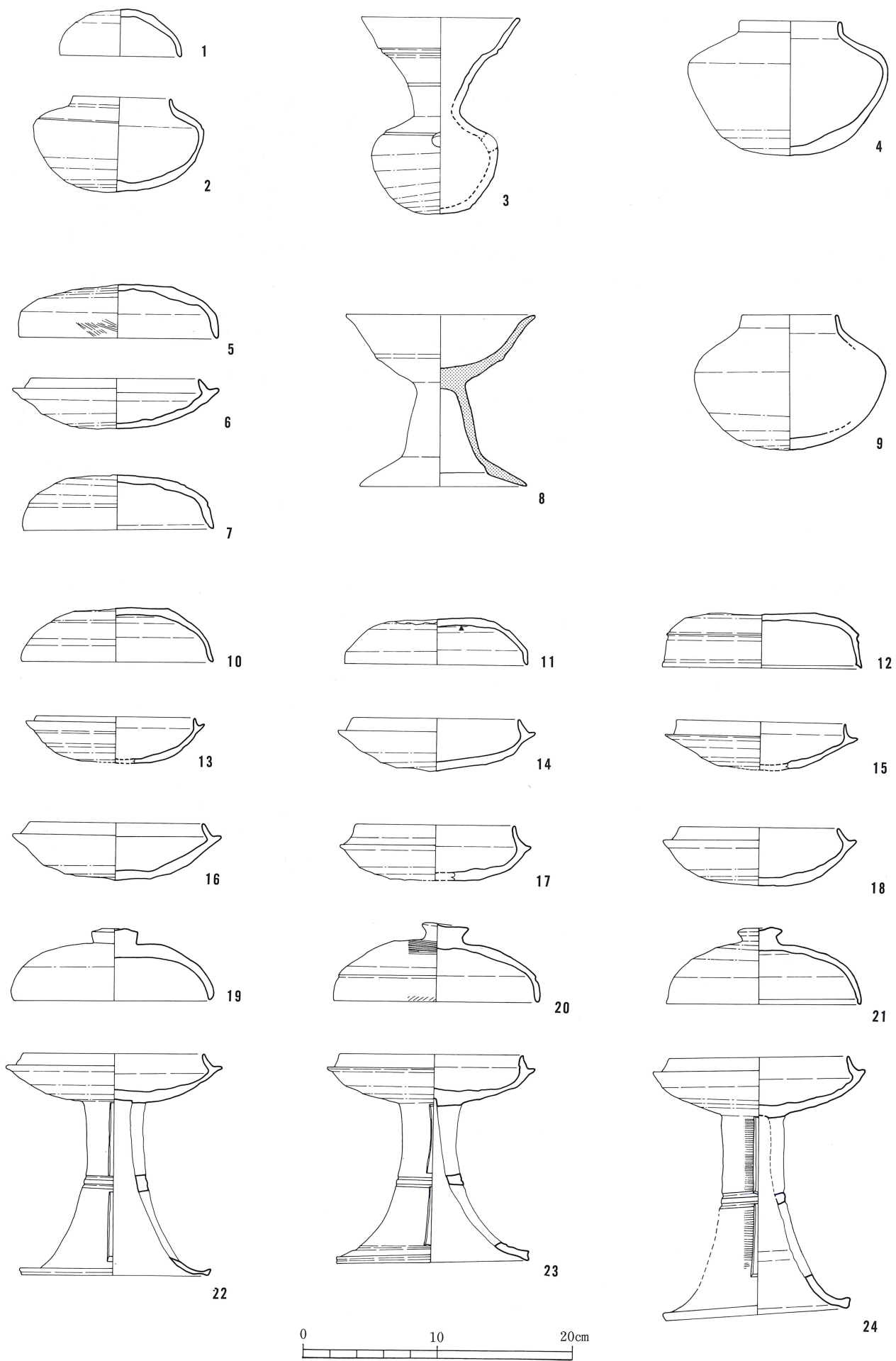
成人男性のものと考えられる右大腿骨の最大長(408mm)より、ピアソンの式を用いて求めた推定身長は158.0cmであった。(土肥直美)

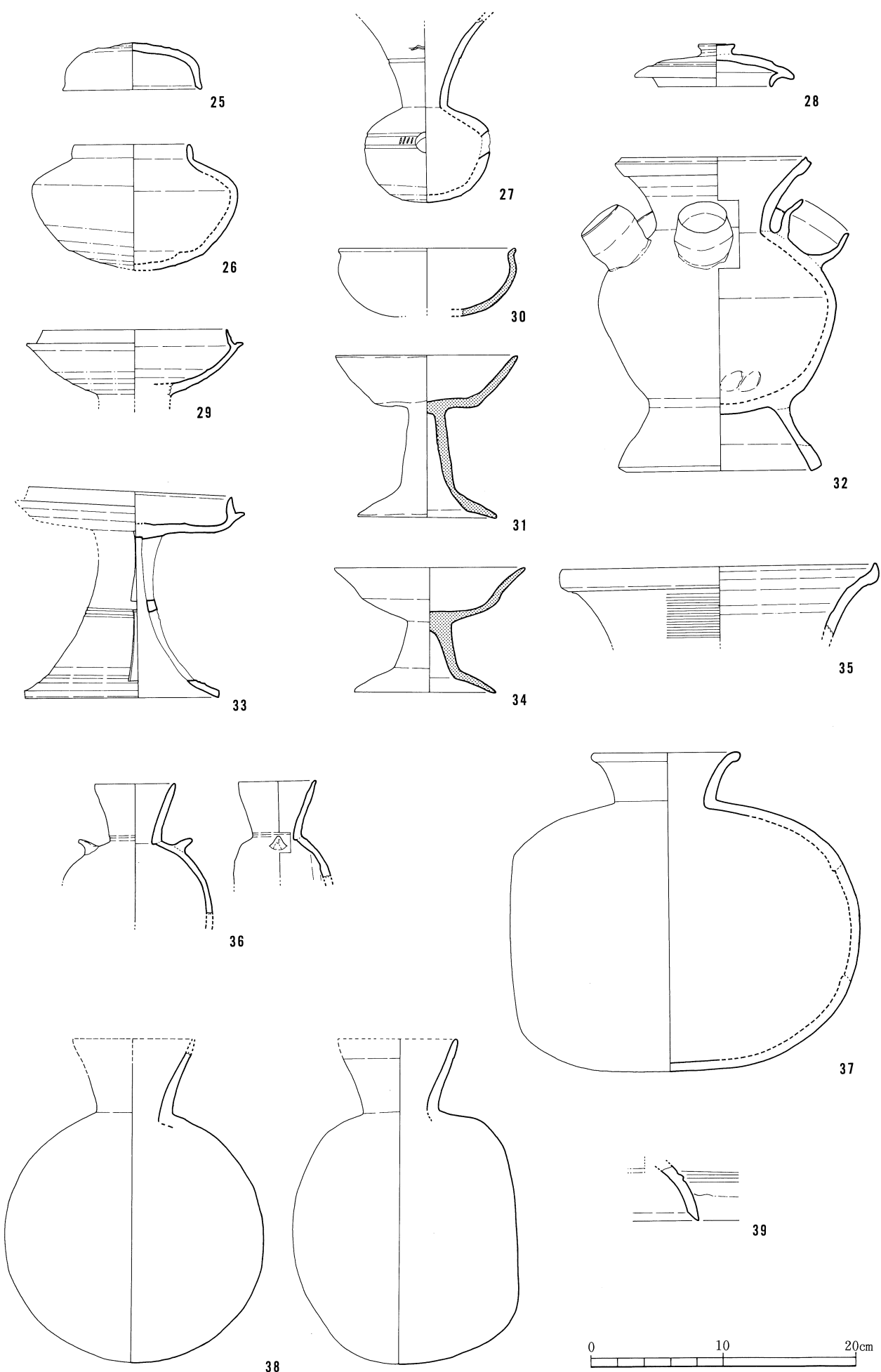


71図-11

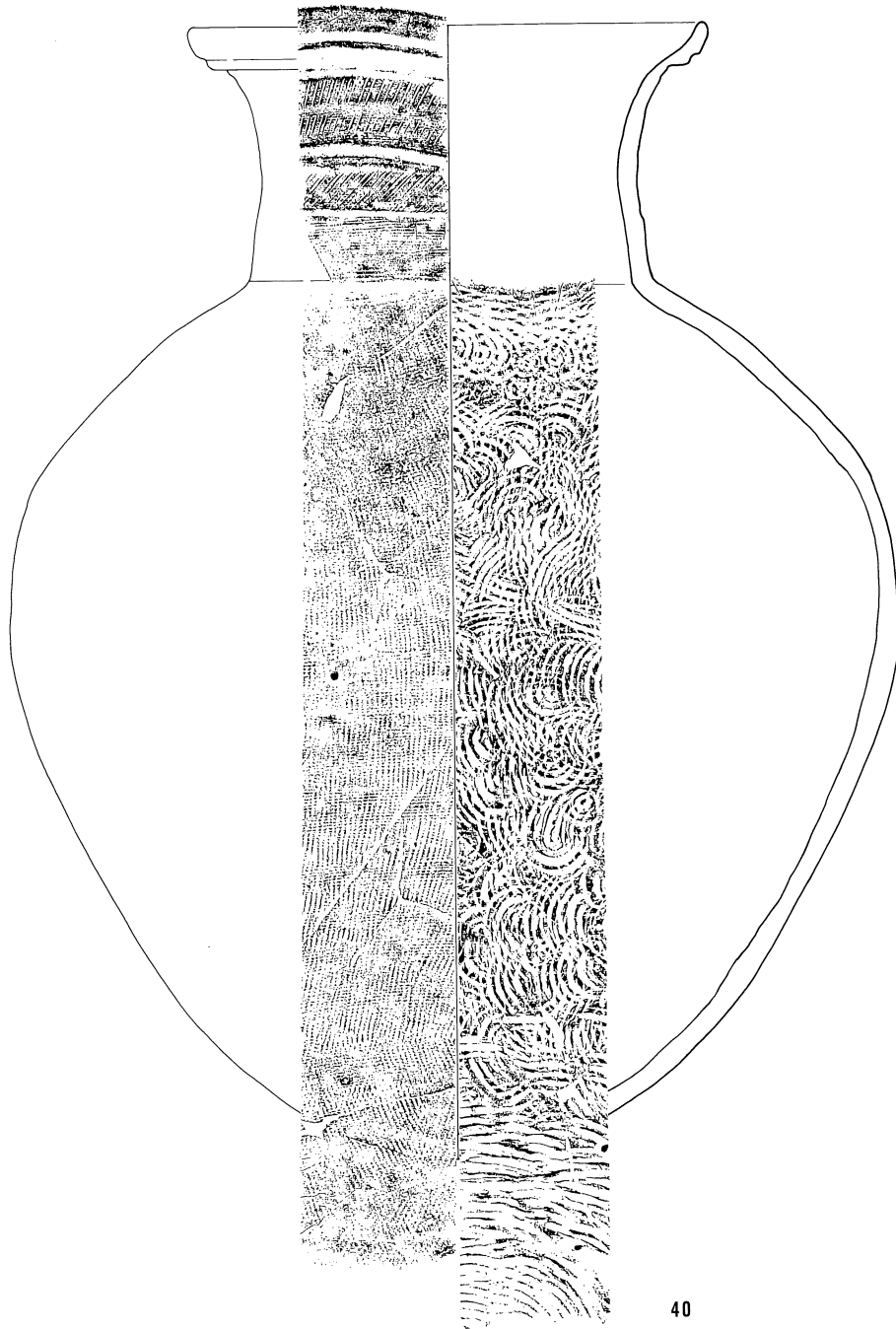
提瓶胴部片

第70図 12号横穴墓出土土器へラ記号

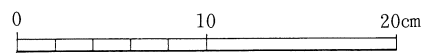




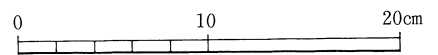
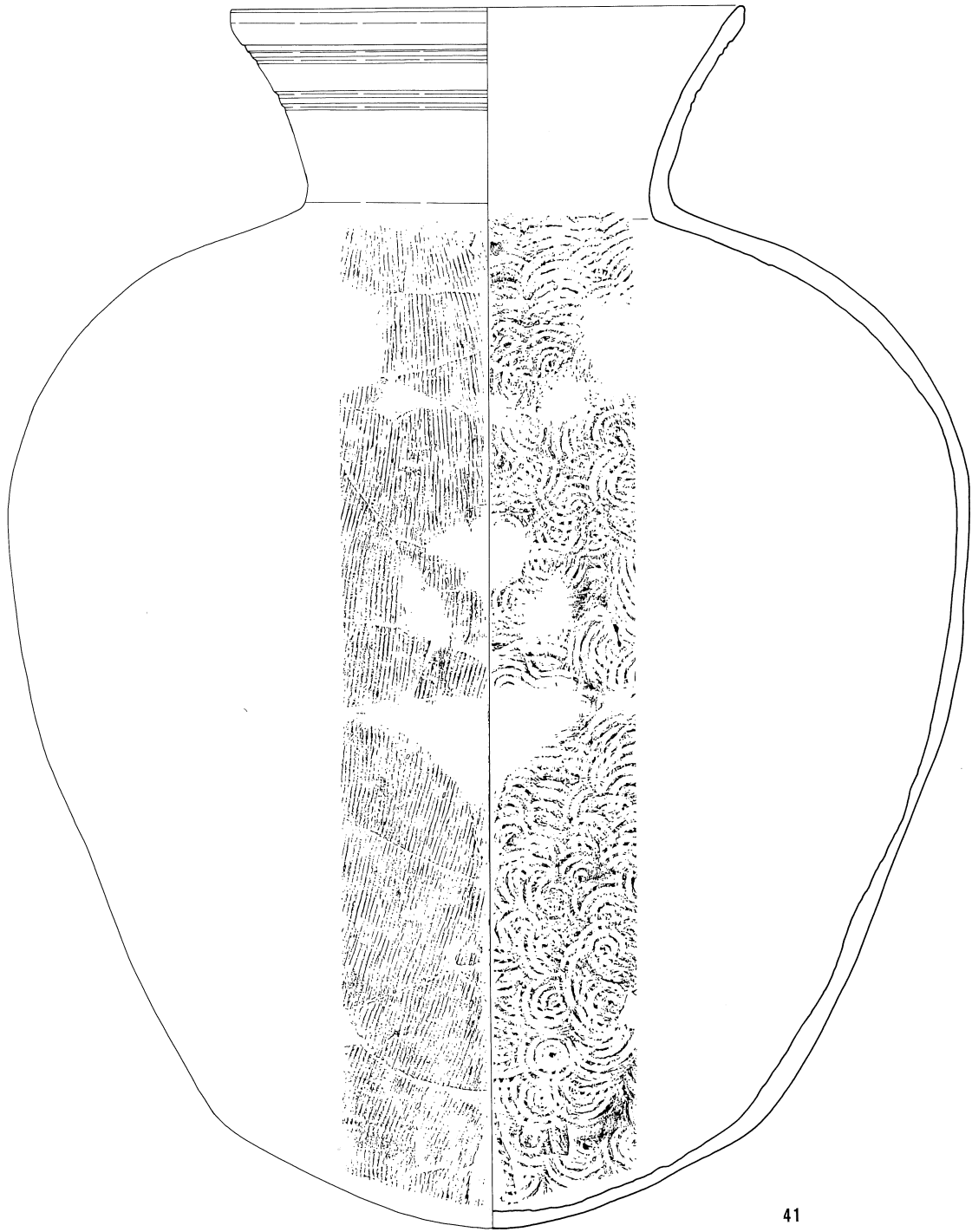
第72図 12号横穴墓出土遺物実測図(2)



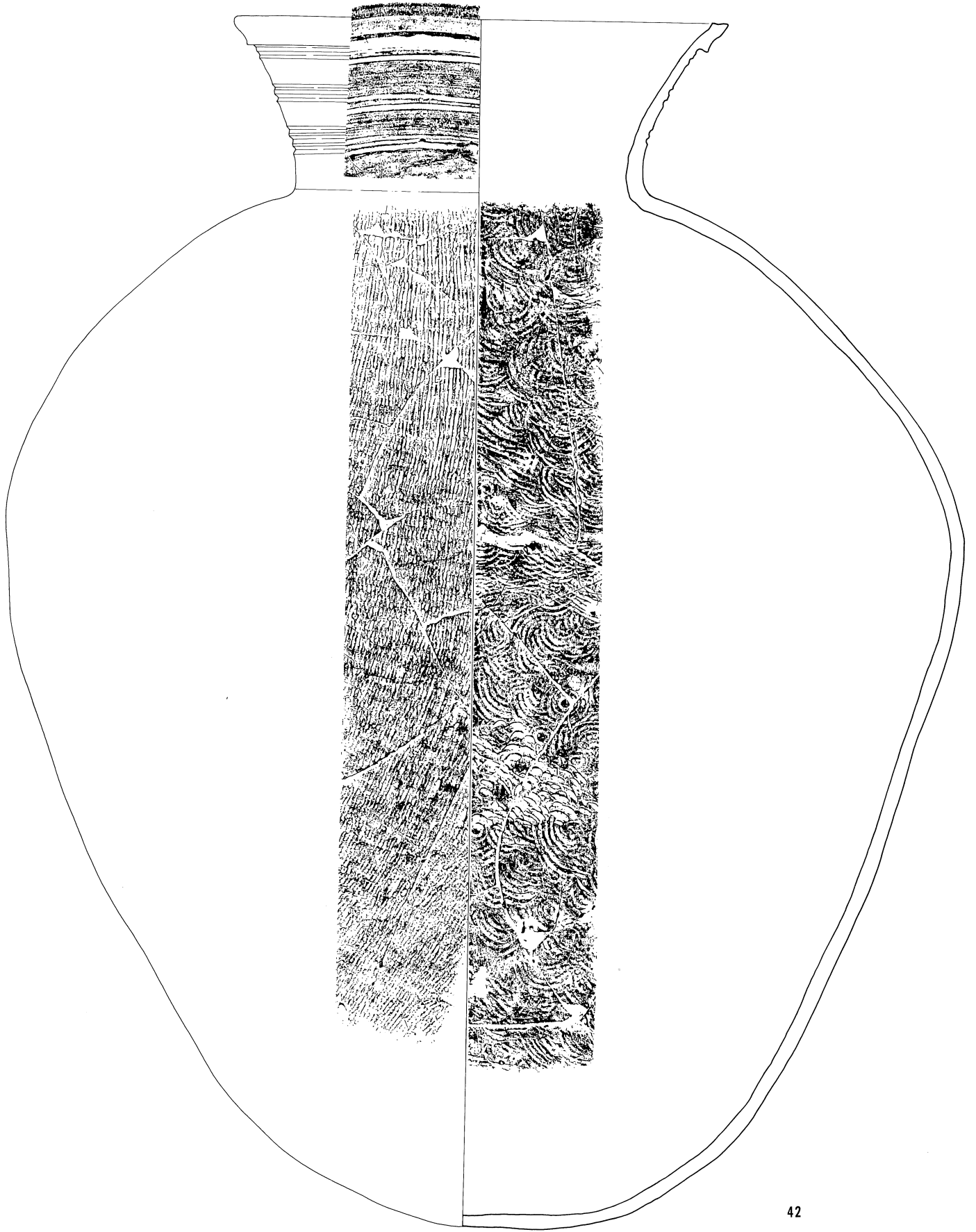
40



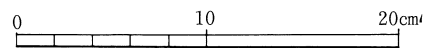
第73图 12号横穴墓出土遗物实测图(3)

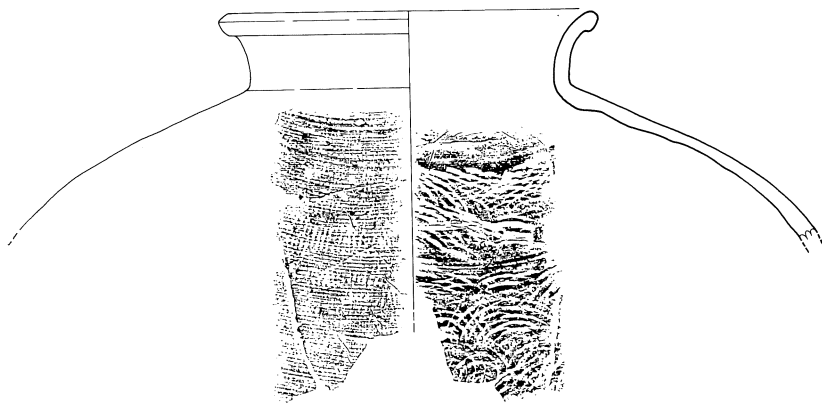


第74图 12号横穴墓出土遗物实测图(4)

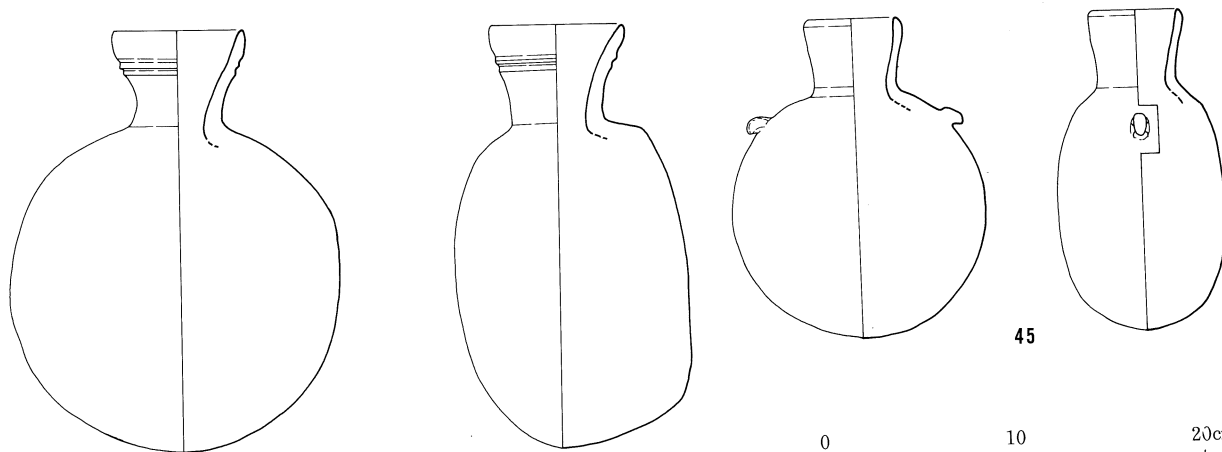


42





43



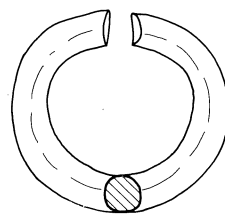
44

45

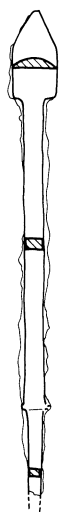
0 10 20cm



46



49

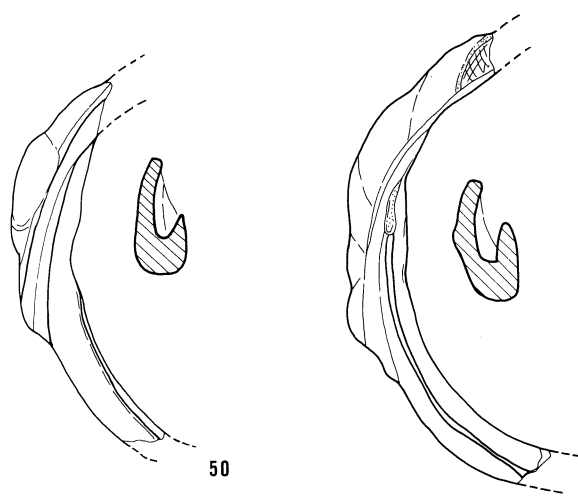


48



47

0 5 cm



50

51

0 2.5 5 cm

第76图 12号横穴墓出土遺物実測図(6)

第22表 12号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	罎蓋	・8.9 ・3.4 ・	口縁部は、外反しながらのび端部は丸い。 天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm前後の 白色砂粒を 少量含む	良好		
2	短頸壺	・7.2 ・7 ・12.6	口頸部は、短く直立してのび、 端部は丸い。 胴部は、だ円形を呈し、底部は 丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～2mm の角閃石、 白色砂粒を 少量含む	良好		
3	甗	・11.8 ・14.4 ・9.4	口頸部は、外反しながらのび、 端部付近でさらに屈曲し、外面 に2本の沈線をなす端部は、内 傾する面をなす。胴部はややだ 円形を呈し、やや上方に穿孔、 その上方に一本の沈線あり。 底部は、やや平ら。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～2.5mm の白色砂粒 を少量含む	良好 堅緻		
4	短頸壺	・7.3 ・10 ・14.8	口頸部は、短く、直立してのび 端部は丸い。 胴部は、よくはり最大径は、上 方にある。底部は、やや平ら。	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡褐色	精緻	良好 堅緻		
5	罎蓋	・14.5 ・4 ・	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 天井部は、やや高く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～2.5mm の白色砂粒 を少量含む	良好		
6	坏身	・12.4 ・3.7 ・15.1	たちあがりは、内傾して、端部 は丸い。 受部は、上外方にのび、端部は 丸い。底部は浅く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～2mm の白砂粒 をやや多量 に含む	良好		
7	罎蓋	・13.9 ・4.1 ・	口縁部は、外反しながらのび、 端部は、丸く内面にうすい沈線 を施す。外面にはうすい稜がみ られる。天井部は、やや高く丸 みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰茶褐 色	1～3mmの 白色砂粒、 黒色砂粒を やや多量に 含む	良好		
8	高坏	・13.9 ・12.7 ・	口縁部は、外反しながらのび、 中央付近で屈曲し、さらにのび 端部は丸い。脚部は、下外方に のび端部付近で屈曲し、さらに 外反する。端部は丸い。	器面が磨滅 しているた め不明	ケズリ痕 器面が磨滅 しているた め不明	赤褐色	0.5～4mm の白色透明 砂粒を多量 に含む	不良	土師器	
9	短頸壺	・7 ・10 ・14.1	口頸部は、短く内傾しながら直 立にのび、端部は丸い。胴部は、 丸みをおび最大径は、やや上部 にある。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色 黒灰色	0.5mm前後 の白色砂粒 を少々含む	良好	1～9は一括 出土	
10	罎蓋	・14.1 ・3.9 ・	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 天井部は、やや高く平ら。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	青灰色	1～3mmの 白色砂物を 含む	良好		
11	罎蓋	・13.5 ・3.4 ・	口縁部は、外反しながらのび、 端部は丸い。 天井部は、やや低く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り未調整	茶褐色	精緻	良好		内面底部 「II」
12	罎蓋	・14.8 ・4 ・	口縁部は、外反しながら、直下 にのび端部は内傾する面をな す。外面には、稜がみとめられ る。天井部は、やや低く平ら。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰～灰色	精緻	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
13	坏身	・11.7 ・3.4 ・13.1	たちあがりは、短くわずかに内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は、浅く丸みをおびる。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
14	坏身	・12.2 ・4 ・14.5	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。底部は、浅く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗青灰色	大粒の石英粒を含む	良好 堅緻		
15	坏身	・12.5 ・3.6+ α ・14.1	たちあがりは、ほぼ直立しながらのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。底部は、浅く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好	反転復元	
16	坏身	・12.8 ・4.3 ・15.4	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。底部は、やや浅く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
17	坏身	・11.6 ・4.1+ α ・14	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は、浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	0.5mm前後の白色砂粒を微量に含む	やや不良		
18	坏身	・11.8 ・4.3 ・14.2	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は、やや深く、やや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3.5mmの砂粒を多量に含む	良好		
19	坏蓋	・14.3 ・5.3 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ ナデ?	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色 灰色 黒灰色	精緻	良好		
20	坏蓋	・14.9 ・5.8 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。外面頂部に、ツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ カキ目 口縁端部刻目	青灰色	1～5mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
21	坏蓋	・14.6 ・5.5 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。内面に1本のうすい沈線を施す。天井部は、高く丸みをおびる。外面頂部にツマミがつく。	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	2～3mmの不透明砂粒を含む	良好		
22	有蓋高坏	・13.4 ・16.4 ・16	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。坏部は、浅く平ら。脚部は、下外方にのび、端部は、面をなす。外面中央部に、2本の沈線あり。長方形二段スカシ窓。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡紫灰色	1～6mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
23	有蓋高坏	・13.4 ・15.4 ・15.2	たちあがりは、直立してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。坏部は、浅く平ら。脚部は下外方にのび、端部は、面をなす。外面中央部に2本の沈線を施す。長方形2段スカシ窓。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色 ～青灰色	精緻	良好		

番号	器種	法量	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
		・口径 ・器高 ・胴部最大径		内面	外面	色調	胎土	焼成		
24	有蓋高坏	・13.2 ・19.1 ・15.6	坏部のたちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、肥厚しながら水平にのび、端部は丸い。脚部は、下外方にのび、端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線をなす。	回転ナデ タタキ痕	回転ナデ 回転ヘラケズリ カキ目	青灰色	1～5mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好	10号、18号横穴墓墓道遺物と接合	
25	罎蓋	・10.2 ・3.6 ・—	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は、内傾する面をなす。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 淡青灰色	精緻	良好 堅緻		
26	短頸壺	・8.6 ・9.3 ・15.4	口頸部は、直立してのび、端部は丸い。胴部はよくはり最大径は上方にある。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3.5mmの白色砂粒を多量に含む	良好		
27	甗	・口縁部 ・欠損 ・13.6+ α ・9.2	口頸部は、外反しながらのび、外面中央部に1本の沈線がある。胴部は、だ円形を呈し、やや上方に穿孔あり、外面に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 波状文、櫛 描列点文 ナデ回転ヘ ラケズリ	淡赤褐色	微細砂粒を含む	良好 やや軟質		
28	蓋	・8.4 ・3.3 ・12 (最大径)	口縁部は、内傾してのび端部は丸い。受部は、下外方にのび、端部は丸い。天井部は平らで、外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリの上か ら回転ナデ	灰色	精緻	良好 堅緻		
29	有蓋高坏	・13.6 ・5.1+ α ・16	たちあがりは、内傾してのび、端部は細くなり丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。坏部は、やや深い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～1mm大の石英粒?を含む	良好		
30	甗	・13.4 ・5 ・—	口縁部は、内湾しながらのび、端部は外反し丸い。	ナデ 器面が磨滅 しているた め調整不明	ナデ 器面が磨滅 しているた め調整不明	赤褐色	1mm前後の白色透明砂粒を含む	やや不良	土師器 反転復元 一部にうすく スがついて いる	
31	高坏	・13.4 ・12.2 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。坏部の底部は平ら。脚部は下外方にのび、端部付近で、さらに屈曲し、端部は丸い。	丁寧なナデ	ナデ 指オサエ	赤褐色	1mm大の白色砂粒、1.5mm大の不透明粒子を含む	良好	土師器	
32	脚付小持壺	・13.8 ・23.5 ・17.9	口頸部は、外反しながらのび、端部は肥厚し段をなす。最端部は、凹面を呈す。胴部は、やや外外面肩部に、5つの口縁部がのび、端部は丸い。脚部は、下外方にのび端部は、面をなす。	回転ナデ ナデ、指頭 痕	ナデ 回転ナデ ナデ	暗赤褐色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
33	有蓋高坏	・15 ・15.5 ・17	たちあがりは、直立してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。坏部は、浅く平ら。脚部は、下外方にのび端部は、面をなす。外面には、2本の沈線を施す。長方形2段3方スカシ窓。	回転ナデ 調整ナデ、 指オサエ	回転ナデ	青灰色 黒灰色	精緻	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
34	高坏	・14.1 ・9.4 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は、丸い。脚部は、下外方にのび端部付近で外側にさらに屈曲し丸い。	器面が磨減しているため調整不明	ヘラミガキ・ケズリ 器面が磨減しているため調整不明	赤褐色	精緻	良好	土師器	
35	壺	・23.6 ・5.2+ α ・-	口頸部は、外反しながらのび、端部はややとがり、面をなす。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	淡青灰色	0.5～1mmの白色砂粒を含む	良好	15号横穴墓玄室遺物と接合	
36	提瓶	・6.1 ・10+ α ・11.5+ α	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部両肩にツノ状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ カキ目	青灰色	精緻	良好		
37	横瓶	・11.3 ・23.6 ・26.2	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部は、だ円形を呈し、底部は平ら。	磨減が著しく調整不明	カキ目 磨減が著しく調整不明	黄灰色	精緻	不良	10号横穴墓墓道遺物と接合	
38	提瓶	・口縁端部 ・欠損 ・9.1 ・24.2 ・19.3	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部は、円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒褐色	精緻	良好 堅緻	釉状のものが、付着	
39	器台	・- ・- ・-	脚部端部付近の外面に、2条の沈線あり。端部は内傾する面をなす。	器面が磨減しているため調整不明	器面が磨減しているため調整不明	青灰～黒灰色	微細砂粒を含む	良好	釉状のものが、付着	
40	甕	・27.6 ・60 ・47.6	口頸部は、ほぼ直立してのび、端部はやや肥厚し丸い。外面下方に沈線あり。外面に3ヶ所うすい沈線あり。胴部は、だ円形を呈し、下方はとがりぎみ。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ キザミ目、カキ目、タタキを施したあとカキ目	青灰色 暗青灰色	1～2.5mmの石英粒を含む	良好 堅緻		
41	甕	・38.5 ・91 ・72.5	口頸部は、長く外反しながらのび、端部は肥厚し、段をなし最端部は、わずかな凹面をなす。外面には、2条の沈線が3ヶ所に施されている。胴部は、だ円形を呈し、最大径は、上方にある。下部にいくほど、とがりぎみ。底部は丸い。	回転ナデ 回転ヘラケズリ 同心円タタキを上から軽くナデている	回転ナデ 平行タタキ	黄土～灰色	2～3mmの白色砂粒を含む	良好		
42	甕	・31.2 ・74.2 ・58.2	口頸部は長く、外反しながらのび、端部はわずかに肥厚し丸い。胴部は、だ円形を呈し下部にいくほどとがる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色	精緻	良好	7、13、15号横穴墓墓道遺物と接合	
43	甕	・19.2 ・11.7+ α ・-	口頸部は、外反しながらのび、端部は肥厚し、やや面をなす。	回転ナデ 同心円タタキを施したあと部分的にナデ消している。	回転ナデ カキ目を施したあとナデ	青灰色 暗黒灰色	精緻	良好 堅緻	7、12、13、15号横穴墓墓道遺物と接合	
44	提瓶	・6.8 ・22.1 ・17.2	口頸部は、外反しながらのび端部は丸い。外面中央部に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	青灰色 淡褐色	精緻	良好 堅緻	玄室内出土	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
45	提瓶	・4.2 ・16.6 ・13.4	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。 胴部は円形を呈し外面両肩にツノ状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	青灰色	石英、黒色砂粒を含む	良好 堅緻	玄室内出土	

第23表 12号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頸部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
46	刀子	8.8	5.4	0.9	不明	0.2	0.3	木質柄残存
47	同上	14.2	8.0	1.0	0.8	0.25	0.25	同上
48	鉄鏃	12.8以上	2.4	1.2	0.5	0.3	0.3	

第24表 12号横穴墓出土装身具計測表

(単位：cm, g)

番号	器種	内外径	断面径	重量	備考
49	耳環	2.85×2.7	0.5×0.5	9.9	緑青色呈す。
50	貝輪	6.0 (内径)	1.5×0.7		イモ貝横割り
51	同上	6.0 (内径)	1.6×0.8		◇

13号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

13号横穴墓は、北支群北寄りの斜面にあり12号横穴墓の南0.2mに隣接する。横穴主軸をN-65.5°-Eにとり西南方向に開口する。標高は33.2mで斜面の上位に立地する。全長は1.90mを測る。保存状態は昭和44年頃の造成により玄室天井部は陥没しており、調査時には、玄室、前庭部ともゴミ穴として利用されており、あまり良くなかった。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

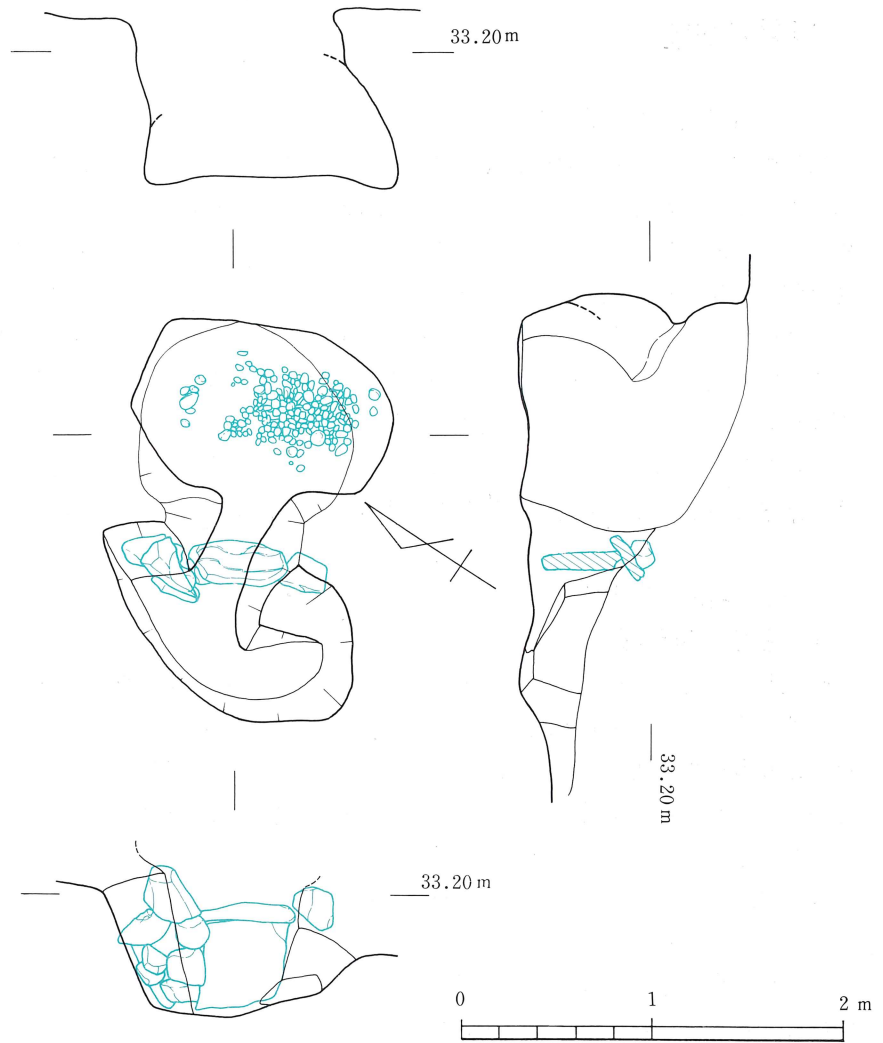
a) 規模、構造 前庭部は、長さ0.38m、下幅1.7mの不整菱形を呈している。現状の基盤掘り込み面から床面までの深さ0.1mを測る。床面は凹凸があり、ほぼ水平に羨道部へ続く。側壁の傾斜は左右で違い左壁で60°、右壁で50°を測る。

羨門は特に天井部分と側壁部分において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。閉塞施設との関係から復元される羨門は高さ0.5~0.6m、幅0.5m前後と推定される。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、若干簡略に構築されている。このため、後の造成等の二次的作用で原位置から若干ずれていると考えられる。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の4工程に分けられる。まず第1工程として前庭部の下部に10cmの埋土を行い閉塞の基底部を整える。第2工程は安山岩製の板石2枚で第1工程埋土を基底部として羨門を覆う。第3工程として羨門上部の隙間を第2工程の板石を根石として扁平な板石で2枚高架させふさぐ。第4工程として人頭大の河原礫および地山礫10数個で、第2・3工程の板石を支え隙間を覆う。さらに埋土で前庭部全体を覆っていたと考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道部は床面で幅0.52m、長さ0.64mを測る。床面はほぼ平坦であるが玄室との境付近で23°の傾斜で玄室に向かって段落ちしている。天井部は崩落して全く旧状を留めてないが、閉塞施設等から推定して高さ0.5m前後と考えられる。玄室は平入り、略卵形を呈し、長さ0.88m、幅1.35mを測る。右側壁部が直線的になっているのが特徴である。高さは天井部の崩落のため明確でないが、約0.66m前後と推定される。床面は、標高32.55mでほぼ平坦である。床面には5cm程度の基盤層起源の粘質土による埋土を羨道部から玄室全面に行っている。玄室中央で南北に長さ1.0m、幅0.45mの範囲で径7cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。また、礫床北側中央に径12cm前後の平扁な円礫一個を置き、石枕としていたと推定される。前庭部、玄室内ともに出土遺物は認められなかった。(村上久和)



第77図 13号横穴墓平・断面図

14号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

14号横穴墓は横穴墓群の中央北側に位置し、南西方向に開口する横穴墓である。盛期の横穴墓としては最も斜面下方に設けられている。斜面の上部、標高29.5～32.5m付近に設けられている。全長は9.36mを測り、主軸はN-56.5°-Eにとる。玄室、羨道、墓道ともに保存状態は良い。先行する13、15号横穴墓の中間にある。墓道先端は調査対象地外に延びるために調査を実施していない。なお、調査の初段階に墓道のうち、羨門壁から1.7mの範囲について平面形態と主軸線の判断を誤り、墓道の縦軸線を本来の線の西側に設けてしまった。そのために、墓道の縦断面土層図がこの部分において羨道部と一致しないことになった。追葬などの検討を行う上で致命的な失敗を犯したといえる。それを補うためにもその他の部分での土層観察には細心の注意をした。また、調査期間中の1982年8月25日に台風13号のために墓道西壁上の樹木が倒れ、西壁の一部が壊れた。墓道と閉塞施設の調査後、玄室と羨道部分の調査を実施した。本横穴墓は羨道が狭く長いために、出入りに苦労した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は端部付近が不明であるが、全長約7mと推定される。羨門部で上部幅2.2m、底面幅1.1mを、墓道入口で上部幅1.3m、底面幅0.8mを測る。また中央付近では上部幅2.0～1.7m、底面幅0.4mを測る。壁高は最奥部の羨門付近で2.5mを測り、深い。墓道の床面はほぼ平坦であり、羨門に向かって約12°の緩い傾斜で上がる。なお、墓道東端から約1.7m羨門に寄った位置まで墓道幅は次第に狭くなり、その後羨門部に近づくと再び広がっている。この部分の床面中央には羨道からの排水溝が約0.5m掘られている。この部分には蓋石は使用されていない。墓道の最深部は約85°の斜面をもつ壁となり、側壁と接している。壁面の傾斜は下部で75～80°であり、全体に急角度を呈する。

羨門の入口部分は上部が一部崩落している。羨門部の正面観は長方形である。羨門幅は下部で0.5mを測り両壁はほぼ垂直に立ち上がる。閉塞施設は安山岩板石と河原石により構成されている。まず、板石2mで羨門を塞ぎ、それを押えるように河原石6点を配置したと推定される。しかし、検出時にはこの河原石を墓道側にややずらし、板石を手前に引き倒した状態であった。これは、最終埋葬時に行われたものとみられるが、その後は閉塞施設が設けられなかったのか、または木蓋などの有機質のものが使用されたと推定される。また、墓道内の中～下部に河原石4点が点在していたが、これも本来は閉塞に使用されたものであった可能性がある。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土は比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で9層群14層に分層した。以下では堆積順に説明する。なお、先に示したように本横穴墓では閉塞施設、羨門と連続する土層図が作成できなかった。埋葬形態や追葬と墓道埋土の関係についてはその他の部分や、未掲載の横断面土層図の検討からの類推によるものが多い。

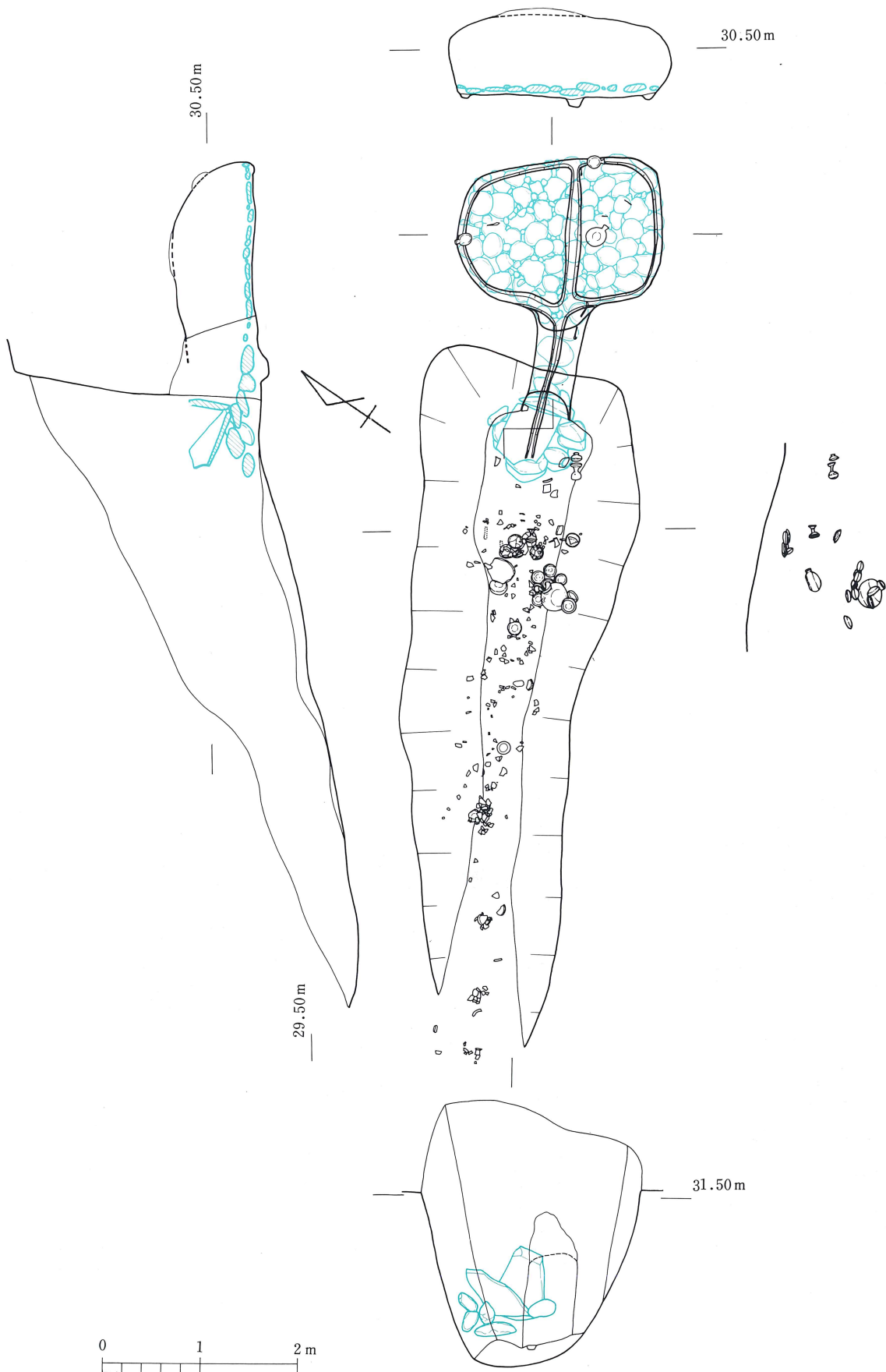
第1層群(Ⅷ層)は墓道形成直後に床面に堆積した基盤土の二次堆積物であり、10～20cmの層厚がある。墓道全域の床面に認められる。

第2層群(Ⅶ層)は羨門から5.5m付近から墓道端部までの位置に堆積すると見られる。暗褐色の軟質土であり、下位層に漸移的变化をする。腐植土層とみられる。

第3層群(Ⅵ層)は羨門から1.5mの範囲に堆積する。上面は羨門床面に連続し、ゆるく下降する。黄褐色の礫混土であり、固くしまる。閉塞施設の下部と排水施設を覆う。

第4層群(Ⅴb層)は第3層群を切り、羨門から約6mの範囲に堆積する。20～30cmの層厚があり、第3層群と類似した性状を示す。しまりは悪い。土器片や炭化物の包含は少なく、羨門から約2mの位置に遺物E群が埋置される。

第5層群(Ⅴa層)は下位の第4層群と同じ範囲に堆積する褐色～茶褐色礫混り土である。固くしまる。須恵



第78图 14号横穴墓平·断面图

器片などの遺物（遺物 D 群）を多量に含む。

第 6 層群（Va 層）は羨門から約 2.3m の範囲に堆積している。灰褐色の礫混り土であり、固くしまる。本層群上面は引き倒された閉塞石の開口面となる。本層中に遺物 C 群があり、本層上面に遺物 B 群が埋置される。

第 7 層群（Ⅲa・b 層）は褐色礫混り土であり、羨門から約 3m の範囲に堆積している。なお、本層群は閉塞の開口部から一部が羨道部に流入している。最終の閉塞に伴う埋土と推定される。本層群は遺物 B 群を覆い、層群直上か上部から掘られた土壌内に遺物 A 群が埋置される。

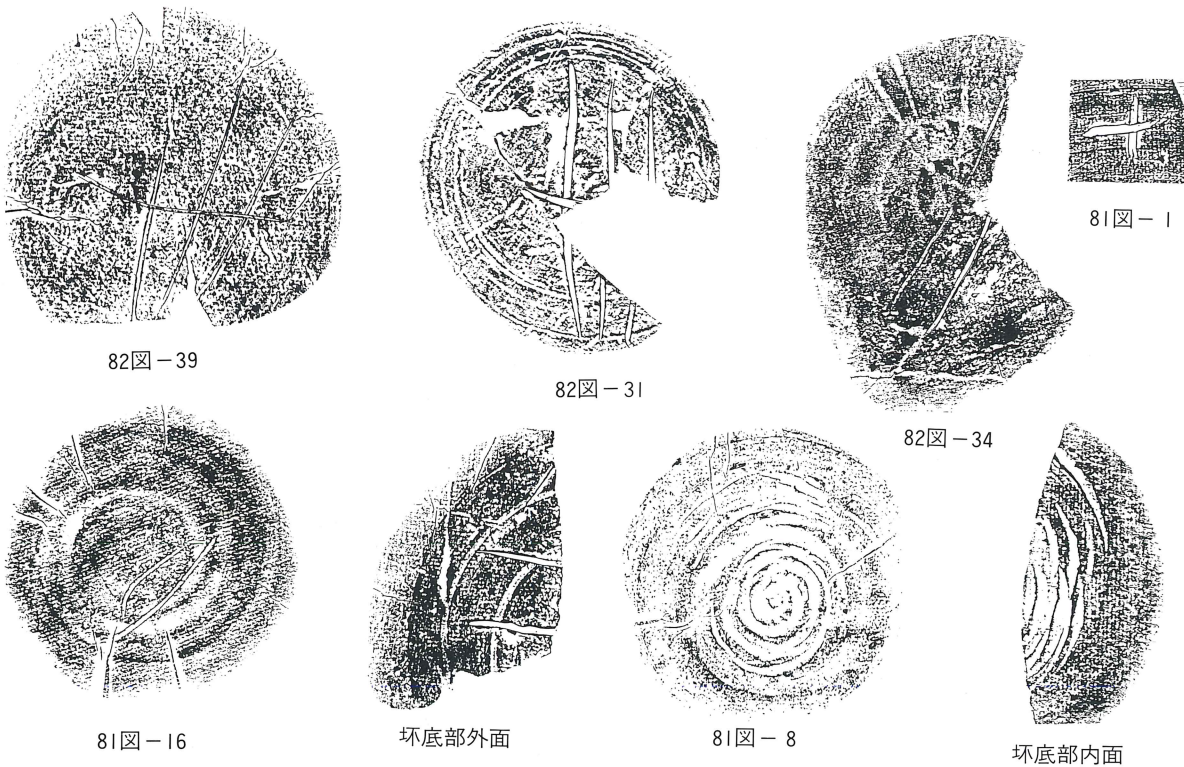
第 8 層群（Ⅱ層）はクロボク質の腐植土層であり、下位層に凹凸面で接し、上位層に漸移する。羨門から約 5m の範囲に堆積する。遺物 A 群の上部は本層中まで露出していた。

第 9 層群（Ⅰ層）は現地表を含む自然流入土の層群である。墓道全域と周辺を覆っている。

以上の堆積状態から、第 3 層群が初期の埋葬に伴う閉塞の埋土と推定される。第 4 層群は、第 1、2 層群を切ることから最初の埋葬時の堆積物ではない。上部の第 7 層群は最終埋葬時の埋土であり、第 6 層群はそれに先行する時期の閉塞埋土である。こうした状況から、本横穴墓では最低 4 回の埋葬行為が推定された。

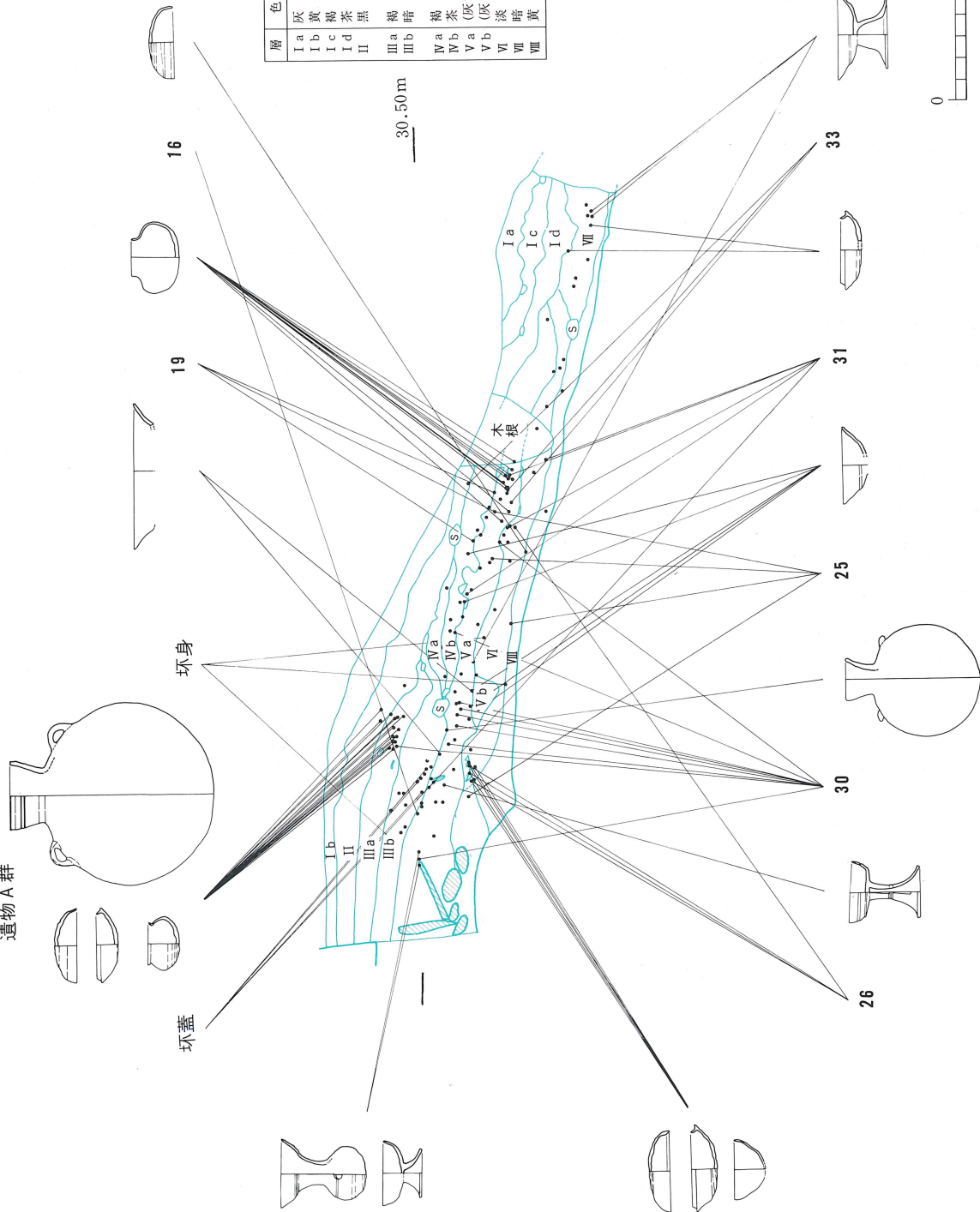
2) 羨道、玄室

羨道は長さ 0.7m、玄門幅 0.7m である。玄室は長さ 1.7m、裾部幅 1.7m、奥壁幅 1.9m の隅丸方形を呈する。平面観では右側壁の隅部のみがより鋭角をなしている。玄室床面には排水溝はなく、羨道部中央のみに幅 16～19cm、深さ約 5cm の排水溝が掘られている。玄室と羨道全体には 10cm 程度の整地層を形成後、人頭大からこぶし大の河原石を敷きつめている。左奥壁ではこの礫床上に 2 個の河原石を配置し、石枕としている。天井は比較的保存状態が良く、ドーム形を呈する。高さは中央付近で地山面から 1.1m を測り、礫床上面から約 0.9m の高さを測る。羨道部とは段で境界を設けている。なお、玄室壁面には掘削時の工具痕が明瞭に残されている。



第 79 図 14 号横穴墓出土土器ヘラ記号

遺物A群



14号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評画・解釈
Ia	灰褐色		ソ	各横穴墓共通のクロボク質風化土層(田表土) 遺物A群含む。 最終埋葬土。 掘り込み埋土。 追葬埋土。 風化土層。 初葬埋土。
Ib	黄褐色	礫混り土層	ハ	
Ic	黄褐色		ハ	
Id	黄褐色		ソ	
II	黒色	クロボク質土層	ソ	
IIIa	暗褐色	礫混り土層	ハ	
IIIb	暗褐色		ハ	
IVa	褐色	礫混り土層	ハ	
IVb	褐色	礫混り土層	ハ	
Va	褐色(灰?)	礫混り土層	ハ	
Vb	褐色(灰?)	(泥質)礫混り土層	ハ	
VI	淡褐色	土混り礫層	ハ	
VII	褐色		ハ	
VIII	黄褐色	褐色砂礫層	ソ	

第80図 14号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内に人骨は遺存しなかったが、須恵器や武器、馬具などの遺物が遺存していた。まず、須恵器には3個体の提瓶（第82図18、第83図42・43）がある。この3点は玄室中央部右側、右側壁、奥壁の3地点に離れて倒置していた。また玄室左側に鉄鏃2本が、中央奥壁よりに鉄鏃1本と刀子1本、不明鉄製品がある。以上は床面上であるが、右側壁に沿った排水溝内からは鉄鏃2本、刀子1本などが出土している。この他に羨道部床面から馬具の一部である引手の破片1個（第83図44）が出土した。

2) 墓道内

墓道内ではA～Eの5群の遺物を検出した。出土した状況と層位からみてA群が最終埋葬時の埋土後の供献土器群である。B群は最終埋葬時の土器群、C群は先行する埋葬時の土器群、D群はさらにそれ以前の祭祀土器群、E群は最初ではないが、初期の埋葬時の供献土器群と推定される。

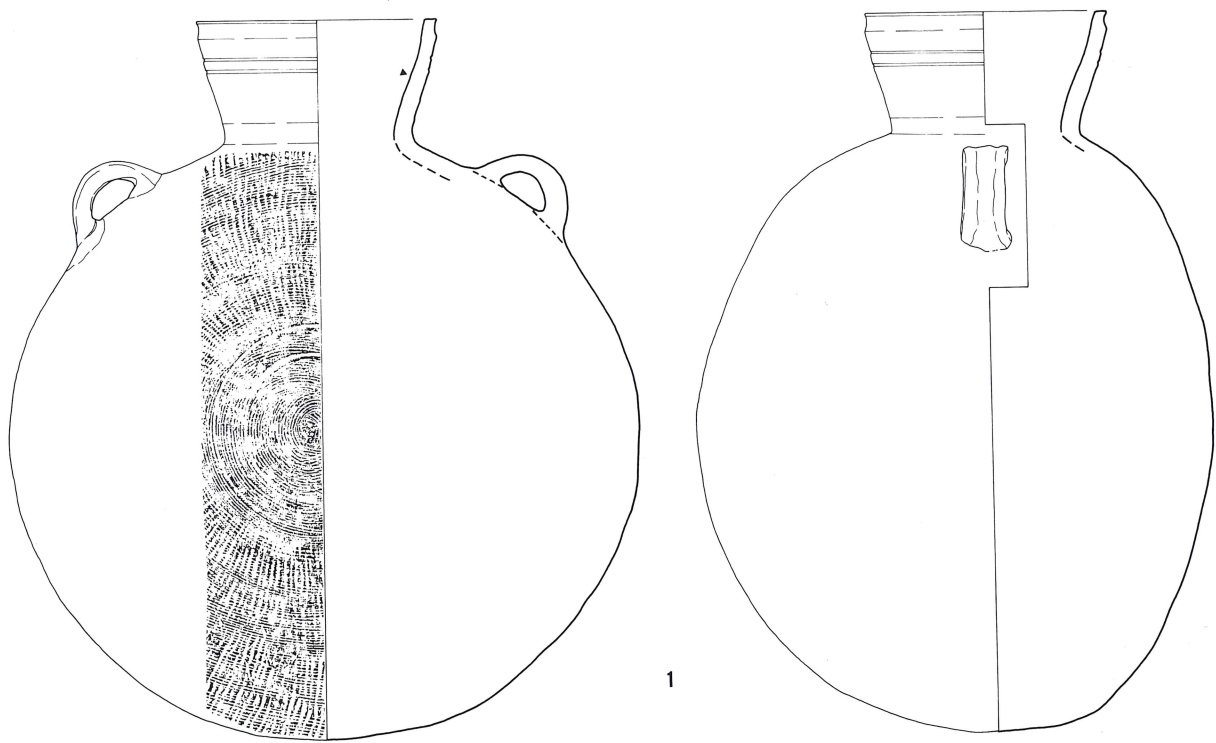
A群は羨門から約7mの位置の墓道内埋土上部で検出された、配列埋置状態の土器群である。第7層群上面に掘られた直径0.5m以上、深さ0.4m以上の土壌に埋置された土器群である。まず坏身（第81図7）を中央に正置し、それを囲んで蓋坏のセット4組（第81図2～4・5）と埴（第81図6）を並べて置く。この蓋坏のセットは全て身を上に、すなわち反転して置かれる。次に一定の埋土の後、大型の提瓶（第81図1）が置かれる。さらに埋土を進めながら、上部に坏身（第81図9～11）、坏蓋（第81図8）が置かれる。なお、この提瓶は傾き、坏類は不規則に分布している。これらは第2層群の風化土層の影響で二次的に動いており、本来の位置とあり方を示していない。

B群は羨門から墓道側に1～2mほどの範囲の第4層群上面の浅い窪みの中に、一括埋置状態で出土した。甗（第81図12）と台付埴（第81図13）を近接して倒置する。坏（第81図14）と提瓶（第82図18）はやや離れて倒置し、提瓶には石が乗る。また、近接して破碎した坏類（第81図14～17）、土師器高坏（第81図15）が出土した。このうち坏（第81図16・17）は明らかに古いものであり、何らかの理由で先行する遺物が混入したとみられる。また、本遺物群には鉄器も数点出土している。

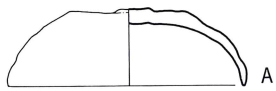
C群は第4層群中に埋置されたものであり、高坏（第82図20）がある。

D群は第5層群中に分布する多量の遺物である。須恵器坏類、甗片を主体としながら、土師器高坏、埴、鉄製品も出土する。復元、図化困難な資料も多いが、須恵器坏類（第82図25・30～36）、土師器高坏（第82図29・38）、埴蓋（第82図37）、埴（第82図39）などがある。鉄製品としては馬具の鉸具（第83図57・58）などがある。

E群は羨門から約1.5m離れた第4層群中に配列状態で埋置された土器群である。掘方は確認することができなかったが、埋土中に水平面を設け、蓋坏5セットを配列している。これはまず、墓道主軸に直交して3セット（第82図23・24・26～28）を並べ、これに接しながら、千鳥状に2セット（第82図21・22）を置いている。何れも正置状態である。（吉留秀敏）



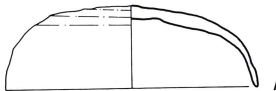
1



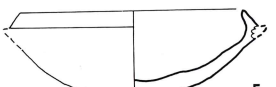
A



2



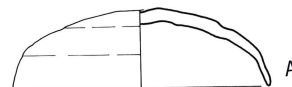
A



5



9

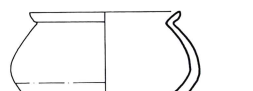


A

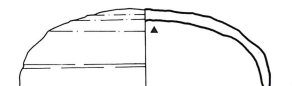


B

3



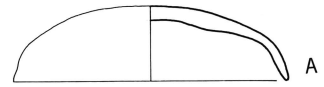
6



8



10



A

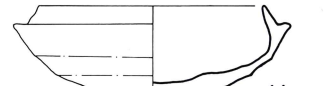


B

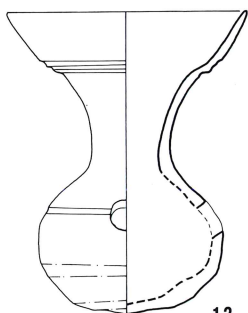
4



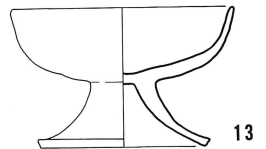
7



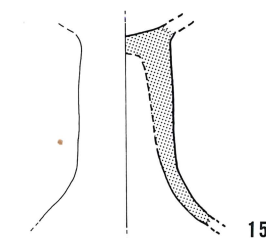
11



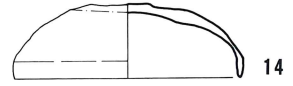
12



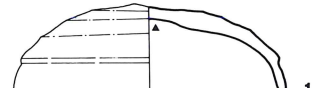
13



15



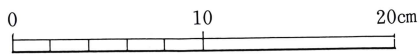
14



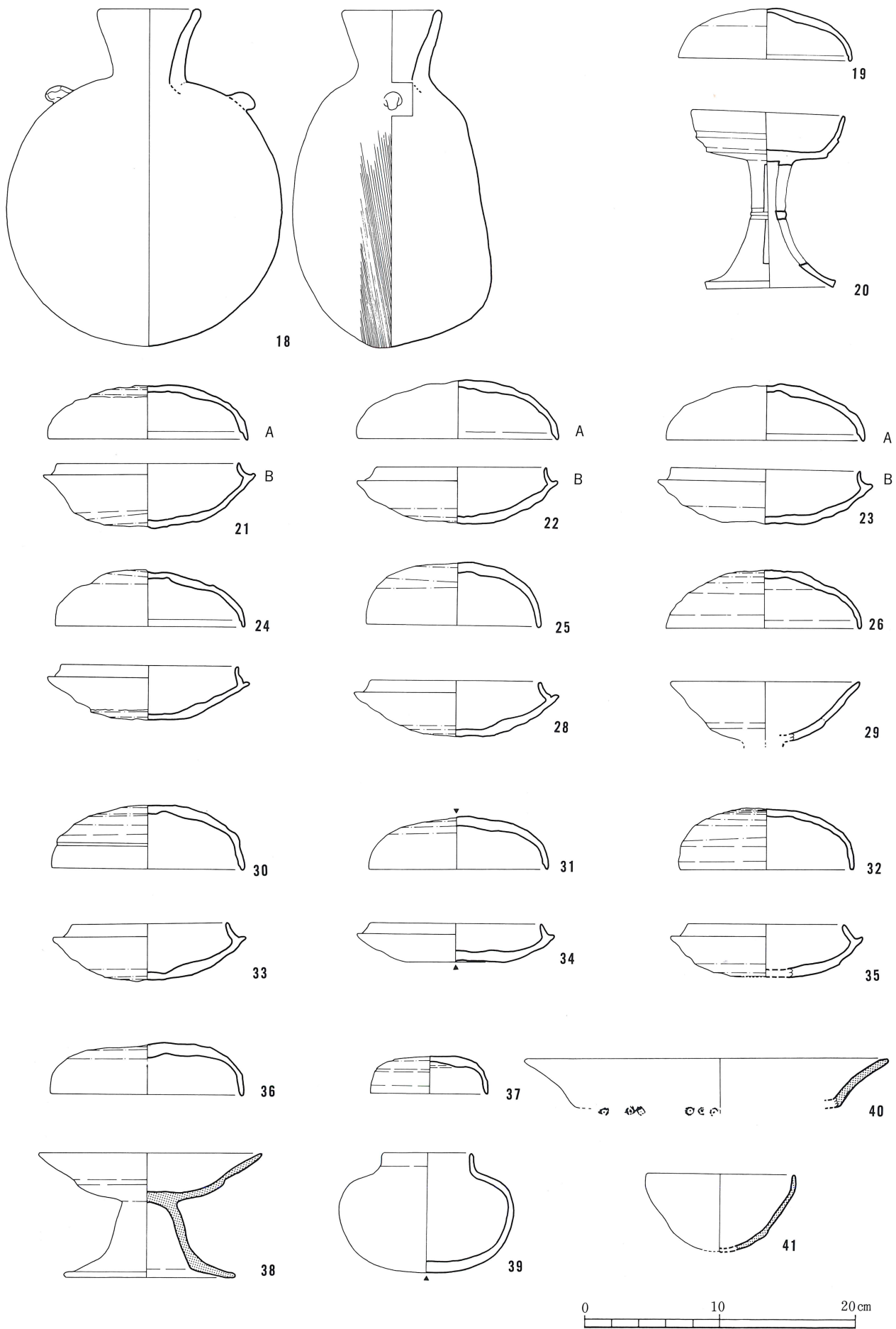
16

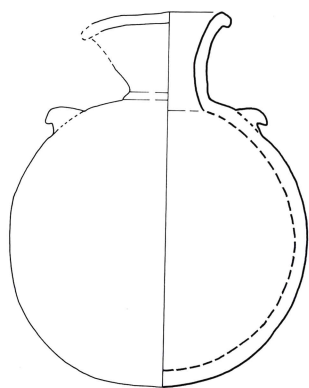


17

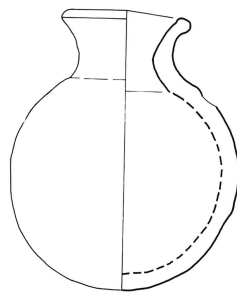
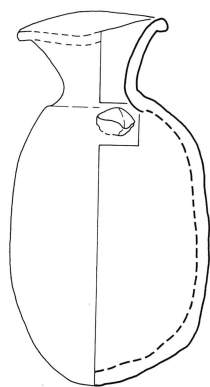


第81图 14号横穴墓出土遺物実測図(1)

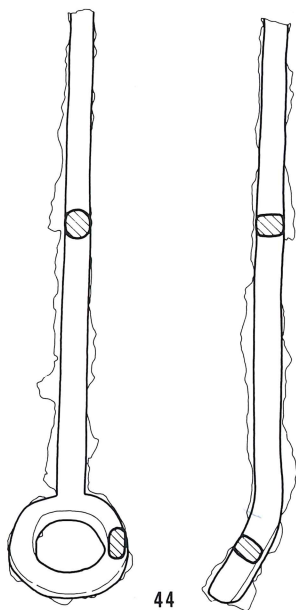
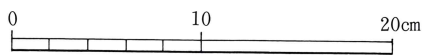
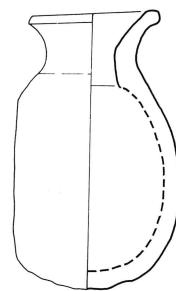




42



43



44



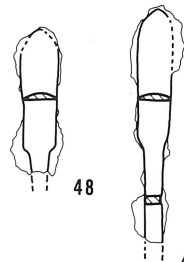
45



46

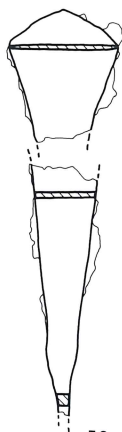


47

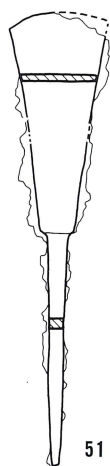


48

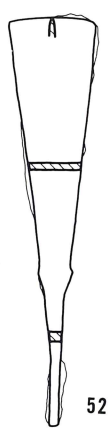
49



50



51



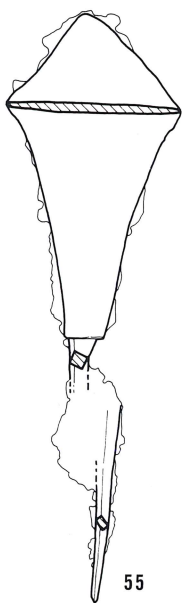
52



53



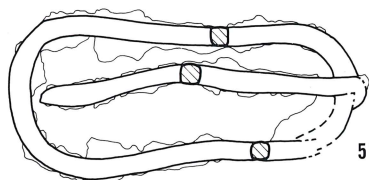
54



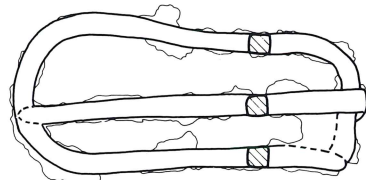
55



56



57



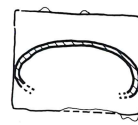
58



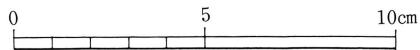
59



60



61



第83图 14号横穴墓出土遗物实测图(3)

第25表 14号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
		・口径 ・器高 ・胴部最大径		内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	提瓶	・12.8 ・37.8 ・33	口頸部は若干内湾しながらのび、端部は平垣である。頸部中央に2条の沈線を記す。胴部は円形を呈し、水平度はあまりない。肩部に環状の把手をつける。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ カキ目	青灰色	長石、石英粒を含む	良好 堅緻		内面口頸部「X」
2 A	坏蓋	・12.4 ・4 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り	淡青灰色	精緻	良好		
2 B	坏身	・10.6 ・3.7 ・12.6	たちあがりは、短く直立してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は、やや深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り	淡黄灰色 淡青灰色	精緻	やや良		
3 A	坏蓋	・13.6 ・4.1 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 外面は器面が磨滅している	淡黄灰色 淡青灰色	1～1.5mmの白色砂粒を微量含む	不良		
3 B	坏身	・11.9 ・4.1 ・—	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、磨滅して原形がわからない。底部は、深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	器面の磨滅のため調整不明	淡黄褐色	1mm前後の白色砂粒を微量含む	不良	受部が磨滅して原形がわからない	
4 A	坏蓋	・14.5 ・4 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、低く丸みをおびる。	回転ナデ	磨滅が著しいため調整不明	黄灰色	精緻	不良		
4 B	坏身	・11.4 ・3.8 ・13.5	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は、浅くやや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色～ 黒灰色	微細砂粒を含む	良好 堅緻		
5 A	坏蓋	・13.4 ・4.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色 赤褐色	1～3.5mmの白色砂粒を微量含む	不良		
5 B	坏身	・12 ・4.5 ・受部 ・欠損	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。底部は、低く丸みをおびている。	回転ナデ 調整ナデ	器面が磨滅しているため調整不明	淡黄褐色	1mm前後の白色砂粒を微量含む	不良	焼成後受部全体を打ち欠いている	
6	短頸壺	・8 ・5.9 ・10	口頸部は、肥厚しながら外反し、端部は丸い。胴部は、よくはり最大径は、中央部にある。底部は、深くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰～ 紫褐色	石英粒を含む	良好 堅緻		
7	坏身	・11 ・3.9 ・12.9	たちあがりは、短く直立してのび端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。底部は、やや深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 ナデ	青灰色	石英粒を若干含む 精緻	良好 堅緻		
8	坏蓋	・13.2 ・4.4 ・—	口縁部は、外反しながらのび端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。外面には、稜がうすくみられる。	回転ナデ 調整ナデ 同心円のスタンプ文	回転ヘラケズリ 回転ナデ	青灰色	1～2.5mmの白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
9	坏身	・11 ・3.9 ・12.8	たちあがりは、短くわずかに内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。底部はやや深く、平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り未調整	明青灰色	0.5～3mmの白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
10	坏身	・12.6 ・4.6 ・14.8	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～3mmの白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
11	坏身	・12.1 ・4.7 ・14.9	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～2mmの白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
12	臑	・12.8 ・15.8 ・—	口頸部は、外反しながらのび、端部付近で、さらに外方へ屈曲し外面に3本の沈線をなす。端部は丸い。胴部は、ほぼ円形を呈し、やや上方に穿孔、中心部に一本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色 青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
13	高坏	・11.9 ・7.3 ・—	坏部の口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。坏部は、浅い。脚部は、下外方にのび端部は、面となる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	青灰色 茶褐色	精緻	良好 堅緻		
14	坏蓋	・12 ・3.9 ・—	口縁部は、外反しながらのび端部は丸い。天井部は、やや低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り未調整	白灰色	1～2mmの白色砂粒を微量含む	やや不良		
15	高坏	・— ・— ・—	筒部は若干エンタシス状を呈し、裾部はラッパ状に開く。	ヘラケズリ シボリ痕	ヘラミガキ	黄褐色	精緻	良好	土師器	
16	坏蓋	・13.6 ・4.4 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。外面には、稜がみとめられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を若干含む	良好 堅緻		内面天井部「D」
17	坏身	・11.8 ・4 ・14.4	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
18	提瓶	・7.2 ・25 ・20.4	口頸部は、外反しながらのび端部は丸い。胴部は、円形を呈し、外面両肩に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
19	坏蓋	・13 ・3.7 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸く内面に1本の沈線を施す。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	褐色	精緻	良好		
20	高坏	・11.5 ・13 ・—	坏部の口縁部は、わずかに外反しながらのび、端部は丸い。外面には1本の沈線を施し外方にはっきりした稜がみられる。坏部はやや浅い。脚部は、下外方にのび端部は、面をなす。外面中央部に2本の沈線あり。長方形二段スカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
21 A	坏蓋	・15 ・3.9 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は、ゆるく内傾する段を有す。天井部は低くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 褐色～青灰色	精緻	良好 堅緻		
21 B	坏身	・13.6 ・4.6 ・15.8	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は、深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 褐色	長石、角閃 石粒を含む	良好 堅緻		
22 A	坏蓋	・14.8 ・4.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部はわずかに内傾する面をなす。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデか?	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻	不良		
22 B	坏身	・12.8 ・4.1 ・15.1	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は、やや浅く丸みをおびる。	回転ナデ?	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色 黄褐色	精緻	不良		
23 A	坏蓋	・14.8 ・4 ・—	口縁部は、外反しながらのび端部は丸い。天井部はやや低く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	石英、角閃 石粒を含む	不良		
23 B	坏身	・14 ・4.1 ・16	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、やや浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黄灰色	角閃石、石 英粒を少量 含む	不良		
24	坏蓋	・14.1 ・4.2 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 茶褐色	精緻 石英、角閃 石粒を含む	良好 堅緻		
25	坏蓋	・13.1 ・4.6 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
26	坏蓋	・14.6 ・4.3 ・—	口縁部は、外反しながらほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 調整ナデ	淡緑灰色 茶灰褐色 灰色	1～2mmの 白色砂粒 黒色砂粒を 含む	やや不 良		
27	坏身	・13.2 ・4 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、肥厚しながら、水平にのび端部は丸い。底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 褐色	精緻	良好 堅緻		
28	坏身	・12.7 ・4.1 ・15.3	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡褐色	石英、長石 粒を含む	良好		
29	高坏	・14.1 ・4.4+α ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。外面は、うすく稜をなす。	ナデ	ヨコナデ 指オサエ	黄褐色	精緻	良好	土師器 反転復元	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
30	坏蓋	・14.4 ・4.7	口縁部は、外反しながらのび、端部は、わずかに内傾する段を有す。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
31	坏蓋	・13.5 ・3.8	口縁部は、外反しながらのび、端部は、内傾する段をなす。天井部は、やや低くやや丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含む 精緻	良好		外面天井部「卅」
32	坏蓋	・12.8 ・4.6 ・—	口縁部は、外反しながらほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	0.5～2mmの砂粒含む	良好 堅緻		
33	坏身	・11.6 ・4.1 ・14.5	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、やや上外方にのび、端部は丸い。底部は、浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色～ 淡紫褐色	精緻	良好 堅緻		
34	坏身	・12.8 ・2.8 ・14.9	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、浅く丸みをおびる。	器面の磨減のため調整不明	器面の磨減のため調整不明	灰色 淡黒色	精緻	不良		外面底部「卍」
35	坏身	・11.7 ・3.9 ・14.5	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、やや上外方にのび、端部は丸い。底部は、浅く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好	反転復元	
36	坏蓋	・14.3 ・3.6 ・—	口縁部は、外反しながらほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色 ～灰色	精緻	不良		
37	罎蓋	・8.8 ・2.8 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 静止ヘラケズリ	淡青灰色	精緻	良好		
38	高坏	・16.6 ・9.4 ・—	坏部の口縁部は、外方へほぼまっすぐにのび、端部は丸い。外面には、稜がみられる。坏部は、浅い。脚部は、下外方にのび端部は丸い。	ナデ?	ナデ?	赤褐色 ～黄褐色	石英粒を若干含む	良好	土師器	
39	短頸壺	・6.6 ・8.9 ・13.2	口頸部は、直立しながらのび、端部は丸い。胴部は、だ円形を呈し底部は、平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗青灰色	精緻	良好		底部にヘラ記号「卅」有
40	二重口縁蓋	・27 ・3.6+ α ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。	磨減	磨減 竹管文 (4個が1単位)	黄褐色	角閃石、石英粒を含む	良好	反転復元	
41	罎	・11 ・5.7 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。底部は深く丸い。	ナデ	ナデ	黄褐色 赤褐色	長石、角閃石粒を含む	良好	反転復元	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
42	提瓶	・7.9 ・19.9 ・15.6	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部は、円形を呈し外面両肩に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色～ 黒灰色	2mm以上の 砂粒を含む	良好 堅緻		
43	提瓶	・6.8 ・15 ・12.1	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部は円形を呈し外面両肩に把手の痕跡あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡灰色	細かい砂粒 を含む	良好 堅緻		

第26表 14号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
44	馬具							轡引手
45	刀子	5.4以上	5.4以上	1.1	不明	0.2	不明	
46	同上	7.3以上	4.8	0.9	0.5	0.2	0.2	鹿角製柄残存
47	同上	14.1以上	8.5	1.2	0.7	0.25	0.25	
48	鉄鏃	3.8以上	3.3	0.9	0.45	0.2	不明	
49	同上	6.1以上	3.6	0.9	0.45	0.2	0.2	
50	同上	3.3以上	3.3以上	2.9	不明	0.2	不明	
51	同上	11.9	5.8	2.6	0.5	0.2	0.25	
52	同上	10.8	7.0	2.3	0.35	0.2	0.25	
53	同上	8.0以上	5.2	2.0	0.5	0.15	0.2	
54	同上	9.6以上	0.9以上	0.9	0.5	不明	0.25	
55	同上	15.5以上	8.6	4.6	0.4	0.3	0.35	
56	同上	11.2以上	4.2	0.75	0.4	0.15	0.2	
57	馬具							鉸具
58	同上							同上
59	刀子	7.2以上	3.0以上	1.2	0.7	0.3	0.35	
60	馬具							
61	鞞口							一部欠損

15号横穴墓

1. 立地、調査時の状況

15号横穴墓は、北支群北寄りの斜面にあり、西方向に開口する。標高は約33.8mで斜面の上位に立地する。全長は約3.25m、主軸方向はN-73°-Eにとる。保存状態は昭和44年頃の造成により玄室天井部が遺構確認時に陥没していた以外は良好であった。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去、玄室内の構造確認等を行った。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ約1.5m、下幅は約1.05mの隅丸長方形を呈している。前庭部先端は旧表土より切り込んでおり、前庭部掘削に先立っての地山整形等は認められない。旧表土切り込み部分から前庭部床面までの深さは0.3mを測る。前庭部床面はほぼ平坦で羨道部に向かって約3~4°の傾斜で緩く下降している。側壁の傾斜は110°~120°を測る。

羨門部分は天井、側壁部分とも崩壊が著しく旧状を留めてない。側壁下部と閉塞施設の状況から復元される羨門は幅0.5m、高さ0.7m前後と推定される。

閉塞施設は板石と河原および地山円礫を使用し入念に構築している。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の3群に分けられる。第1群は安山岩製板石が5枚で地山を基底部として羨門を覆う。第2群は60~70cm大の河原円礫5~6個からなり第1群下面の支えとなる。第3群は人頭大の河原および地山円礫20個前後で第2群を根石として第1群の上面を支え隙間を覆う。以上の配石によって前庭部は面積、堆積ともに約半分が埋まる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

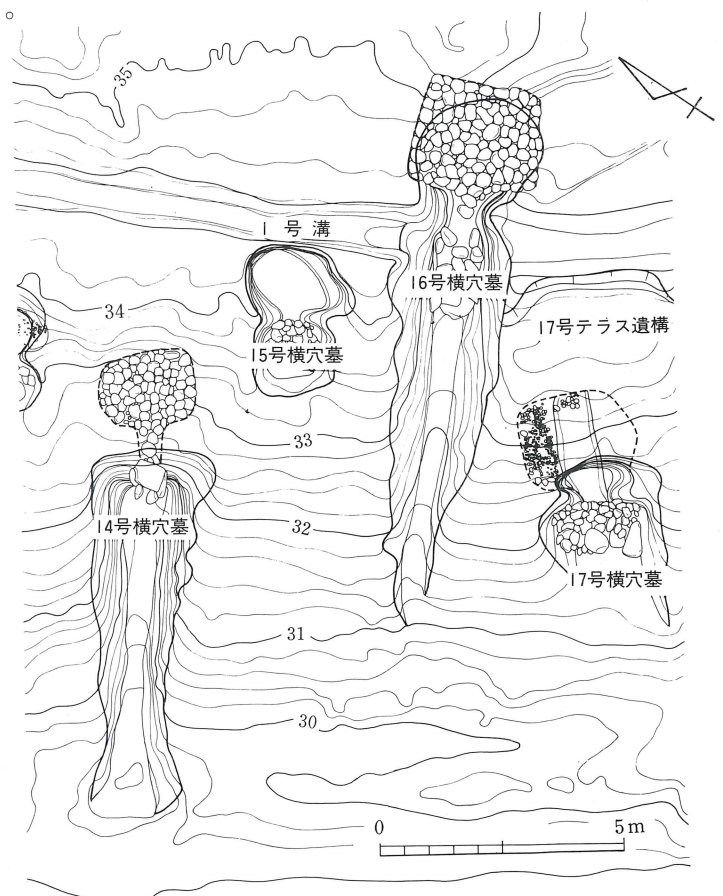
b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土は、その性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で5層群9層に分層できた。以下堆積順に説明する。

第1層群 (V層) は横穴墓形成以前の旧表土で前庭部掘り方内には堆積しておらず、前庭部形成時に旧表土から掘り込まれたことが明らかである。

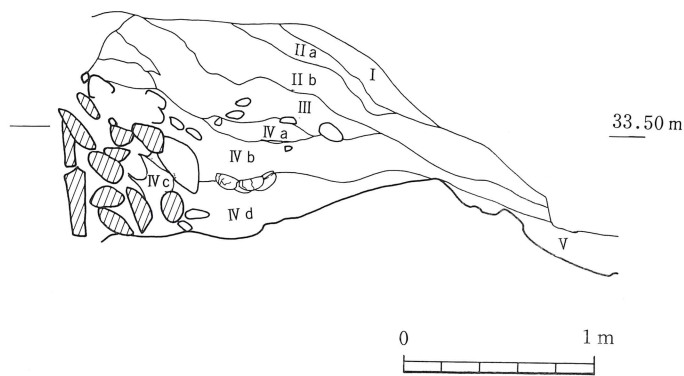
第2層群 (IV層) は羨門から約3mの範囲に20°~30°の傾斜を持ち堆積している。本層群はさらに3層に細分される。下位から(1)は基盤層の二次堆積土で固く締っており閉塞石下面を覆う。(2)は同様の基盤層であるが、比較的軟らかく(1)層を切り込んで堆積する。閉塞石上面を覆う。下面にピットを掘り土師器を埋置する。(1)層とは明確に区分できる。(3)は(2)層が風化したもので漸移的变化があるが凹んだ部分にしか認められない。

第3層群 (III層) は、羨門から約1.5mの範囲に20°~30°の傾斜を持ち30~40cm堆積している。性状は基盤層の二次堆積であり、上方に推定されるテラス状遺構等のマウンド埋土の可能性が大きい。

第4層群 (II層) は検出面から約2mの範囲に20°~30°の傾斜を持ち最高40cm堆積している。性状はき



第84図 15号横穴墓周辺平面図



15号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I	灰褐色	砂礫層	ハード	
IIa	黒褐色	砂質層	ソフト	
IIb	褐色	粘質土層	ハード	
III	赤褐色	粘質土層	ややソフト	
IVa	茶褐色	粘質土	ハード	IV bは追葬埋土
IVb	茶褐色	粘質土	ハード	
IVc	茶褐色	砂質土	ややソフト	
IVd	茶褐色	粘質土	ハード	IV dは初葬埋土
V	黒褐色	クロボク質土	ソフト	Vは旧表土

第85図 15号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

め細かい褐色土で若干の地山礫を含んでいる。上面は木草根が著しく風化層となる。

第5層群（I層）はコンクリート塊を含み1968年頃の造成に伴う堆積層で本層群の上面が現地表面である。

以上の観察結果から本横穴墓は上部にマウンドを持つ可能性があり、また一回の追葬の可能性もある。

2) 羨道、玄室

羨道部は床面で幅0.62m、長さ0.4mを測る。床面は約8°の傾斜で玄室に向かって下降する特徴をもつ。天井部は崩落によって不明であるが閉塞施設等から推定して高さ0.8m前後と考えられる。玄室は平入り、略卵形を呈し、長さ1.43m、幅2.31mを測る。玄室主軸は墓道主軸に対して45°東に振っている。高さは天井部の崩落のために明確でないが、約0.9m前後と推定される。床面は標高33.9mでほぼ平坦である。床面には5～10cm程度の基盤層起源の粘質土による埋土を羨道部から玄室全面に行っている。玄室中央から奥壁よりに長さ1.9m、幅0.55mの範囲で直径5cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。

3. 遺物の出土状態

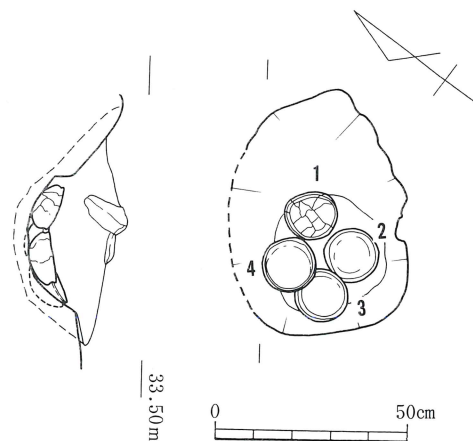
1) 玄室内

a) 埋葬人骨 天井部が完全に陥没していた為人骨の残りは良くなかったが、北側奥壁よりに頭骨片が、南側中央より頭骨がほぼ完全な状態で出土した。

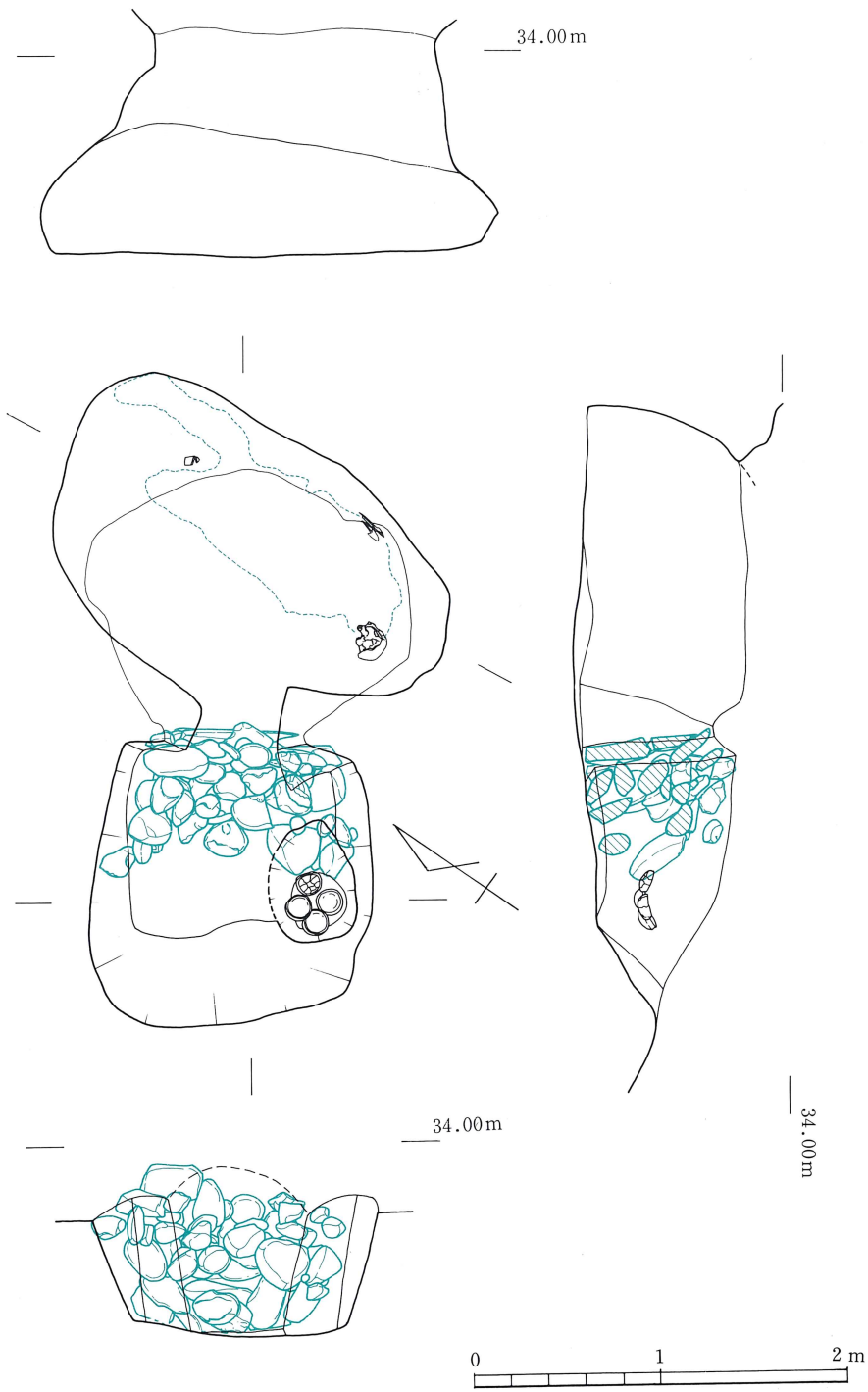
b) 副葬品 玄室内礫床上のやや南側奥壁ぎわに鉄鏃4点が集中して配置されていた。刀先を南向きにしており、北側頭位人骨の左足方に配置されていたと推定される。また、陥没した玄室上部の攪乱土中より須恵器坏身片1が出土した。これは、1号溝北側より出土したものと接合でき、この付近で墓前祭を行った可能性が大きい。

2) 前庭部内

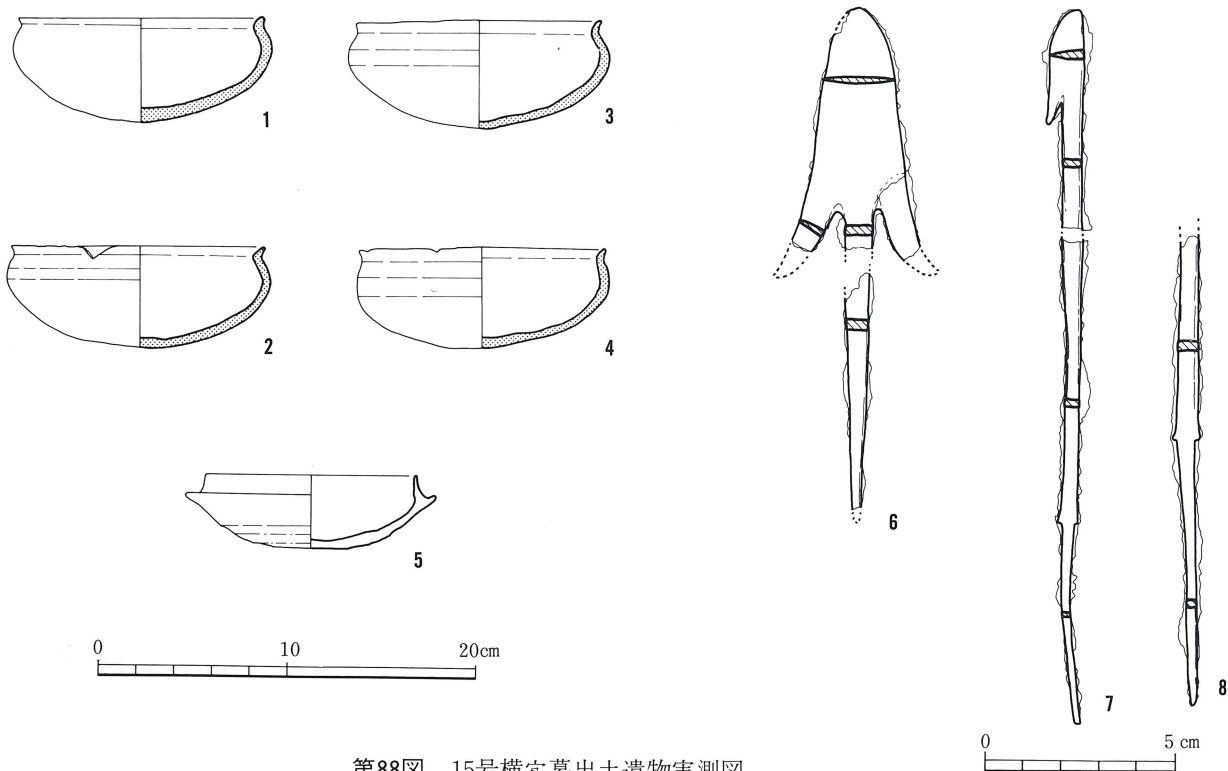
前庭部ほぼ中央左壁付近で第2層群(2)層下面に長径65cm、短径50cm、深さ25cmのピットを掘りその中に土師器碗を4個時計回りに配列埋置する。(第87図1→4の順)土層の状況から追葬時の遺物と考えられる。(村上久和)



第86図 15号横穴墓前庭部遺物出土状態



第87图 15号横穴墓平·断面图



第88図 15号横穴墓出土遺物実測図

第27表 15号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	碗	・13.1 ・5.5 ・13.7	口縁部は、内湾しながらのび、端部は外反し丸い。底部は、深く丸みをおびる。	ナデ	ナデ、カキ目、ケズリ	赤褐色	精緻	やや不良	土師器 ベンガラを塗布	
2	碗	・13.4 ・5.3 ・13.9	口縁部は、内湾しながらのび、端部は外反し丸い。底部は、深く丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	石英粒、その他を多量に含む	良好	土師器 ベンガラを塗布	
3	碗	・13.1 ・5.7 ・14	口縁部は、内湾しながらのび、端部は外反し丸い。底部は、深く丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ タテナデ	淡褐色	石英粒を含む	良好	土師器 外表面のほぼ全体 内面一部に、ベンガラ残存	
4	碗	・13.2 ・5.3 ・13.5	口縁部は、内湾しながらのび、端部は外反し丸い。底部は、深く丸みをおびる。	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡褐色	砂粒を含む	不良	土師器 1～4は一括	
5	坏身	・11.1 ・3.9 ・—	たちあがりは、ほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く、やや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		

第28表 15号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
6	鉄鏃	13.1以上	7.0	2.7	0.6	0.15	0.3	
7	同上	18.8	3.0	0.9	0.5	0.2	0.2	
8	同上	12.3以上	—	—	0.5	—	0.25	

16号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

16号横穴墓は横穴墓群の中央付近に位置し、ほぼ西方に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高33m付近に設けられている。全長は4.56mを測り、主軸方向はN-69°-Eにとる。先行する18号横穴墓の北側隣にあり、テラス状遺構を切る。調査前に玄室と羨道の上半部分が落盤と削平により失われていた。そのため玄室内には多量の土砂が流入しており、完全に埋没していた。墓道部分も完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査はまず、墓道の平面形の確認と墓道内遺物の埋没状況の検討を目的とした縦・横土層断面図や遺物等の平面図作成を実施した。次に玄室と羨道部分の調査を実施した。玄室床面ではおおよそ原位置を示す供献、副葬遺物の他に、圧碎された人骨片とその痕跡も検出した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨道部

a) 規模、構造 墓道は全長7.9m、羨門部で上部幅2.2m、底面幅1.3mを、墓道入口で上部幅0.7m、底面幅0.3mを測る。壁高は最奥部の羨門付近で1.7mを測る。墓道の床面には緩い凹凸があり、羨門に向かって約10°の傾斜で上る。なお、墓道東端から約5m羨門に寄った位置まで墓道幅は約0.3~0.7mと狭く、その後1.2~1.3mに広がり羨門部に接している。この部分の中央には玄室からの排水溝が約1.6m掘られており、その溝の端部付近に直径約30cm、深さ約13cmの土壙が掘られている。排水溝には羨門から約0.8mの間に人頭大の河原石3点と安山岩板石1点を蓋石として使用している。墓道の最奥部は約75°の傾斜をもつ壁となり、側壁とほぼ直角に接している。側壁の傾斜は下部で60~70°であり、上部で風化のためにややゆるくなっている。

羨門の入口部分は落盤と削平のため旧状を大きく失っており、羨門部の形態は不明である。羨門幅は下部で0.7mを測り、両壁はほぼ垂直に立ち上がる。閉塞施設は最終埋葬以前に取り壊され、4個の河原石が遺存している。これは最終埋葬時に木蓋などの有機質の閉塞のおさえ石と推定される。なお、羨門から1.5mまでの墓道内埋土中の標高33m付近に安山岩板石4点と河原石12点以上が集中して分布していた。これはある段階に先行する埋葬の閉塞施設を取り壊して置いたものと推定される。この先行する閉塞施設は残された石材から12号や20号横穴墓と同様の構造が予測される。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で8層群15層に分層した。以下では、堆積順に説明を加えたい。

第1層群(XII層)は横穴墓形成以前の旧表土である。墓道東端で確認され、墓道の掘削は旧表土上面からなされたものと考えられる。

第2層群(VIII層)は墓道床面に堆積した基盤層の二次堆積物であり、20~60cmの層厚がある。排水施設を覆い、羨門から約5mの位置まで標高約32.5mでほぼ水平な面を造っており、人為的な整地層の可能性はある。本層の上~中位に遺物A群がある。

第3層群(VII層)は黒褐色のクロボク質土層であり、下位層に漸移的变化する。長期間の腐植土層と考えられる。墓道先端付近では遺物B群を覆い、多量の炭化物片を含んでいる。墓道の中頃から羨門にかけては本層上位に板石、河原石、鉄器などが分布している。これはある段階の埋葬時の状況を示しているとみられた。本層群はさらに細分の可能性があったが腐植の進行と、土色と性状から明確には分層困難であった。

第4層群(VI層)は羨門付近を中心に玄室内まで堆積している。最終埋葬時の閉塞に伴う埋土とみられる。

第5層群(V層)は羨門から約4.5mの範囲に堆積している。本層群は10~30cmの層厚をもち、基盤層起源の小礫を多く含む暗褐色土層である。黄褐色土ブロックを多く含み、人為的な埋土の可能性はある。本層上部には遺物C群が分布する。

第6層群(IVc層)は羨門直下から墓道側約5mの範囲に堆積するクロボク質土である。本層群は腐植土であり、

第5・3・2層群などの下位層を侵食しつつ堆積している。本層中には下位層同様に多量の須恵器、土師器片が出土した。

第7層群（Ⅳa・b・Ⅲb・Ⅸ層）は羨門付近から墓道全域、さらに斜面下方までの範囲に堆積している。本層群は大きく二分される。下部は黄褐色粘質土であり、上部は黒褐色の旧表土である。上下層は漸移的变化を示し、自然流入土のローム質土とその上部に形成された風化土層と考えられる。少量ではあるが、須恵器、土師器片が出土した。

第8層群（Ⅰ～Ⅲa層）は地山土のブロックを多く含む粘質土とその上部に薄く堆積された旧地表である。1968年以降の造成土と地表からなる。

なお、墓道外の斜面部分に特異な盛土が認められた。これは墓道端部付近からさらに3.7mの範囲で、標高31.6～30.0mの間にある。横穴墓形成以前の旧地表、すなわち第1層群を覆って堆積した地山礫を多く含む黄褐色土層である。その性状は第2層群に類似している。遺物等の出土は上部の腐植土中に墓道からの流れ込みとみられる須恵器片が出土したのみである。この堆積物は、墓道掘削時の排土からなると推定されるが、その性格として前庭部の拡大や幹道の形成を意図したものである可能性がある。

2) 羨道、玄室

羨道は下部で長さ0.9m、玄門幅0.8mを測る。羨道の中央付近はやや狭く、0.6mを測る。玄室は長さ1.8～2.2m、裾部幅2.6m、奥壁幅2.2mの不整形台形を呈する。床面には幅5～20cm、深さ5cmの排水溝が周囲と中央部に掘られている。中央の溝は羨道中央部を経て前庭部まで延びている。床面は羨道に向って緩く傾斜する。玄室と羨道の床面には人頭大から拳大の河原石を敷きつめている。この敷石はまず排水溝を人頭大の河原石で覆い、その後残りの隙間を大小の河原石で埋めている。天井部の構造や形態は不明であるが、奥壁のカーブからドーム形を呈すると推定される。玄室と羨道部には段があり、境界をなしている。

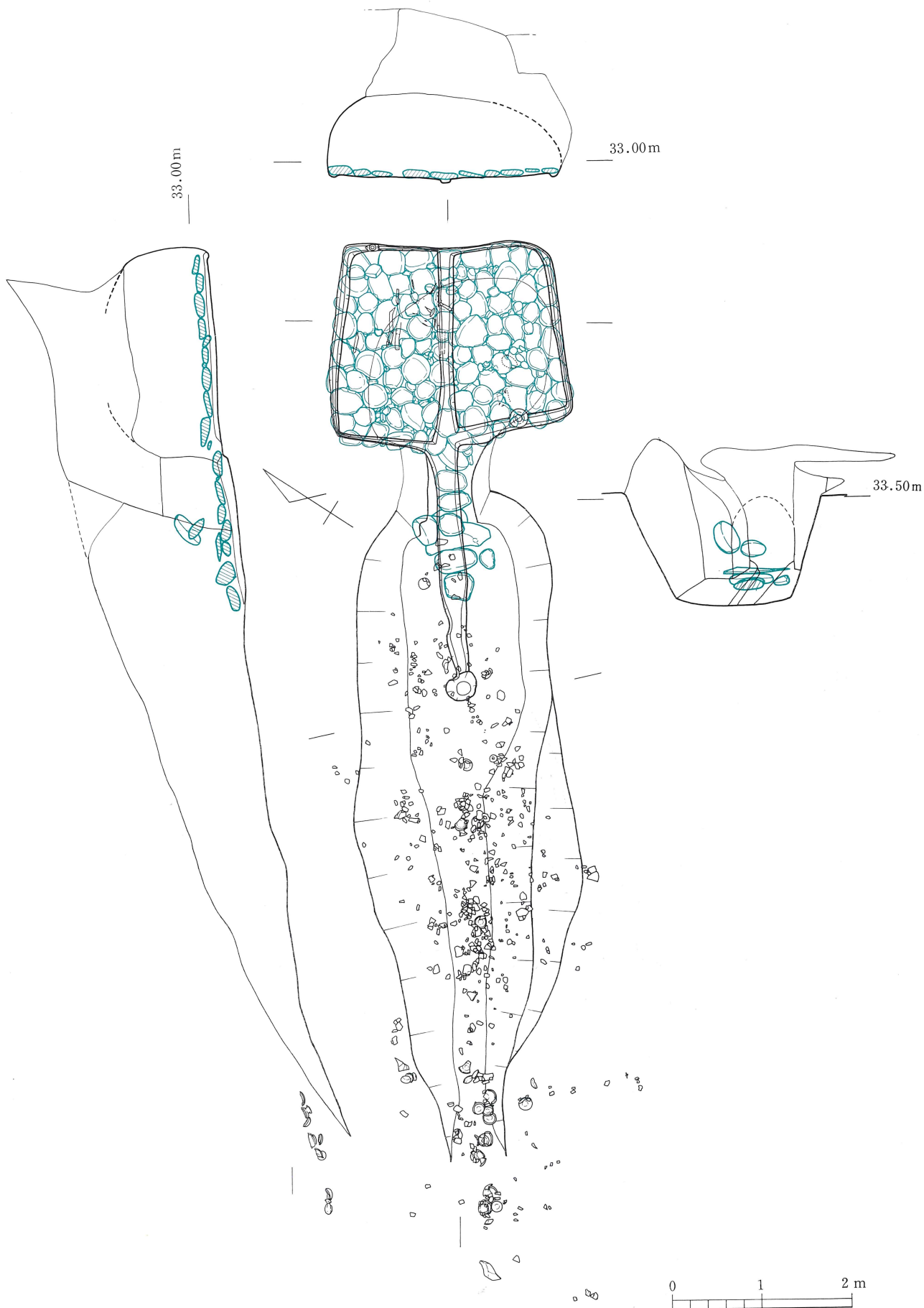
玄室内には流入土や落盤土が充満しており、それらは4層群に分離された。

第1層群は玄室中央にレンズ状に堆積する地山土であり、最初の天井部の落盤土とみられる。不明瞭ながら風化土層を挟み、前後2回の落盤で形成されている。第2層群は羨道方向からの流入土であり、墓道第4層群と一致する。羨道方向からの流入土である。第3層群は断続的な地山崩落土からなる。この段階で本横穴墓の天井付近が開口したとみられる。第4層群はその開口部からの流入土と地山の崩落土からなる。

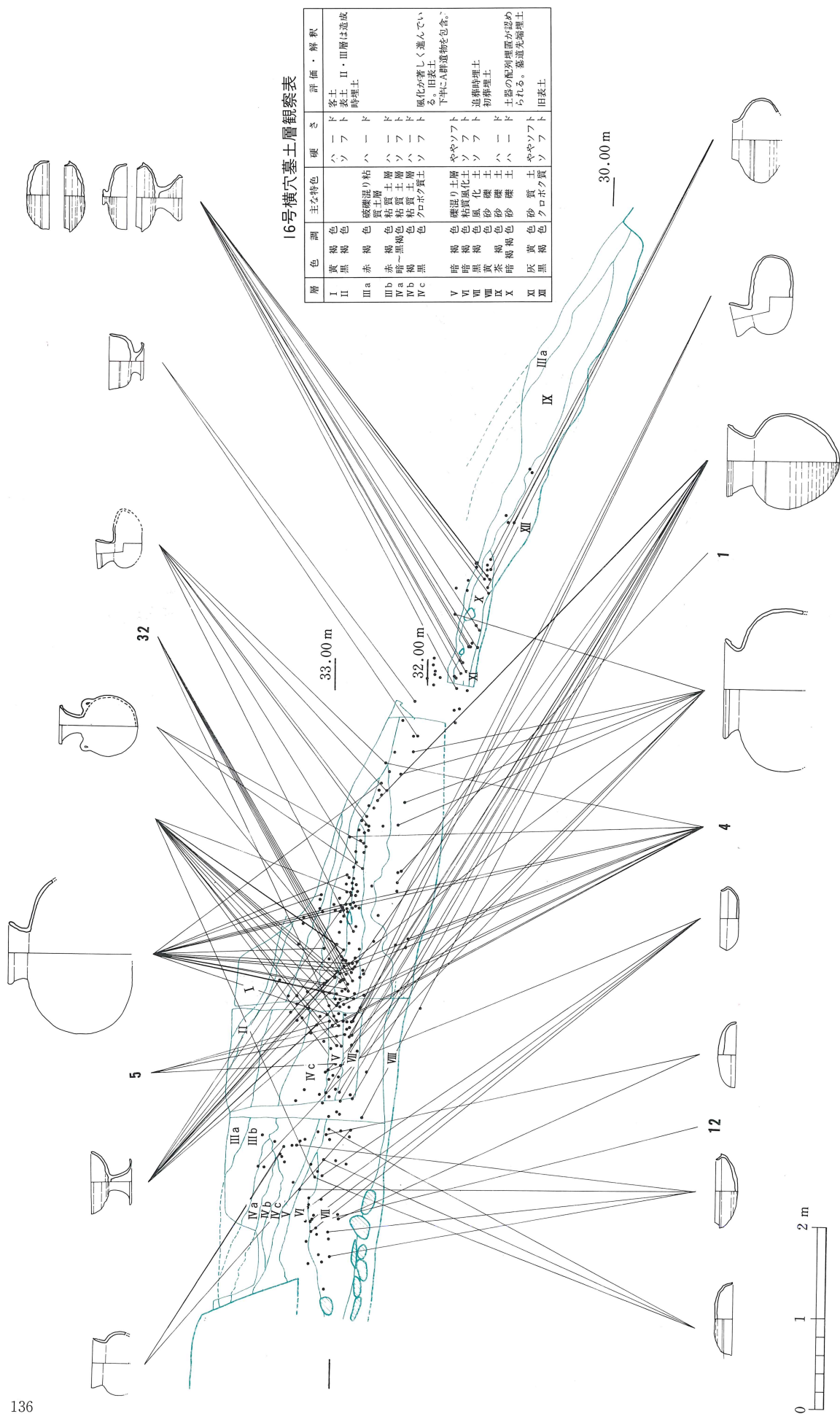
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内床面では人骨とその痕跡、また須恵器や武器、馬具、装身具などの遺物が出土した。土砂に埋もれながらも出土位置は比較的旧状を保っていると判断された。まず、玄室右側の2ヶ所で頭骨片が認められた。何れも保存状態は悪いが、両者は東西に約40cm離れ、直径20cm前後のものである。羨道側の方には上顎の第1～3臼歯が遺存しており、これらは別個体と判断した。羨道側を1号人骨とし、他方を2号人骨とする。1号人骨の頭頂付近に小玉5と壁に接して広口壺1（第94図38）が樹立状態で出土した。2号人骨の周辺では耳環1と碧玉製管玉1が出土した。玄室左側では奥壁よりに人骨片と多くの遺物が出土した。人骨片は東西に向く四肢骨とみられる骨片が5点あり、他に歯の一部（エナメル質）を伴う頭骨が粘土化して検出できた。四肢骨は形態と大きさから大腿骨とみられ、出土状態を正位置とみると2体もしくは3体分とみられた。また、その間にある頭蓋骨片は位置関係から共通するものはあり得ず、さらに別個体である可能性が強い。したがって、この部分に3体もしくは4体の被葬者があったとみられる。個体識別が困難なため、とりあえずこの頭蓋骨を3号人骨とし、その他を仮に北から4、5、（6?）号人骨とする。3号人骨の東側では鹿角装刀子（第94図49）が刃先を西に向け、南側では鉄鏃6が散乱して出土した。また、この鉄鏃のある付近を中心に直径約50cmの範囲に勾玉1、管玉3、切子玉6、小玉58が散布状態で出土した。また、玉類に混って赤色顔料の小塊が2点出土した。これは朱と推定された。4号人骨の西側、玄室の左側隅部に提瓶1（第94図39）が樹立状態で出土した。なお、出土位置は不明で



第89图 16号横穴墓平·断面图



第90図 16号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

あるが、馬具が出土している。これは3連の兵庫鎖と鉸具を連結した鐙であり、対となるべきものや鐙本体は出土していない。

2) 墓道内

墓道内では出土層位を異にする3つの遺物群を検出した。

A群は墓道中央部床面直上の第2層群中に検出した。須恵器の蓋坏(第92図1・2)や壺片などがある。須恵器の坏と身は何れも内面を上向きに正置してある。

B群は墓道端部に近い床面上の第3層群下部に出土した。須恵器の坏蓋を主とする配列埋置状態である。斜面がやや急角であり、上部に風化土層が発達するために、保存状態は必ずしも良好ではない。配列は墓道右壁に沿って集中して行われている。約20cmの間隔を置き配列状態の異なる二群に分けられる。斜面下方の一群は蓋坏3(第92図23~25)と埴(第92図20)からなり、蓋坏は蓋を合せて、埴は臥せて置かれる。斜面上方の一群は坏蓋3以上、坏身6、有蓋高坏2などからなる。ほとんどの個体を内面を上向きにし、配置している。高坏蓋は横の高坏(第92図19)のセットであるが、上向きにした坏蓋(第92図14)に被せている。この遺物B群の直下には多量の炭化物片と焼土片が検出された。特に炭化物片は高坏の直下を中心としていた。須恵器には二次焼成の痕跡はなく、鎮火後に配置したと推定される。

C群は第3層群から第4層群にかけて分布している。ほとんどが破片となっており、平面的に集中する傾向はない。須恵器の坏身(第92図3)、坏蓋(第93図30)、高坏(第92図4・5・6 第93図32・33)、短頸壺(第92図7)、広口壺(第93図28)、平瓶(第92図8・9)、横瓶(第93図26)、提瓶(第93図35)、甕(第93図27)や土師器の坏(第92図12)や高坏などがある。また鉄鏃(第94図40、41)も出土している。須恵器や土師器の接合関係の上下動は大きく、墓道内埋土のたび重なる攪乱があったと予測される。なお、C群の横瓶と甕の破片の一部は26号横穴墓墓道上部に一括出土している。ちなみに両横穴墓の直線距離は約37.5mを測り、比高差はほとんどない。また、両者の間には9基の横穴墓があり、この破片の移動は偶然の産物とは考えられない。(吉留秀敏)

4. 16号横穴墓出土人骨の所見

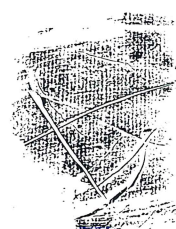
人骨は保存不良である。玄室内南側から歯牙片(1号人骨上顎右第3大臼歯の他数片)、北側から四肢骨片が検出された。四肢骨片の中には、かなり頑丈な大腿骨骨体部片が含まれており、被葬者の中には男性が含まれると思われるが、詳細は不明である。(土肥直美)



92図-13

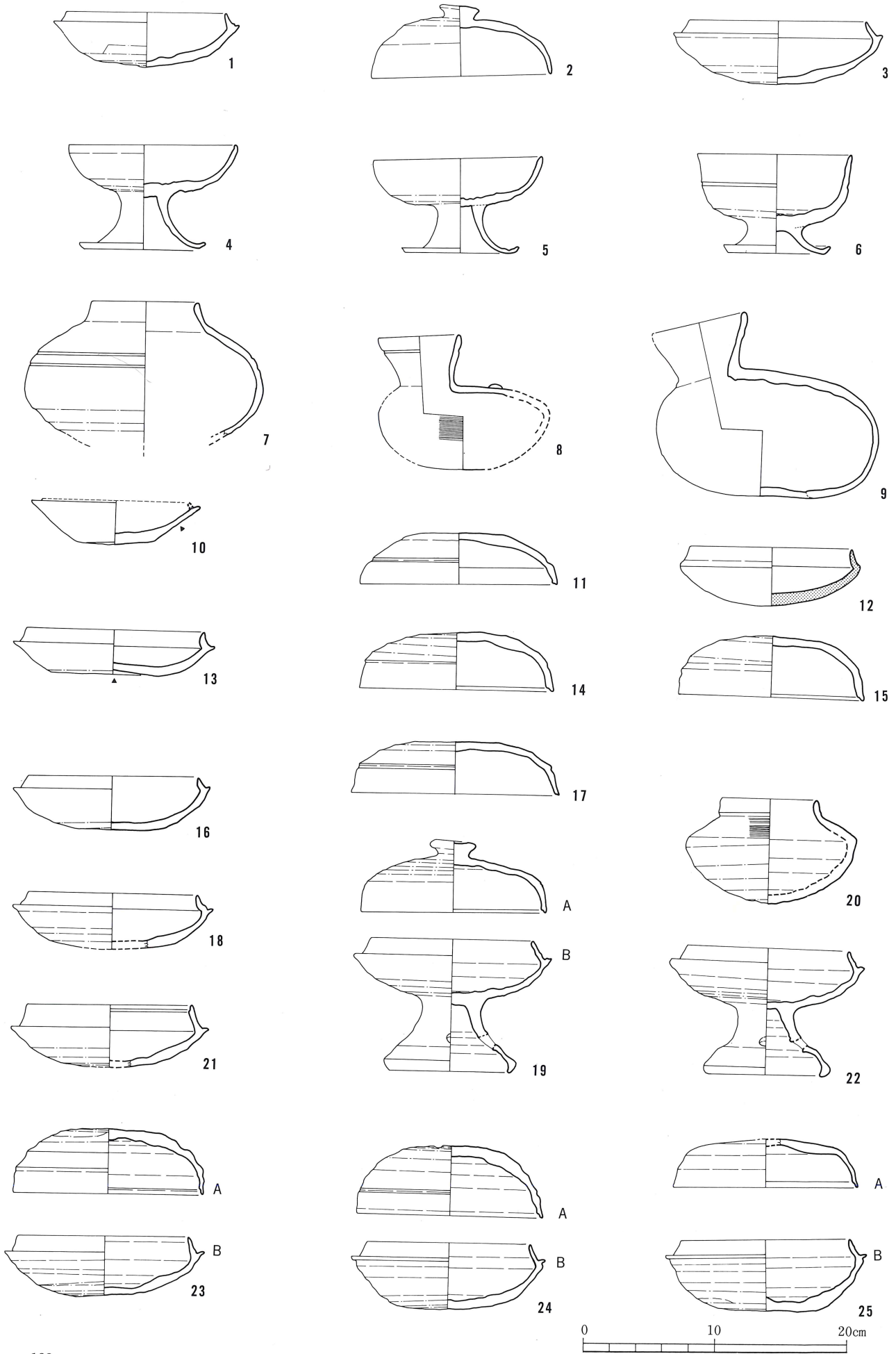


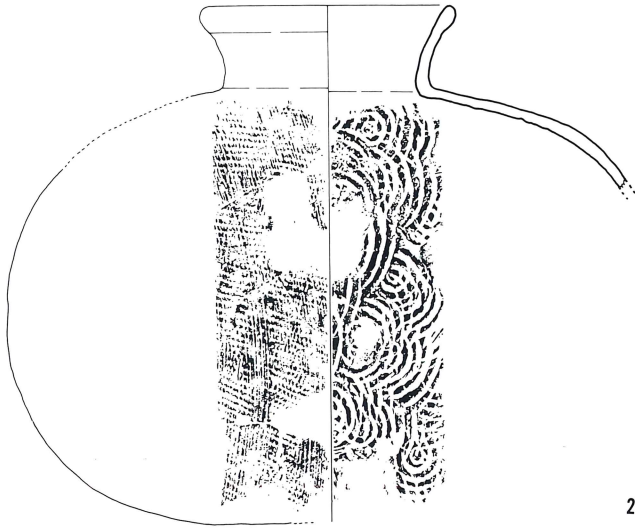
92図-10



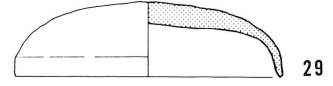
93図-28

第91図 16号横穴墓出土土記へラ記号

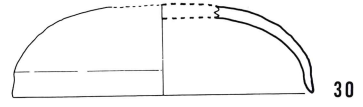




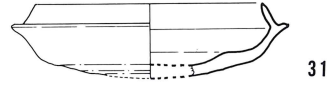
26



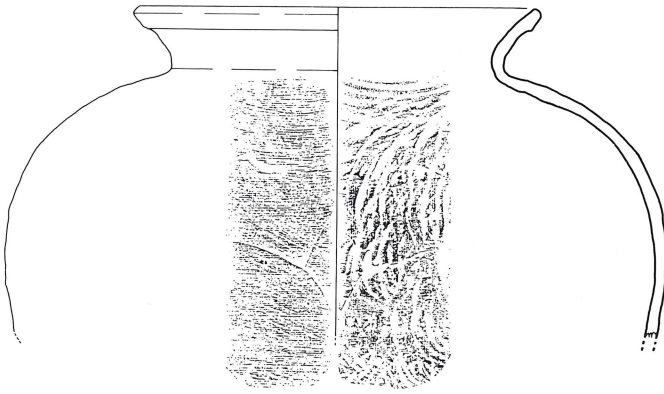
29



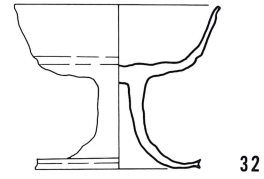
30



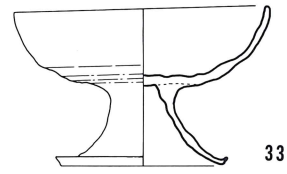
31



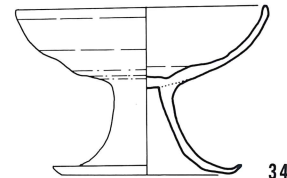
27



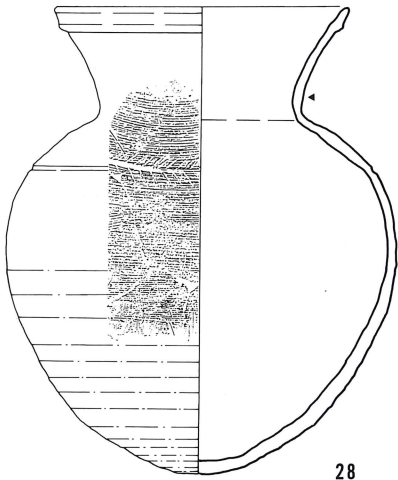
32



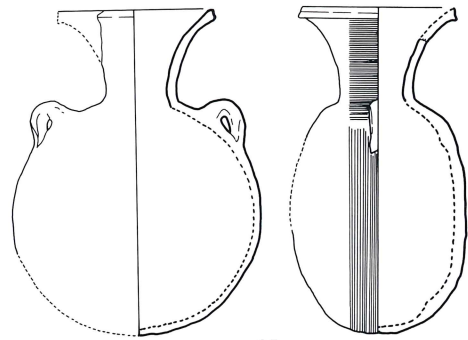
33



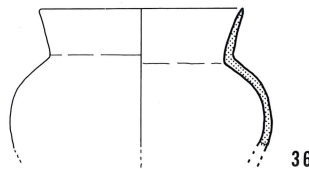
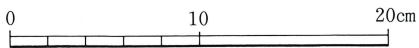
34



28



35



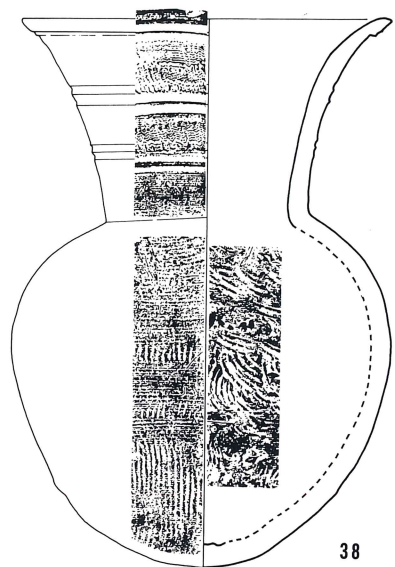
36



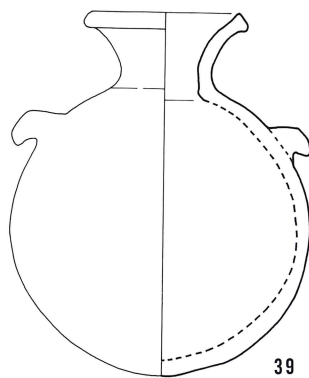
37

139

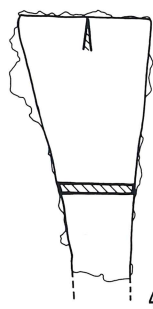
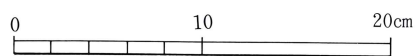
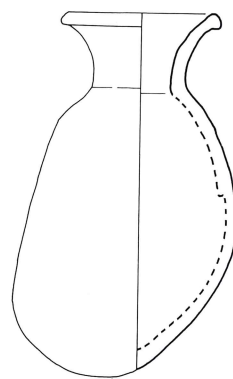
第93图 16号横穴墓出土遺物実測図(2)



38



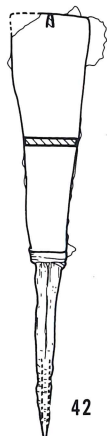
39



40



41



42



43



44

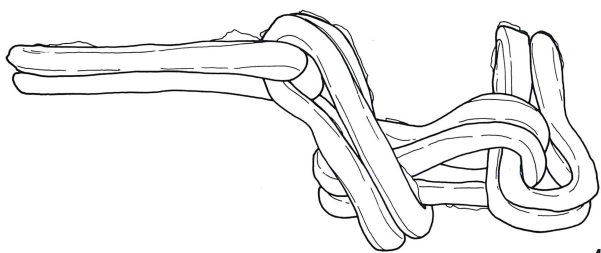
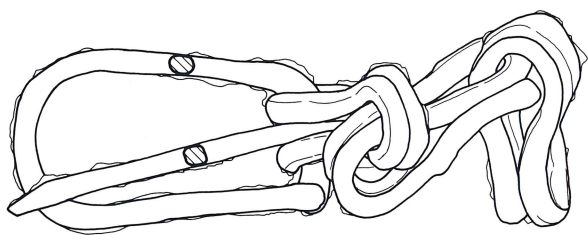


45



46

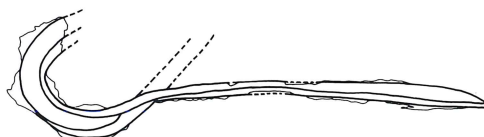
47



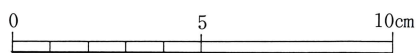
48

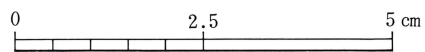
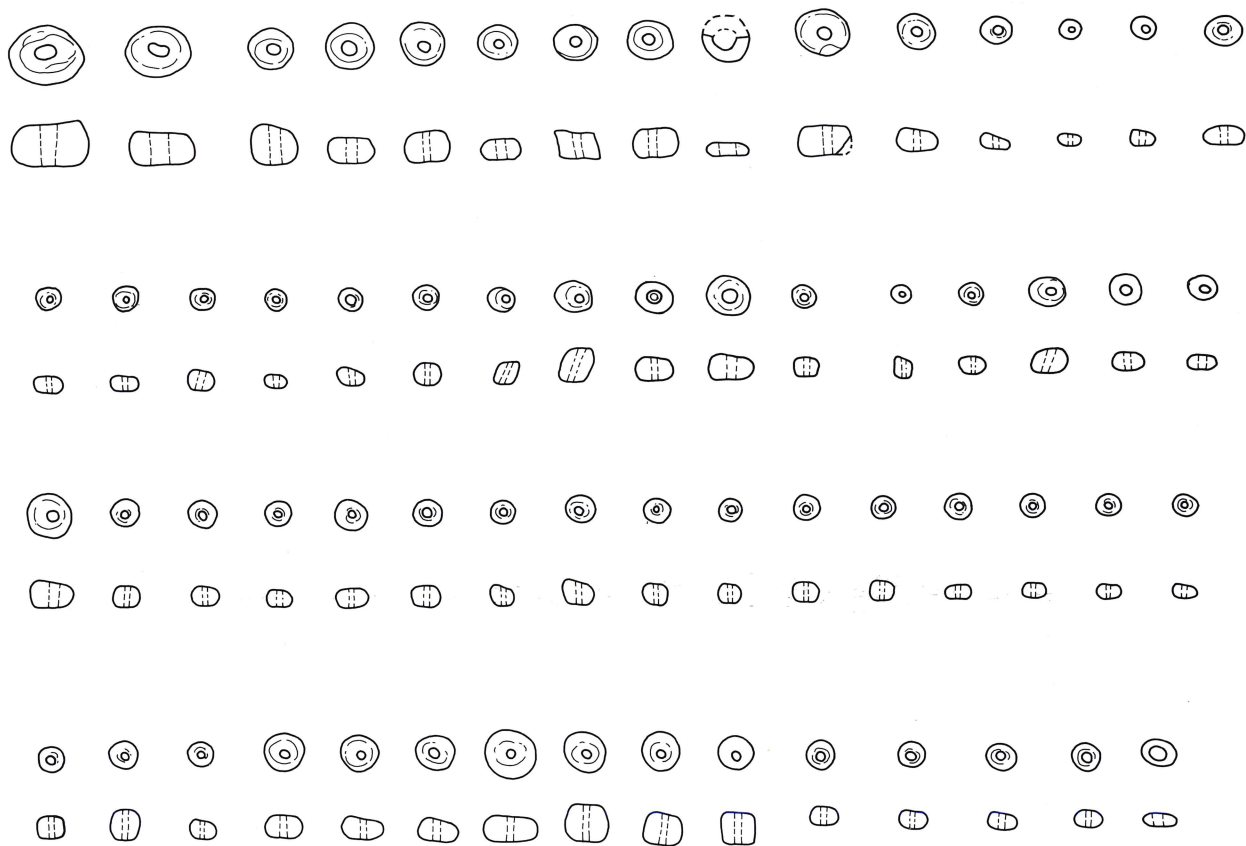
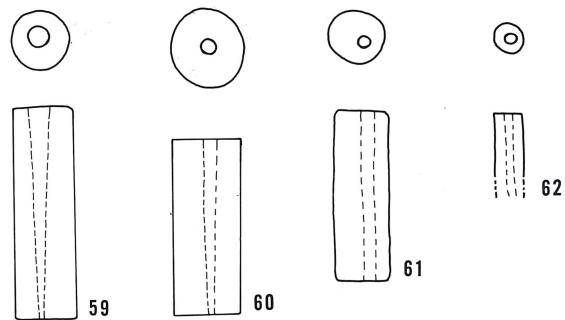
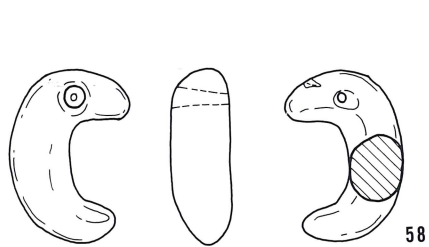
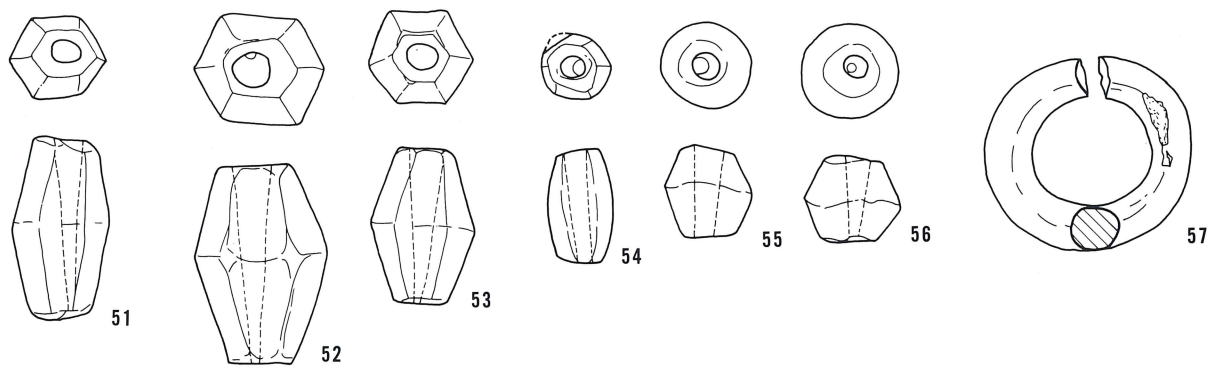


49



50





第95图 16号横穴墓出土文物实测图(4)

第29表 16号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏身	・12.2 ・4.3 ・14.1	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、浅く丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黄色	精緻	やや不良		
2	坏蓋	・13.6 ・5.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。 外面頂部には、ツマミがつき、天井部は高くやや丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗青灰色	0.5~3.5mm の白色砂粒 をやや多量 に含む	良好		
3	坏身	・13.4 ・4.9 ・15.9	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 底部は、やや深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
4	高坏	・12.6 ・7.8 ・—	坏部は、上外方に外反しながらのび、端部は丸く内面に沈線をなす。脚部は、下外方にのび、端部は内面に沈線をなす。	?	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	1~3mmの 砂粒を含む	良好		
5	高坏	・12.6 ・7.2 ・—	坏部は、上外方にのび、端部は丸い。脚部は、下外方にのび、端部でさらに外反し面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	1~3mmの 砂粒を含む	良好 堅緻		
6	高坏	・11.7 ・7.5 ・—	坏部は、ほぼ上外方にのび、端部は丸い。 脚部は短く、端部でさらに外反し丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	1mm以下の 白色砂粒、 石英を含む	良好		
7	短頸壺	・8 ・10+ α ・17.8	口頸部は、短くやや内傾しながらのび、端部に行くにつれ、やや肥厚し丸い。胴部の最大径は、中心部にある。外面胴部のやや上方に、2本のうすい沈線あり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	1~2.5mm の白色砂粒 を少量含む	良好	反転復元	
8	平瓶	・6 ・10.2+ α ・—	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。 胴部はだ円形で、外面背部に円形浮文を呈す。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm前後の 白色砂粒を 少量含む	良好		
9	平瓶	・7.3+ α ・13.8 ・16.8	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。 胴部はだ円形を呈し、底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	0.5~3.5mm の白色砂粒 を少量含む	良好		
10	坏身	・— ・3.4+ α ・12.8	たちあがりは磨減して、欠損。 受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は、浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ か?	回転ヘラ切り	黄白色	精緻	不良		外面側面部「し」
11	坏蓋	・14.9 ・3.9 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。外面には、丸い稜がみられる。 天井部は、低く平らである。	調整ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転ナデの 上から部分的 に回転ヘラ ケズリ	青灰色	精緻	良好		
12	坏身	・12.3 ・4.4 ・13.7	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。 受部は、のびておらず丸い。底部は、やや浅く丸みをおびる。	回転ナデ、 ヘラミガキ	回転ナデ、 ヘラミガキ	淡赤褐色 黒灰色	精緻	良好	土師器	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
13	坏身	・13.4 ・3.4 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色 暗青灰色	1～5mmの 石英粒を多 量に含む	良好 堅緻		外面底部 「X」
14	坏蓋	・14.7 ・4.3 ・—	口縁部は、わずかに外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。外面には、丸い稜がはっきりとみとめられる。天井部は低く平らである。	回転ナデ 同心円状の 当て具痕	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	1mm内外の 石英粒を多 量に含む	良好 堅緻		
15	坏蓋	・14 ・4.2 ・—	口縁部は、ほぼ直下に下り、端部は、内傾する段を有す。外面には、稜がわずかにみとめられる。天井部は、高くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
16	坏身	・12.9 ・4 ・+5	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡青灰色	1～3mmの 石英粒を含 む	良好		
17	坏蓋	・15.8 ・3.9 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部はとがる。外面には丸みをおびた稜がはっきりとみとめられる。天井部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
18	坏身	・12.8 ・4.3 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
19 A	坏蓋	・14 ・5.3 ・—	口縁部は、外反しながらほぼ直下にのび端部は、内傾する面を有す。天井部は、高く、外面頂部に、ツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～5mmの 白・灰色砂 粒をやや多 量に含む	良好		
19 B	有蓋高坏	・12.2 ・10 ・15	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、水平にのび、端部は丸い。坏部は、やや深い。脚部は下外方にのび、端部は内傾して丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細かい 白色砂粒を 多量に含む	良好 堅緻		
20	短頸壺	・7.3 ・7.9 ・13	口頸部は、短く直立しながらのび、端部は丸い。胴部ははり、最大径は上方にある。 底部は、ややとがりぎみで丸い。	回転ナデ	回転ナデ ハケ目 回転ヘラケズリ	灰色	1～2mmの 白色砂粒を 含む	良好		
21	坏身	・12.5 ・4.8 ・15	たちあがりは、内傾してのび、端部は内傾する面をなし、その中に1本の沈線がある。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は、やや浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰黄色	精緻	良好 堅緻		
22	有蓋高坏	・12.3 ・9.6 ・14.8	坏部のたちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平に肥厚しながらのび丸い。脚部は、下外方にのび、端部は丸く屈曲し、ややとがる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	白色砂粒を 多量に含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
		・口径 ・器高 ・胴部最大径		内面	外面	色調	胎土	焼成		
23 A	坏蓋	・14.4 ・5 ・-	口縁部は、ほぼ直下にのび、端部は内傾する段を有す。外面には、まるみをおびた稜がはっきりとみとめられる。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	精緻	良好 堅緻		
23 B	坏身	・13 ・4.4 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方へ肥厚しながらのび端部は丸い。底部は、やや浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	2~3mmの 白色砂粒を 少量含む	良好		
24 A	坏蓋	・14 ・5.3 ・-	口縁部は、やや開きながらのび、端部は内傾する段を有す。外面には、うすい稜がみとめられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	2~3mmの 石英粒を含 む	良好 堅緻		
24 B	坏身	・12.3 ・5 ・14.7	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、短くわずかに肥厚しながらのびる。底部は、深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2~3mmの 白色砂粒を 少量含む	良好		
25 A	坏蓋	・14 ・3.6+ α ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部は、低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り未 調整後部分 的にヘラケ ズリ	青灰色	精緻	良好	反転復元	
25 B	坏身	・12.8 ・5.4 ・-	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、小さく肥厚しながら水平にのびる。底部は、深くやや水平である。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
26	横瓶	・13.6 ・27.8+ α ・-	口頸部は、外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部は、だ円形を呈す。	回転ナデ 同心円のタ タキ	回転ナデ タタキを施 したあと回 転カキ目	明青灰色	0.5mm前後 の白色砂粒 を微量含む	良好 (やや軟質)	49号横穴墓遺 物と接合	
27	壺	・20.8 ・17.1+ α ・-	口頸部は、外反しながらのび端部は、いったんかえり丸い。胴部ははっている。	回転ナデ 同心円のタ タキのあと 軽く回転ナ デ	回転ナデ タタキを施 したあと回 転カキ目	青灰色	精緻	良好		
28	壺	・15.6 ・20.4 ・20.5	口頸部は、外反しながらのび、端部は、肥厚し段をなし丸い。胴部の最大径は、やや上方にあり、底部は、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目、櫛 描列点文 回転ヘラケズリ	青灰色	角閃石、石 英その他の 砂粒を少量 含む	良好		外面頸部下 半「X」
29	坏蓋	・4.2 ・3.9 ・-	口縁部は、ほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は、低く平らである。	ヘラミガキ 回転ナデ	ヘラミガキ ヨコナデ	赤褐色 黄褐色 暗灰色	精緻	良好	土師器	
30	坏蓋	・16 ・4.8 ・-	口縁部は、ほぼ直下にのびながら、わずかに外反し端部は丸い。天井部は、やや低く平らである。	ヘラミガキ 横方向のハ ケ目	ヘラミガキ	赤褐色 黄褐色 暗灰色	精緻	良好	土師器	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
31	坏身	・12 ・3.9 ・14.6	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、肥厚しながら水平にのび端部は丸い。底部は、浅く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色～ 青灰色	精緻	良好		
32	高坏	・10.8 ・8.1 ・-	坏部は、上外方にのび、端部は丸い。坏部の下側には、一本の太い沈線がある。脚部は、長くのび、裾部でひろがる。端部は、凹面をなす。		回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色～ 黒灰色	細かい白色 砂粒・黒色 砂粒を含む	良好		
33	高坏	・13.4 ・8.3 ・-	坏部は、上外方にのび、端部は丸い。脚部は短く端部でさらに外反し丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色～ 黒灰色	細かい砂粒 を含む	良好 堅緻		
34	高坏	・13.3 ・8.8 ・-	坏部は、上外方に外反しながらのび、端部は丸い。脚部は、下外方にのび、端部はさらに外反し丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	精緻	良好		
35	提瓶	・8 ・17.2 ・13.1	口頸部は、外反しながらのび、端部は、外傾する面をなす。中にうすい沈線をなす。胴部は、円形を呈し、外面両肩に輪状の把手がつく。	回転ナデ	回転カキ目	青灰色～ 淡紫褐色	0.5～3mm の白色砂粒 をやや多量 に含む	良好		
36	壺	・10.8 ・7.3 ・13.8	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。	ヘラミガキ? ナデ?	回転ナデ? ヘラミガキ	赤褐色	精緻	良好	土師器	
37	坏身	・11.8 ・4 ・13.7	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、のびておらず丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ ヘラミガキ	回転ナデ 器面が磨滅 しているため 調整不明	赤褐色	精緻	良好	土師器	
38	長頸壺	・19.6 ・29.2 ・20	口頸部は、外反しながらのびる。端部は、段をなしその外面上方に、沈線をなす。外面には、2条の沈線が2ヶ所にある。胴部は、円形を呈し、底部はとがりぎみである。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 櫛描波状文 平行タタキ +回転カキ 目	青灰色	石英粒等の 微細粒子を 含む	良好	胴部に緑色の 自然釉が多量 にかかっている 外面底部に焼 き台の痕跡あり	
39	提瓶	・7.8 ・19 ・15.7	口頸部は、外反しながらのび、端部は面をなし丸い。胴部は、円形を呈し、外面両肩にツノ状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	暗灰色～ 紫灰色	1～2mmの 石英粒を多 量に含む	良好		

第30表 16号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番 号	器 種	全 長	頭部長 (刀部)	刃 幅	頸 幅	刃部厚	頸 厚	備 考
40	鉄鏃	6.8以上	6.8	3.5	不明	0.2	不明	墓道出土
41	同上	8.8以上	6.7	1.4	0.5	0.2	0.1	墓道出土
42	同上	11.2	6.3	2.0	0.6	0.2	不明	木質残存
43	同上	9.5	6.6	1.9	0.5	0.2	0.3	同上
44	同上	7.8以上	6.0	1.7	0.5	0.1	0.2	
45	同上	7.5以上	6.2	1.8	0.8	0.2	0.1	
46	同上	7.7以上	5.6	1.8	0.5	0.2	不明	木質残存
47	同上	14.9	2.8	1.0	0.5	0.2	0.2	同上
48	馬具							鉸具・兵庫鎖
49	刀子	11.2	6.5	1.1	不明	0.2	不明	鹿角製柄残存
50	馬具							U字形金具

第31表 16号横穴墓出土装身具計測表

(単位：mm, g)

番 号	種 類	材 質	色 調	直 径	短 径	孔 径	重 量	備 考
51	切子玉	水晶	透明	13	12.5	3.5~1	4.75	片面穿孔
52	〃	〃	〃	22	15	4~1	5.7	片面穿孔
53	〃	〃	〃	11	14	4~1	4.85	片面穿孔
54	〃	〃	〃	14	9	3~1.5	1.6	片面穿孔
55	〃	〃	〃	12	12	4~2	2.1	片面穿孔
56	〃	〃	〃	13	11	3.5~1	2.25	片面穿孔
58	勾玉	メノウ	黄土	13	8(最大幅)	3~1	3.45	片面穿孔
59	管玉	碧玉	暗緑	18	8	3~0.5	3.7	片面穿孔
62	〃	〃	淡青	不明	4	1	3	片面穿孔
60	〃	〃	暗緑	13	9	2~1	4.4	片面穿孔
61	〃	〃	淡緑	12	7.5	2	2.3	片面穿孔
	丸玉	ガラス	藍	10	6~5	2	0.7	
	〃	〃	〃	8	4	2.5	0.4	
	〃	〃	〃	6	5~4	1.5	0.3	
	〃	〃	〃	6	3	〃	0.2	
	〃	〃	〃	6	4.5	〃	〃	
	〃	〃	〃	5	2.5	1.5	0.1	
	〃	〃	〃	6	3.5	〃	0.3	
	〃	〃	緑	6	3.5~3	1.5	0.2	
	〃	〃	〃	5.5	1.5	2		半欠
	〃	〃	青	5	4~3.5	1	0.15	
	小玉	〃	〃	〃	5	〃	0.3	
	〃	〃	〃	7	3	〃	0.2	
	〃	〃	〃	5	3	〃	0.15	

番号	種類	材質	色調	直径	短径	孔径	重量	備考
	丸玉	ガラス	青	◇	3~2	◇	◇	
	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	
	◇	◇	藍	5	4.5~3	◇	0.2	
	◇	◇	青	4	4	◇	0.15	
	小玉	◇	淡緑	3.5	2.5	◇	0.1	
	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	
	◇	◇	◇	3	◇	◇		
	◇	◇	◇	4	2~1	1		
	◇	◇	淡青	4	2	1		
	◇	◇	青緑	4	3.5	◇	0.1	
	◇	◇	青	5	◇	◇	0.15	
	◇	◇	淡青					
	◇	◇	◇	4	4	1	0.1	
	◇	◇	◇	3	2	◇		
	◇	◇	淡緑	2	2.5	0.5		
	◇	◇	淡青	2.5	3~2.5	1		
	丸玉	◇	藍	7	4	1.5	2.05	
	小玉	◇	淡青	4	2	1		
	◇	◇	藍	3.5	◇	◇		
	◇	◇	◇	◇	3~2.5	◇		
	◇	◇	◇	3	2	◇		
	◇	◇	淡青	3.5	2.5~2	◇		
	◇	◇	◇	4	2.5	1		
	◇	◇	◇	◇	◇	◇		
	◇	◇	◇	3	3~2	◇		
	◇	◇	◇	4	◇	◇		
	◇	◇	◇	3	2.5	◇		
	◇	◇	◇	◇	◇	◇		
	◇	◇	◇	◇	◇	◇		
	◇	◇	◇	3.5	◇	◇		
	◇	◇	◇	4	2	◇		
	◇	◇	◇	3.5	◇	◇		
	◇	◇	◇	3.5	◇	◇		
	◇	◇	◇	◇	1.5	◇		
	◇	◇	淡緑	3	2	◇		
	◇	◇	淡青	3.5	2.5	1		
	◇	◇	◇	◇	3	◇		
	◇	◇	◇	3	◇	◇		
	◇	◇	◇	3.5	2.5	◇		

番号	種類	材質	色調	直径	短径	孔径	重量	備考
	小玉	ガラス	淡青	4	4	1	0.1	
	〃	〃	〃	3.5	2	〃		
	〃	〃	〃	3.5	1.5	1.5		
	〃	〃	淡緑	3	2.5	1		
	〃	〃	〃	4	3	〃	0.1	
	〃	〃	淡青	5	2.5	1.5	〃	
	〃	〃	〃	3	〃	1		
	〃	〃	〃	5	3	〃	0.1	
	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	〃	〃	3.5	2.5~2	1		
番号	器種	外径		断面径		重量	備考	
57	耳環	27×25.5		6×6.5		13.5	銅地金張	

17号横穴墓

1. 立地、調査時の状況

17号横穴墓は、北支群北よりの斜面にあり南西方向に開口する。標高は約32.5mで、斜面の下位に立地する。全長は約4.59m、主軸方向をN-56.5°-Eにとり、保存状態は良好であった。調査前の草刈り時に、山芋穴が玄室の天井部に掘られており玄室内には多量の土砂が流入していた。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上部の「テラス状遺構」の検出、閉塞施設の調査、玄室内の流入土の除去等を行った。玄室内には若干の埋葬人骨が遺存していたので、九州大学医学部第二解剖学教室室員の調査協力を得て玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

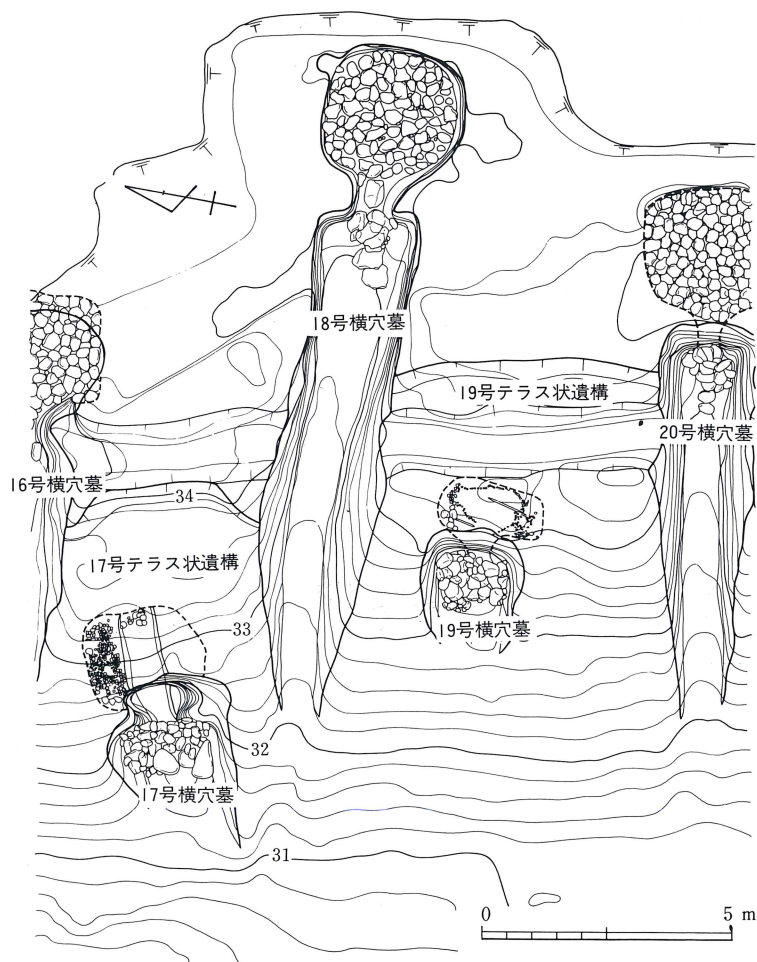
2) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ約2.01m、下幅は先端部で0.8m、羨門付近で1.39mを測る。台形状を呈している。前庭部は、黒褐色の風化土層（旧表土）より切り込まれている。前庭部床面は羨道部に向って約20°の傾斜で下降しているが、先端より0.5mと1.0m付近で段落ちして羨門部に達する。側壁の傾斜は両壁とも約120°で立ち上がる。また、羨門部壁の傾斜は約100°を測る。

羨門は特に天井部分と側壁部分において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。側壁下部が一部残存しており、閉塞施設との関係から復元される羨門は高さ0.6~0.8m、幅0.52mと推定される。

閉塞施設は板石と河原および地山円礫を使用し、入念に構築されているが、これは、墓道埋土の観察結果から最終埋葬時の状態を示している。まず、前庭部の下部に、初葬時および追葬時の埋土が約30cm程堆積しておりその上に閉塞の基底部をつくっている。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の5群に分けられる。第1群は幅0.55m、厚さ0.25m、長さ0.35mのやや大型の円礫を1個平坦面を上にして先の埋土に埋め込む。第2群は安山岩板石が3枚で第1群を根石とし羨門を覆う。第3群は人頭大の河原円礫を主に10数個からなり、第2群の下面の支えとなる。第4群は、人頭大の河原および地山円礫20個前後で、第3群を根石として第2群の上面を支え隙間を覆う。第5群は幅40cm、長さ70cm、厚さ20cmの大きい地山礫2個と比較的大型の河原円礫5個で全体を支えるように覆っている。以上の配石によって前庭部は、面積、堆積ともに約半分が埋まる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋土がなされていると考えられる。

b) 前庭部内埋土 当初の地山土の誤認により前庭部上層の埋土を除去したが閉塞石より下層は、明瞭な層区分ができ、全体で4層に分層した。以下堆積順に説明する。



第96図 17・19号横穴墓テラス平面図

第1層は墓道形成直後の基盤層の二次堆積土であり羨門付近で第2層によって切られている。若干炭化物を含む。初葬時の埋土と推定している。

第2層は、下位層と類似した性状を示し同層を覆っている。上面はよく締っており第1次追葬時の床面と考えられる。

第3層も下位層とほとんど同様な性状を示すが、若干軟質であり下層とは漸移的な変化しかしない。しかし上層とは明確な層区分ができることから第1次追葬時の閉塞埋土と考えられる。なお、閉塞石第1群がこの層にありこれは最終埋葬時には動かされてない可能性が大きい。

第4層は第3層をカットするように堆積しており閉塞石の大部分がこの層で覆われているところから、最終埋葬時の閉塞埋土と考えられる。この層より土師器壺（第100図1）が検出された。

3) 羨道、玄室

羨道部は床面で幅0.47m、長さ0.53mを測る。床面は約12°の傾斜で玄室に向かって下降する特徴をもつ。天井部は崩落によって不明である。玄室は略隅丸方形を呈し、最大幅2.36m、長さ2.2mを測る。右側壁は固い岩盤にあたった為掘りきれず弧状を呈している。高さは天井部の崩落のために明確でないが、約0.7mと推定される。床面は左右に高さ10cm程地山を削り出して屍床を付設している。床面には5cm程度の埋土を玄室全面と羨道部に行っている。左側屍床には長さ1.6cm、幅0.7mの範囲で径10cm以下の河原円礫を敷き、礫床としている。また、玄室左袖側に、幅15cm前後、長さ20cm前後の人頭大の河原円礫2個で石枕としている。なお、奥壁側においても頭位にはやや大型の河原石を使用している。（村上久和）

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 人骨は3体が出土しているが、保存は不良である。1号人骨は、羨門からみて左側の礫床上で、羨門側に設けられた石枕上に乗った成人男性の頭蓋骨である。

2号人骨は、礫床上の奥壁近くで検出された若年で、頭蓋骨のみである。

3号人骨は、左右の屍床にはさまれた通路の最奥部に、土器とともに置かれていた成年女性で、頭のみであり四肢骨を伴わない。

以上の所見からは、埋葬順位等については知りえず、3号人骨が二次的に動かされていることのみ明らかであるが、右側の屍床にも鉄鏃等が存在するので、本来はこれ以上の被葬者数であったことがうかがえる。

（田中良之）

b) 副葬品 玄室内には左側屍床に東西差し向いに2本分、奥壁の土器一括埋置付近に一体分の人骨が遺存していた。遺物は、左側屍床の側壁ぎわの中央よりやや奥壁よりに土師器壺1個（第100図2）が検出された。これは2号人骨よりレベル的に上にあり1号人骨の埋葬に伴って左側部に置かれたものと推定される。また、中央奥壁に接して、土師器壺2個、同埴2個、同壺1個、同脚付壺4個（第100図3～11）が最終埋葬時に一括埋置された状態で検出された。この中には骨片も含まれていた。左側屍床中央通路側に鉄鏃6点が集中し、刃先を北東に向け置かれていた。また同屍床中央の右裾部寄りに刀子1点が刃先を北に向け置かれていた。

（村上久和）

4. 17号横穴墓出土人骨の所見

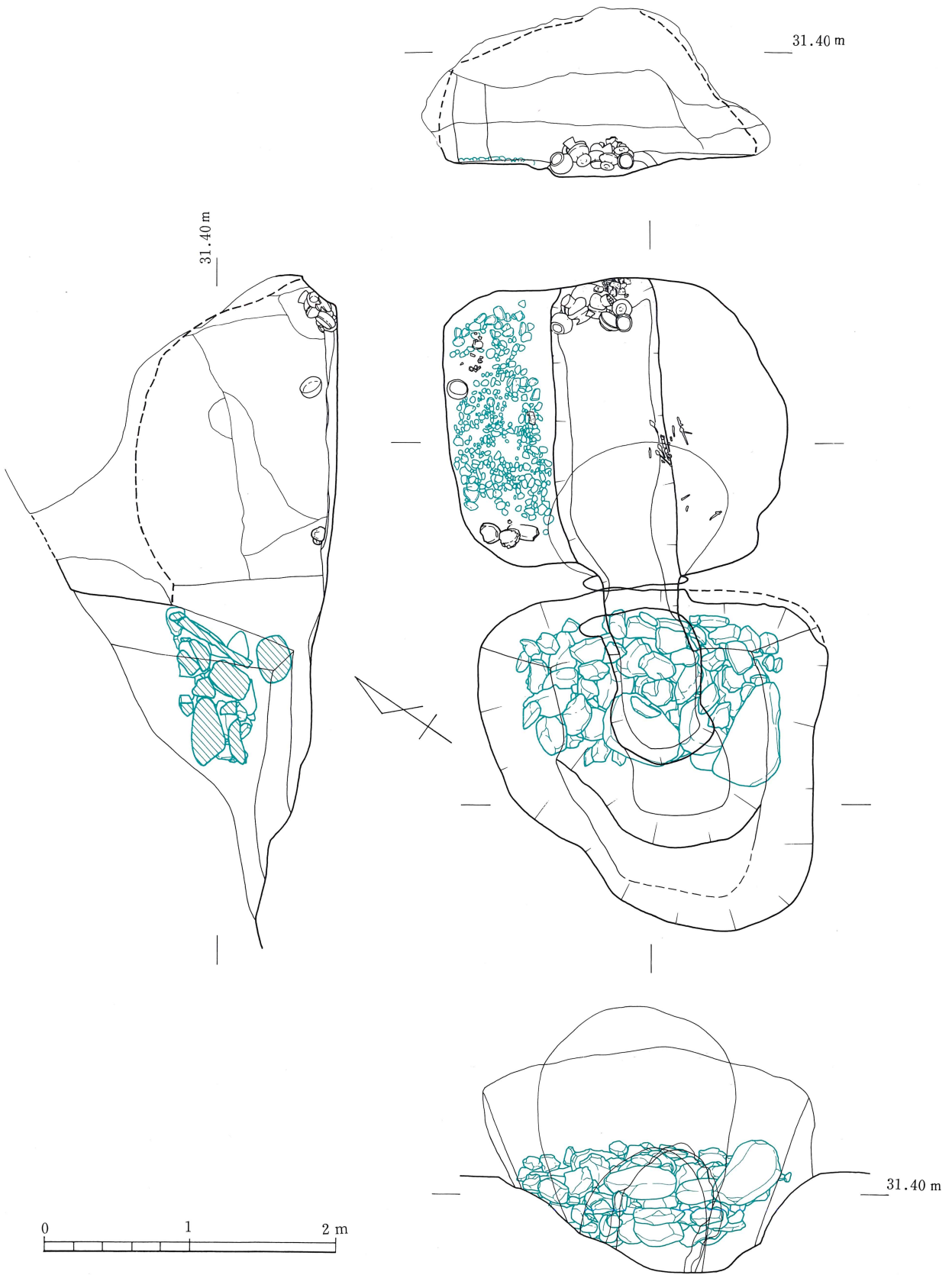
成人骨2体分（男性・女性）と若年1体分、計3体分の人骨片が検出された。各人骨の所見を以下に示す。

17-1号人骨（男性・成人～熟年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：前頭骨、右頭頂骨片。赤色顔料の付着が認められる。

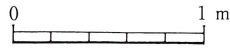
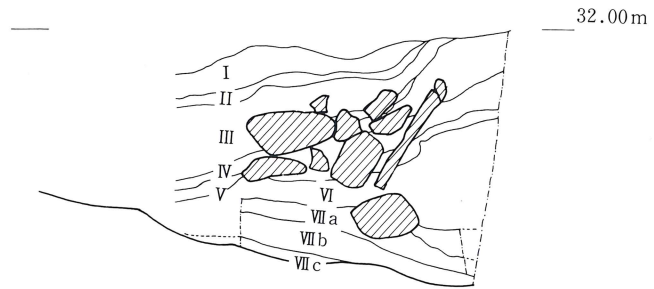
体部骨：同定不能の四肢骨細片がわずかに検出できただけで、軀幹骨は消失している。



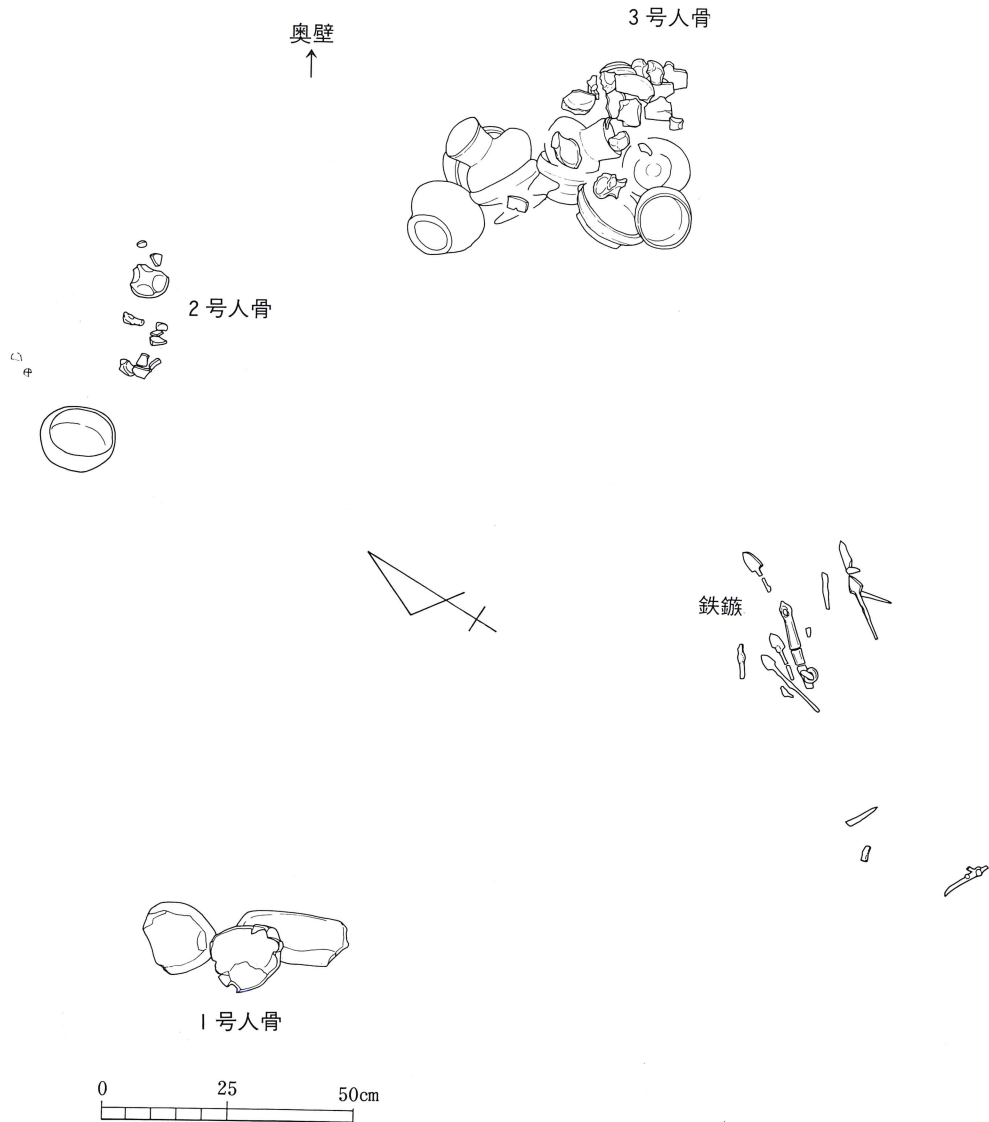
第97图 17号横穴墓平·断面图

17号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I	黒灰色		ソフト	風化した表土層
II	赤褐色		ハード	
III	暗黒褐色	粘質土	ソフト	IV・Vの風化土層
IV	赤褐色	粘質土	ハード	
V	暗赤褐色	粘質土	ややハード	
VI	茶褐色	粘質土	ハード	VIは最終埋土
VII a	赤暗褐色	粘質土	ハード	VII a・bは初葬埋土
VII b	暗褐色	粘質土	ハード	
VII c	赤褐色	粘質土	ハード	初葬時埋土



第98図 17号横穴墓縦断土層図



第99図 17号横穴墓玄室内人骨出土状態

〈性別・年齢の推定〉

性別：側頭線が良く発達しており、骨質も頑丈であることから、男性と推定した。

年齢：冠状縫合の内板が50～60%程度閉鎖し、外板は開離している。したがって、それほど高齢ではないと思われるが、縫合は個体変異が大きい点を考慮し、成年～熟年としておきたい。

17-2号人骨（性別不明・若年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：右側頭骨、右頭頂骨片、後頭骨、歯牙6本。赤色顔料の付着あり。

残存歯牙の歯式を以下に示す。

$(M^3) M^2 M^1 / P^1 C / I^1$	$I^1 / / / / / / / /$
$/ / / / / / / /$	$/ / / / / / / /$

・ 遊離歯 () 未萌出 / 破損・不明

体部骨：赤色顔料の付着した大腿骨体部片が検出された。軀幹骨は検出できなかった。

〈性別・年齢の推定〉

性別：不明

年齢：頭蓋骨のサイズが小さく、まだ小児に近いと考えられるが、上顎右第3大臼歯の歯根形成がかなり進んでいることから、12～15才程度と推定した。

〈形質〉

保存状態が悪く計測が出来たのは歯牙だけであった。頭蓋非計測的形質は、インカ骨（-）、上矢状洞溝左傾（-）が観察できた。咬合型式は不明。

17-3号人骨（女性・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：前頭骨右半片、左右側頭骨片、左右頭頂骨片、後頭骨片、上顎骨片、下顎骨左半片、歯牙8本。残存歯牙の歯式を以下に示す。なお、3号人骨は片付けが行われているため、すべてが同一個体に属するものかどうかは不明であり、複数である可能性も残るが、特に複数であることが確認される部位が見当らなかったのでもとめて3号とした。

$/ M^2 M^1 \bigcirc \bigcirc \bigcirc \bigcirc \bigcirc$	$\bigcirc \bigcirc C P^1 P^2 M^1 \bigcirc \bigcirc$
$/ / / / / / / /$	$/ / / / / M_1 \bigcirc M_3$

○ 歯槽開放 / 破損・不明

体部骨：四肢骨細片が少量検出できた。

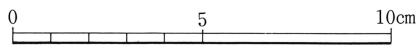
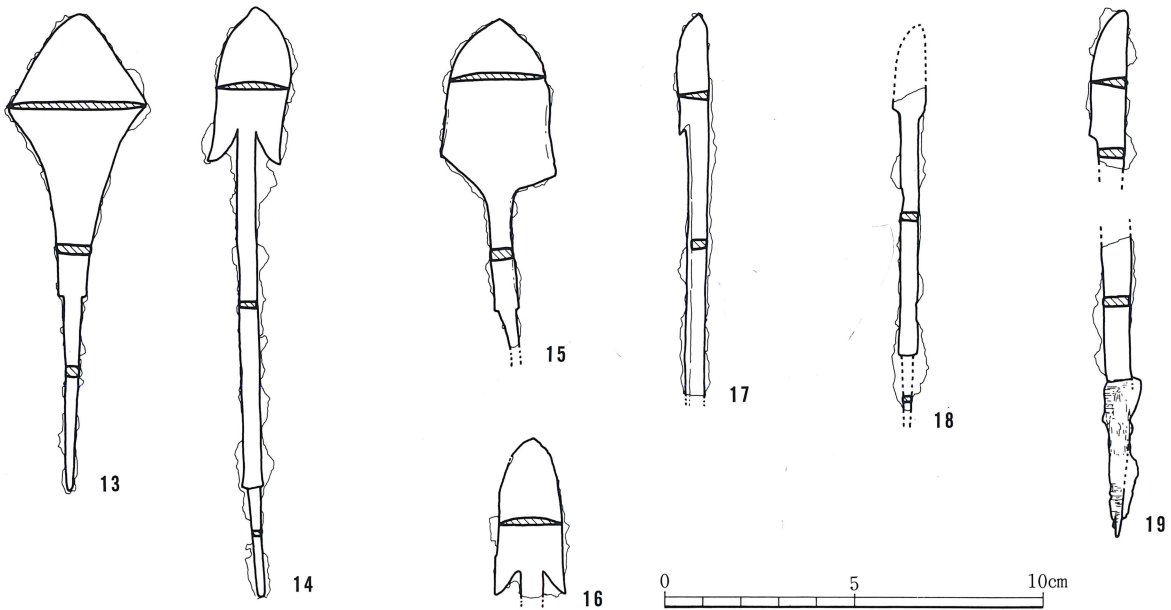
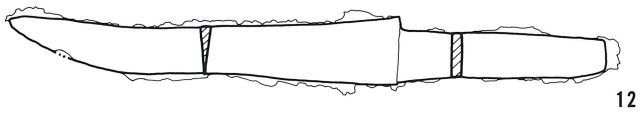
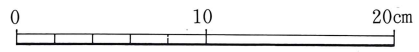
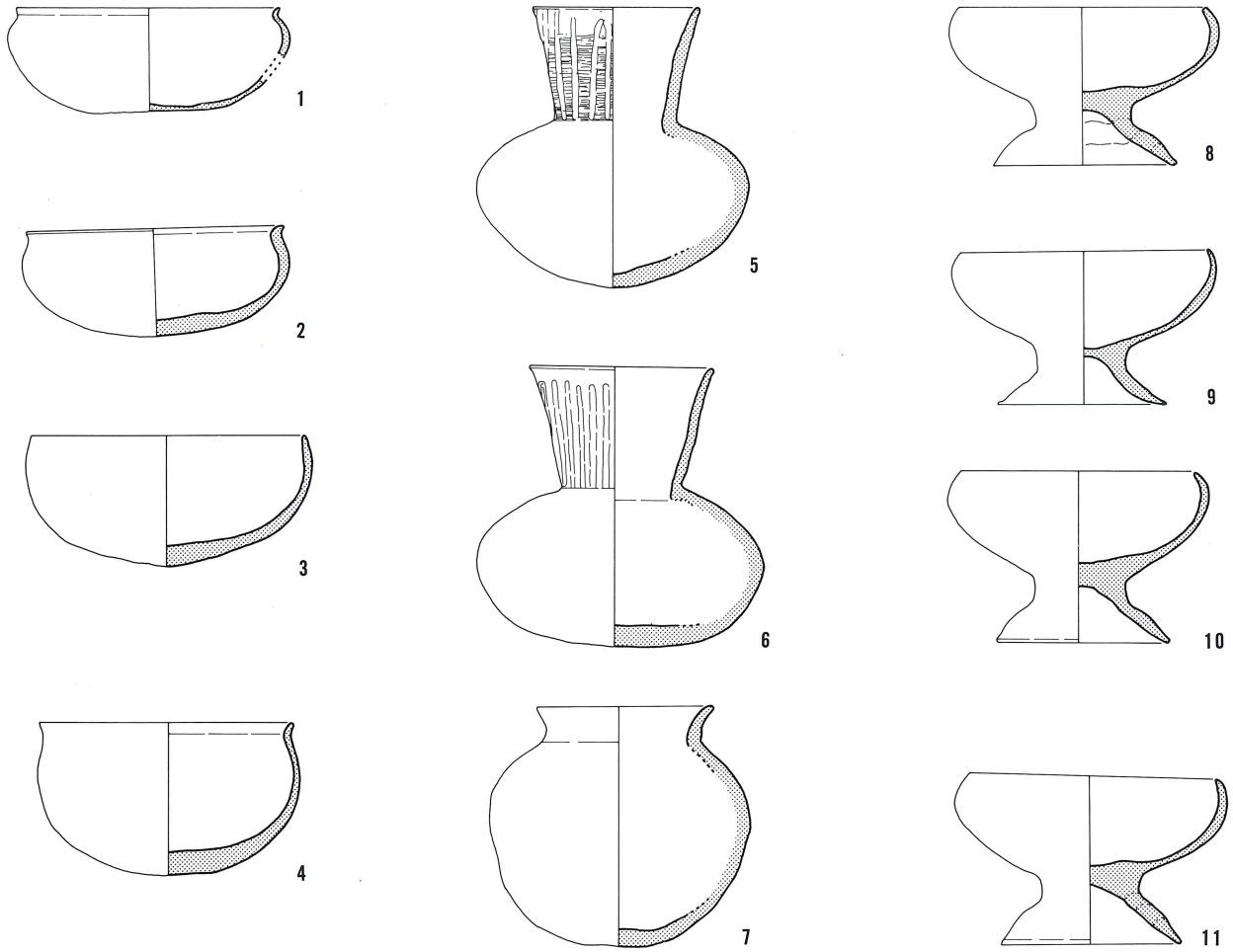
〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起の発達が弱く、頭蓋骨の骨質も全体に華奢で薄いことから、女性と推定した。

年齢：残存歯牙の咬耗度（Broca 1～2度）から、成年後半期（20代後半～30代）と推定した。

〈形質〉

頭蓋非計測的形質は、横後頭縫合（右、-）、アステリオン骨（右、-）、頭頂切痕骨（右、+）、上顎隆起（左右、-）、眼窩上神経溝（右、-）が観察された。咬合型式は不明。う蝕は認められなかった。（土肥直美）



第32表 17号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	碗	・14.1 ・5.5 ・—	口縁部は、上内方にのび、端部は外方に屈曲し丸い。底部は深く、やや平らである。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	明茶褐色	精緻	良好	土師器	
2	碗	・13.5 ・6.8 ・—	口縁部は、上内方にのび、端部は外方に屈曲し丸い。底部は深く丸みをおびる。	ヨコナデの後ヘラミガキ ヨコ方向の細いヘラミガキ	細いヘラミガキ	茶褐色部分的に黒斑あり	雲母、石英粒を多く含む	良好 堅緻	土師器	
3	碗	・14.6 ・6.9 ・—	口縁部は、内湾しながらのび、端部は丸い。底部は深く、丸みをおびる。	ヨコナデ、ユビナデ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	外茶褐色 明茶褐色 内黒色、内面はいぶしている	雲母、石英粒を多く含む	良好 堅緻	土師器 表面が風化している	
4	碗	・13.4 ・8.1 ・—	口縁部は、内湾しながらのび、端部で外方へ屈曲し、丸い。底部は深く丸い。	ヘラナデ	回転ナデ後 ヘラナデ ヘラナデ	黄茶褐色 外面に黒斑あり	石英、角閃石粒を多く含む	良好 堅緻	土師器 底部内面にススが付着している	
5	長頸壺	・9 ・15 ・14.5	口頸部は上外方にのび端部は細くなり、丸い。胴部はよくはり、最大径は、中央部にある。底部は丸い。	ナデ	ヨコハケ後に暗文 ハケ目後にナデ ハケ目	明茶褐色	石英、雲母砂粒を含む	良好	土師器	
6	長頸壺	・9.8 ・14.9 ・15.2	口頸部は、上外方にのび、端部はわずかに、外反し丸い。胴部はよくはり、最大径は、中心部にある。底部は平らである。	ナデ	ナデ後、暗文状のヘラミガキ	赤味を帯びた赤褐色	石英、雲母砂粒を多く含む	良好 堅緻	土師器	
7	壺	・9.3 ・12.7 ・13.7	口頸部は外反しながらのび端部は丸い。胴部は全体的に丸く、底部は平らである。	ヨコナデ、ユビナデ	回転ナデ、ユビナデ	明茶褐色	石英粒を含む	良好 堅緻	土師器	
8	脚付碗	・13 ・8.5 ・—	坏部の口縁部は内湾しながらのび、端部は丸い。坏部は深く丸みをおびる。脚部は基部でしまり、丸みをおびながら、外反してのび、端部は丸い。	ヨコナデの後、ヘラミガキ ナデの後、ヘラミガキ	ヨコナデ後 ヘラミガキ ナデ後 ヘラミガキ	茶褐色部分的に黒斑あり	雲母、石英微砂粒を多く含む	良好 堅緻	土師器	
9	脚付碗	・13.2 ・8.2 ・—	坏部は底部が深く、丸みをおびている。口縁部は内湾しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部に行くにつれて細くなり丸い。	ヘラミガキ	ヘラミガキ ユビナデ	茶褐色 内外面ともに黒斑あり	雲母微砂粒を含む	良好 堅緻	土師器	
10	脚付碗	・12.7 ・9.2 ・—	坏部は底部が深く、丸みをおびている。口縁部は内湾しながらのび、端部は丸い。脚部はいったんしまってから下外方にのび肥厚するが、端部は細くなり丸い。	ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ	茶褐色 外面に黒斑あり	雲母微砂粒を含む	良好 堅緻	土師器	
11	脚付碗	・13.3 ・8.9 ・—	坏部は底部が深く、丸みをおびている。口縁部は内湾しながらのび、端部は丸い。脚部は基部でいったんしまり、肥厚しながら下外方にのびるが、端部は細くなり丸い。	ヘラミガキ 回転ナデ	ヘラミガキ 回転ナデ	茶褐色 外面に黒斑あり	雲母微砂粒を含む	良好 堅緻	土師器	

第33表 17号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番 号	器 種	全 長	頭部長 (刀部)	刃 幅	頸 幅	刃部厚	頸 厚	備 考
12	刀子	15.7	10.2	1.8	1.3	0.2	0.25	木質残存
13	鉄鏃	12.5	7.5	3.6	0.4	0.2	0.25	
14	同上	15.5	4.0	1.9	0.4	0.2	0.15	木質残存
15	同上	8.6以上	4.1	2.9	0.6	0.2	0.3	
16	同上	4.2以上	4.1	1.8	0.5	0.2	不明	
17	同上	10.0以上	3.1	0.8	0.4	0.2	0.2	
18	同上	10.1以上	0.5以上	0.8	0.5	不明	0.2	木質残存
19	同上	13.8以上	3.2	0.9	0.7	0.3	0.2	桜樹皮巻き残存

18号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

18号横穴墓は北支群北寄の斜面、16号横穴墓の東南4mの所に位置し、16号、20号横穴墓同様ほぼ西方向に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高32.2m付近に設けられている。全長は14.28mを測り、主軸をN-71.5°-Eにとる。保存状態は前庭部から玄室にかけては近年の造成により大きく削り取られており、旧状を大きく損なっていた。墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、玄室内の調査等を行った。

2. 規模・構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は全長10.72m、幅は入口で底面幅0.62m、羨門部で上部幅1.82m、底面幅1.69mを測る。また近年の造成によって、墓道側壁、羨門、玄室天井等は大きく削平されている。墓道床面は凹凸を持ちながらも約5~10°の緩かな傾斜で羨門に向かって上がる。墓道入口から約4m程羨門方向へ寄った位置より墓道幅が広がるいわゆる前庭部を形成している。この部分の中央には玄室からの排水溝が羨門から約0.7m程続いている。排水溝には安山岩製の板石を4枚蓋石として使用している。

羨門は天井、側壁とも崩壊が著しく、復元は困難であり、幅は床面で0.65mを測る。

閉塞施設は最終埋葬時の状況を示している。まず排水溝の板石上に、安山岩製板石を3枚立てかけて羨門を塞いでいる。さらに10~40cm大の河原および地山円礫20個前後で板石を支え隙間を覆う。羨門を覆う板石2枚には通常とは逆の墓道側に赤色顔料が塗布されている。追葬時に表裏逆になった可能性が大きい。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で7層群20層に分層できた。

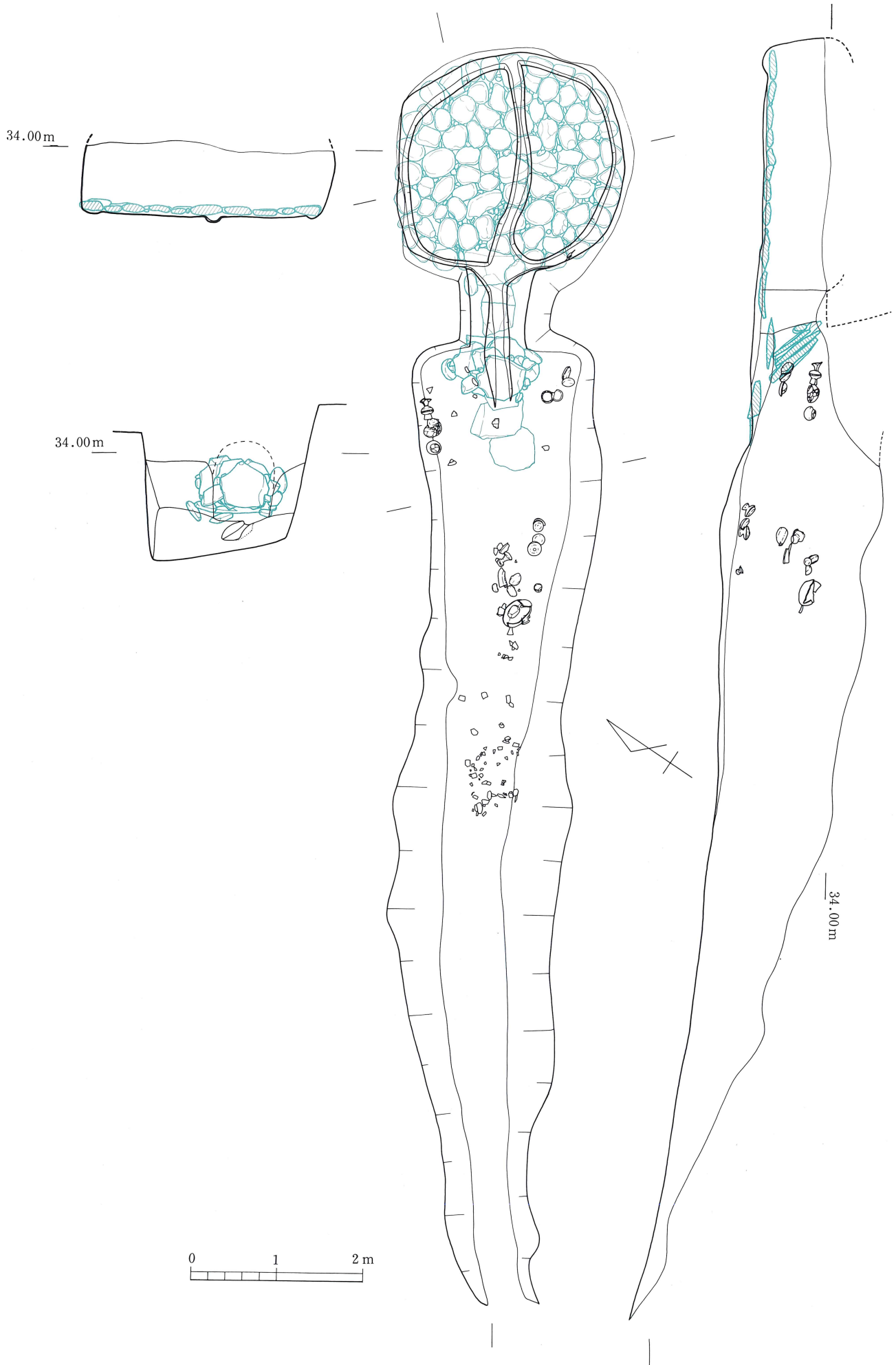
第1層群(X・XI層)は溝蓋石下面から入口方向へ約4.5m程レンズ状に堆積し、最も厚い所で30cmを測る。上層とは明瞭に区分でき、羨門付近は上層にカットされている。基礎層の二次堆積でその風化度合によって上下2層に分層できるが漸移的な変化である。初葬埋土と推定される。

第2層群(IXa・b層)は、閉塞石下面から入口方向約3.5m付近までレンズ状に堆積し、最も厚い所で30cmを測る。上層とは明瞭に区分でき、羨門付近は上層の閉塞埋土によって完全に削平される。本層はさらに上下2層に分けられる。(1)下層(IXb層)は基盤層の二次堆積でX・XI層に比べ軟らかく礫が多い。(2)上層(IXa層)はIXb層と性状はほぼ同じであるが若干風化している。遺物D群(第104図24~28)は本層中に含まれる。第1次追葬埋土と推定される。

第3層群(VII・VIII層)は、閉塞石上面から入口方向へ約6m程ほぼ水平に堆積し、最も厚い所で40cmを測る。上層とは風化土をはさんで明瞭に区分される。本層はさらに5層に区分される。下層から、(1)VIIIc層は最終埋葬時の閉塞埋土でやや風化した基盤層の二次堆積で固く締っている。本層中に遺物E群(第104図21~23)を包含する。(2)VIIIa層は(1)の先端上部から堆積する基盤層より構成される硬質の粘質土である。(3)VIIIb層は(2)層の下層に堆積する層で風化が若干進んでいる。本層は第2層群の最上面と考えるべきである。(4)VIIb層はVIIIa・c層の上部に堆積しており性状は(2)層とほとんど変わらないが若干礫が少ない。(5)VIIa層は(2)・(4)層の上面を覆う層で風化が著しく、炭化物を多量に含んでいる。本層群が第2次追葬(最終埋葬)埋土と考えられる。

第4層群(V・VI層)は、上面をカットされているが羨門上部付近から入口方向へ約8m程斜めに堆積した層で上層群とは風化土をはさんで明瞭に区分できる。本層はさらに3層に区分される。下層から(1)VI層は基盤層の二次堆積土で固く締った整地層面である。本層下面に遺物A群(第103図11~20)を包含する。(2)Va・b層は性状等が(1)と類似するが風化が著しい。その風化の度合によってa・b2層に分層される。

第5層群(IIIb・IV層)は、羨門寄の部分の大きくカットされているが、羨門上部より入口方向へ約7m程堆



積している。上層とは明瞭に区分できる。本層はさらに3層に区分される。下層から(1)Ⅳa・b層は基盤層の2次堆積で固く締った整地層面であり、固さの強弱によりa・b2層に分層される。(2)Ⅲb層は性状は(1)に類似するが風化が進んでいる。Ⅳa層最上面からⅢb層中面にかけて遺物C群(第103図7~10、第104図28)を包含する。

第6層群(Ⅱ・Ⅲa層)は、羨門寄の部分大きくカットされているが、羨門上部より入口方向へ約8m程斜めに堆積し、最も厚い所で80cmを測る。本層はさらに2層に区分される。(1)下層(Ⅲa層)はややきめ細かい基盤層の2次堆積土である。本層中に遺物B群(103図6、104図30)を包含する。(2)上層(Ⅱ層)は風化の著しい土層で本横穴墓の旧表土面である。なお、4~6層群とその遺物群は、埋葬に関わらない祭祀行為に伴う整地層とその土器群と推定される。

第7層群(Ⅰ層)は近年の造成による層でコンクリート等を包含する。以上の土層観察から本横穴墓では最低3回の埋葬と2回以上の埋葬に関わらない祭祀行為が認められる。

2) 羨道、玄室

羨道部は天井、側壁とも削平されており旧状を大きく損なっている。このため高さは不明である。底面は長さ0.9m、玄門幅0.83mと若干幅広になる。玄室は長さ2.45m、裾部幅2.2m、中央幅2.62m、奥壁幅2.2mのやや胴張りの略隅丸形状を呈し、床面には幅15cm前後、深さ5cm前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。中央の溝は羨道中央を経て前庭部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に広げるように行っている。なお右側壁と奥壁とのコーナー付近に人頭大の扁平な河原石を1個置き石枕としている。天井および周壁は崩落が激しく高さは不明である。奥壁の残存の形状からドーム状を呈すると推定される。

3. 遺物の出土状態

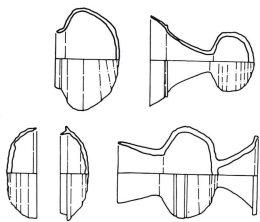
1) 玄室内

玄室内には造成による天井崩落土がびっしり堆積していたが清掃後に鉄器が検出された。右裾壁と右側壁のコーナー付近で鉄鏃2本(第104図31・32)が認められた。

2) 墓道内

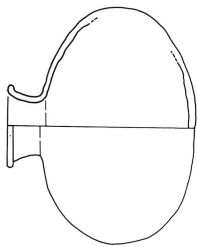
墓道内の遺物の出土層位については墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況の特徴について述べる。墓道下層の羨門より約2mの所のほぼ中央で、遺物D群(第104図24~28)が配列埋置の状態検出された。これは須恵器有蓋高坏、坏蓋・身、土師器高坏で構成され墓道長軸に並行して出土した。遺物D群の上層の羨門右コーナー付近で遺物E群(第104図21~23)が一括埋置の状態検出された。これは須恵器坏蓋・身3個体をセットで重ねて埋置したものである。E群の上層では羨門左コーナー付近で遺物A群(第103図11~20)が一括埋置の状態検出された。これは須恵器脚付長頸壺、坏蓋3個、坏身3個、蓋付短頸壺、臬、土師器碗で構成され、埋置状況は墓道左壁に添って羨門側より脚付長頸壺を横転させ、その横に須恵器坏身、坏蓋、臬、土師器碗を重ね合わせる。その横に蓋付短頸壺を正置させる。なお、この短頸壺内から内面を上に向けたカラス貝片6個が検出された。その状態から、貝は2次加工され短頸壺に収められたと考えられる。A群の上層では羨門より約2mの所のほぼ中央で遺物C群(第103図7・9、第104図28)が一括埋置の状態検出された。これは須恵器提瓶、坏蓋、臬、甕などで構成され、全て横転した状態で検出した。なお、埋置した下面では若干の焼土、炭化物が検出され挽火が行われたと推定される。C群の上層では隣接して遺物B群(第103図6・8、第104図29)が破碎散布された状態で検出されている。また、B群の上層でも有蓋高坏、坏蓋、坏身、甕等の破片等が検出され、甕片は20号、22号横穴墓の上層遺物と接合し、18号、20号、22号横穴墓共同の墓前祭祀が行われたと考えられる。(村上久和)

遺物A群



160

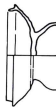
遺物B群



遺物B群



13



15

13

13

13

13

13

13

13

13

18号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I a	黄色	凝湿り粘質土	ト	遺物B群をおおう。
II	黒色	クロボク質土	ト	
III a	黄褐色	凝湿り粘質土	ト	
III b	暗褐色	凝湿り粘質土	ト	遺物C群をおおう。
IV a	褐色	凝湿り粘質土	ト	
IV b	暗褐色	凝湿り粘質土	ト	
V a	暗褐色	凝湿り風化土	ト	IV層は最終埋葬土
V b	暗褐色	凝湿り風化土	ト	
VI a	赤褐色	凝湿り砂質土層	ト	
VI b	暗褐色	凝湿り砂質土層	ト	最終埋葬土遺物D群をおおう。
VII a	暗褐色	凝湿り砂質土層	ト	
VII b	暗褐色	凝湿り砂質土層	ト	
VIII a	暗褐色	凝湿り砂質土層	ト	遺物E群をおおう。
VIII b	暗褐色	凝湿り砂質土層	ト	
VIII c	暗褐色	凝湿り砂質土層	ト	
IX a	暗褐色	凝湿り土層	ト	初葬埋土
IX b	暗褐色	凝湿り土層	ト	
X	暗褐色	凝湿り土層	ト	
XI	暗褐色	砂ミク状土	ト	Ⅷ-ⅩI層は17号横穴の墳丘埋土
XII	暗褐色	砂ミク状土	ト	
XIII	暗褐色	砂ミク状土	ト	

34.00 m

木根痕

XII
XIII

16

20

18

9

9

9

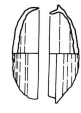
9

9

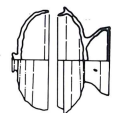
9

9

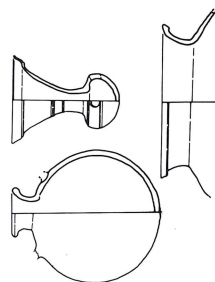
遺物E群



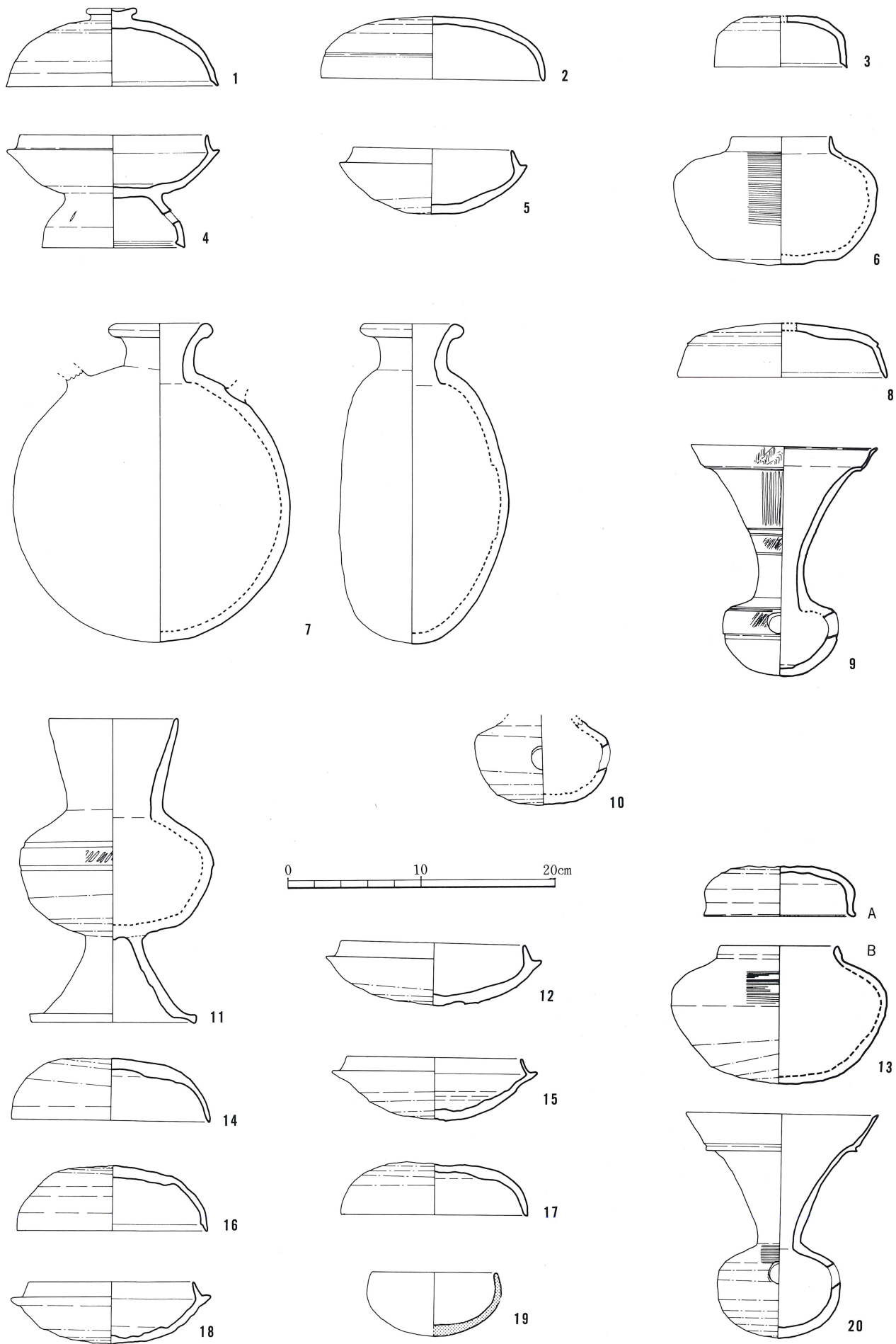
遺物D群



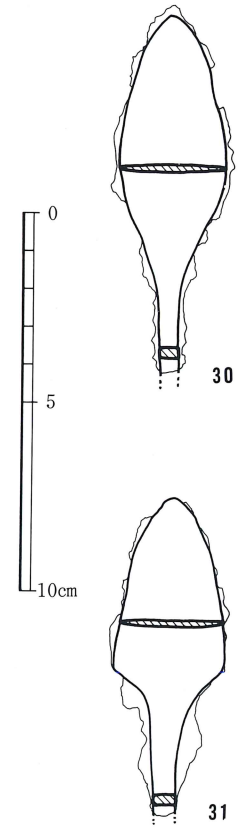
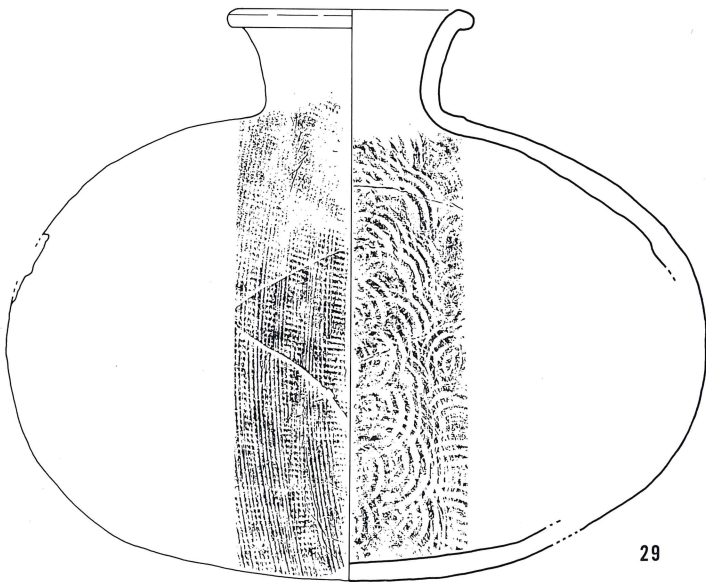
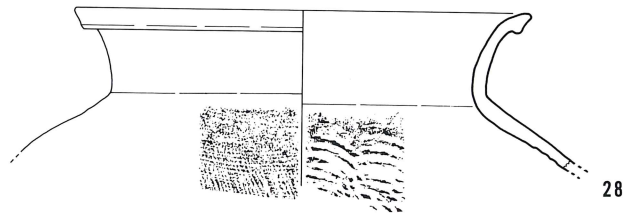
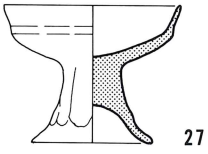
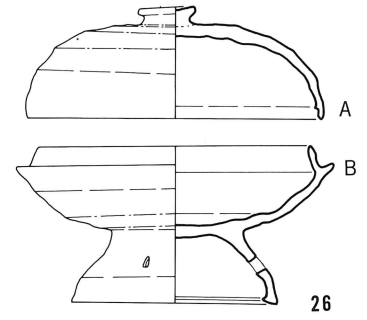
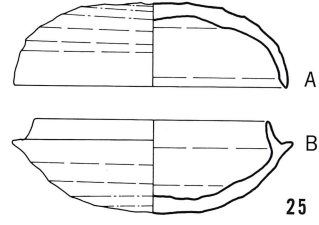
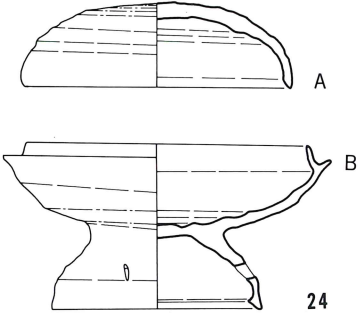
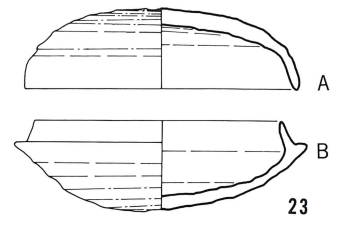
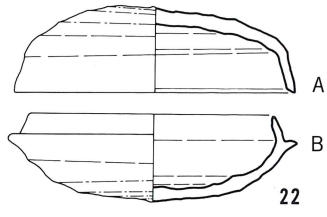
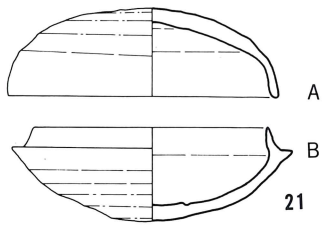
遺物C群



第102図 18号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第103图 18号横穴墓出土遺物実測図(1)



第34表 18号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・15.8 ・5.8 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部は高く、丸みをおびる。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 同心円当て 具痕	回転ナデ 回転ヘラケズリの上からナデ	淡青灰色	精緻	良好 堅緻		
2	坏蓋	・16.6 ・4.6 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。外面にはまるい稜がみられる。天井部は高く丸い。	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
3	罎蓋	・10 ・3.8 ・-	口縁部は、ほぼ直下にのび、端部は、内傾する面を有す。天井部は高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色 褐色 青灰色	精緻	良好 堅緻		
4	有蓋高坏	・14 ・8.3 ・16	坏部のたちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。脚部は下外方にのび、中央部で屈曲し、端部は面をなす。3ヶ所刀子状工具で透孔。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡青灰色	精緻	良好 堅緻	No 1 とセットの可能性あり	
5	坏身	・11.9 ・4.8 ・14.1	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1 ~ 5 mmの 石英粒を含む	良好 堅緻		
6	短頸壺	・7.4 ・15 ・9.6	口頸部は、短く、ほぼ直立しながらのび、端部は丸い。胴部の最大径は、上方にあり底部は平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ナデ	灰色	1 mm以下の 石英粒を含む	良好		
7	提瓶	・7.8 ・23.5 ・20.8	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し、丸い。胴部は円形を呈す。外面の両肩に、把手がついていた痕跡あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒灰色	3 mm以上の 白色砂粒を含む	良好 堅緻		
8	坏蓋	・15.7 ・4 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は、内傾する段を有す。外面には稜がみられる。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻	良好 堅緻		
9	甗	・13.8 ・17.2 ・8.5	口頸部は外反しながらのび、端部付近でさらに外反し端部は凹面をなす。外面中央部には、3本の沈線があり、胴部は、だ円形を呈し、底部は丸い。穿孔をはさむように外面に2本の沈線あり。	回転ナデ	波状文、櫛 描列点文 回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色 暗灰色	1 ~ 2 mmの 石英粒を含む	良好 堅緻		
10	甗	・10 ・6.3 + α ・-	胴部は、だ円形を呈し、中央部に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	灰色	1 mm以下の 細かい石英 粒を含む	良好 堅緻		
11	脚付壺	・9.5 ・22.4 ・14.5	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部はだ円形を呈し、外面に2本の沈線あり。脚部は、下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 櫛描列点文 回転ヘラケズリ	淡灰色	白色砂粒を 含む	不良	11 ~ 20一括遺物	
12	坏身	・13.6 ・4.6 ・16.1	たちあがり内傾してのび端部は丸い。底部は、やや浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1 ~ 1.5 mm の白色砂粒 を少量含む	良好 (やや軟質)		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
13	短頸壺	・9.2 ・10 ・16.4	口頸部は、短く直立してのび、端部は、とがりぎみ。胴部の最大径は上方にあり底部は、やや平らである。	回転ナデ	回転ナデ カキ目 回転ヘラケズリ	灰青色	石英粒を多量に含む	良好		
14	坏蓋	・14.8 ・4.6 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い、天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～4.5mmの白色砂粒を少量	良好 (やや軟質)		
15	坏身	・13.2 ・4.5 ・15.4	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～5mmの白色砂粒をやや少量含む	良好		
16	坏蓋	・14 ・4.9 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は段を有し丸い。天井部は、高くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 暗灰色	1mm以下の石英粒を含む	良好		
17	坏蓋	・14 ・3.8 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
18	坏身	・12.1 ・4.6 ・14.8	たちあがりは、内傾してのび、端部はとがる。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm以下の石英粒を含む	良好	土師器	
19	碗	・9.2 ・4.7 ・10	口縁部は、内湾しながらのび、端部は丸い。底部は深く、丸みをおびる。	ヨコ方向ヘ ラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色 黄褐色	精緻	良好		
20	臙	・14.2 ・16.6 ・9.1	口縁部は、外反しながらのび、端部付近でさらに外反し、その外面に沈線をなす。端部は面をなす。胴部はだ円形を呈しやや上方に穿孔がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色 黒灰色	1～2mmの白色砂粒を含む	良好 堅緻		
21 A	坏蓋	・14.3 ・4.7 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は、やや肥厚し丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色	1～3mm大の石英粒を含む	良好	21～27一括遺物	
21 B	坏身	・12.5 ・4.9 ・15	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は、深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色	1～3mm大の石英粒を含む	良好		
22 A	坏蓋	・14.6 ・4.7 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は、内傾する面をなす。天井部はやや高い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～3mm大の石英粒を含む	良好		
22 B	坏身	・12.7 ・4.6 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は、深く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細砂を含む	良好		
23 A	坏蓋	・14.3 ・4.3 ・—	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。外面には、稜がうすくみられる。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細砂を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
23 B	坏身	・12.9 ・4.7 ・15.4	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。底部は深く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細砂粒を含む	良好		
24 A	坏蓋	・14.2 ・4.3 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細かい白色砂粒を含む	良好		
24 B	有蓋高坏	・14.7 ・8.8 ・17.2	坏部のたちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。坏部は、やや浅い。脚部は下外方にのび端部は、内傾する面をなす。3方向に、タテ長だ円形のスカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 淡灰色	1~3mmの石英粒を含む	良好		
25 A	坏蓋	・14.5 ・4.3 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。 天井部はやや高く、平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細砂粒を含む	良好		
25 B	坏身	・12.3 ・4.9 ・14.8	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2~3mmの石英粒を含む	良好		
26 A	坏蓋	・15.6 ・5.6 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は細くなり丸い。天井部は高く、丸みをおび外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細かい白色砂粒を多量に含む	良好		
26 B	有蓋高坏	・14 ・8.3 ・16.4	坏部のたちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。 脚部は下外方にのび端部は内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	同上	良好		
27	高坏	・9.4 ・7.2 ・-	坏部の口縁部は、外反しながらのび端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は丸い。	ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	茶褐色	角閃石粒を多量に含む	良好	土師器	
28	甕	・24 ・9.2 ・-	口縁部は、外反しながらのび、端部は面をなす。	回転ナデ 同心円文	回転ナデ 平行タタキ 後カキ目	明青灰色 青灰色	1~3mmの白色砂粒 黒色砂粒を多量に含む。	良好 堅緻	20、22号横穴墓墓道出土遺物と接合	
29	横瓶	・13 ・30 ・37.8	口頸部は、外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部は、だ円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ (所々軽くナデ消している)	回転ナデ タタキ目 回転カキ目	青灰色	0.5~1.5mmの白色砂粒を含む	良好 堅緻		

第35表 18号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
30	鉄鏃	9.4以上	7.0	2.8	0.5	0.2	0.3	
31	同上	8.4以上	4.5	2.9	0.6	0.1	0.3	

19号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

19号横穴墓は、北支群の中央付近20号横穴墓の北側に位置し、ほぼ西方に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高34m付近に設けられている。主軸をN-78°-Eにとる。全長は、3.62mを測る。前庭部・玄室は、完全に埋没しており地表での確認はできなかった。斜面の遺構検出中に本横穴墓の供献土器群が現れ、発見の契機となった。調査は、前庭部プランの確認、同埋土の検討、テラス状遺構の確認、閉塞施設の調査等を行った。閉塞施設の除去後、玄室内に埋葬人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第二解剖学教室室員の協力を得て玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は、長さ約1.92m、下幅は先端部で0.3m、羨門付近で1.2mを測る逆おむすび形を呈している。前庭部先端は旧表土より切り込んでおり、前庭部掘削に先立っての地山整形等は認められない。旧表土切り込み部分から前庭部床面までの深さは約0.2mを測る。前庭部床面はほぼ平坦で羨道部に向って約16°の傾斜で下降している。側壁の傾斜は60°~70°を測る。また、羨門部壁の傾斜は約82°を測る。

羨門部分は左側壁部分が崩れているのみで旧状を留めている。羨門は高さ0.69m、幅0.52mを測る。

閉塞施設は河原および地山円礫を使用し入念に構築されている。閉塞の配石は形状と使用位置によって次の5群に分けられる。第1群は幅、厚さとも20cm、長さ40cm以上の円礫を4個平坦面を上にして基盤土直上に置く。第2群は幅30cm以上、長さ25cm以上厚さ10cm前後のやや扁平な円礫4個で第1群を根石として羨門を覆う。この4個の円礫は、羨門側の面にベンガラが塗布されている。第3群は人頭大の円礫を主に10数個からなり、第2群下面を支え、隙間を覆う。第4群は人頭大の円礫10数個からなり第3群を根石として第2群の上面を支え、隙間を覆う。第5群は幅、厚さとも30cm以上、長さ50cmの河原円礫1個と比較的大形の河原円礫2個および地山包含円礫20数個からなり全体を支えるように3~4群全体を覆う。以上の配石によって前庭部は面積、堆積共に約半分が埋まる。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土は、その性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で5層群6層に分層できた。以下堆積順に説明する。

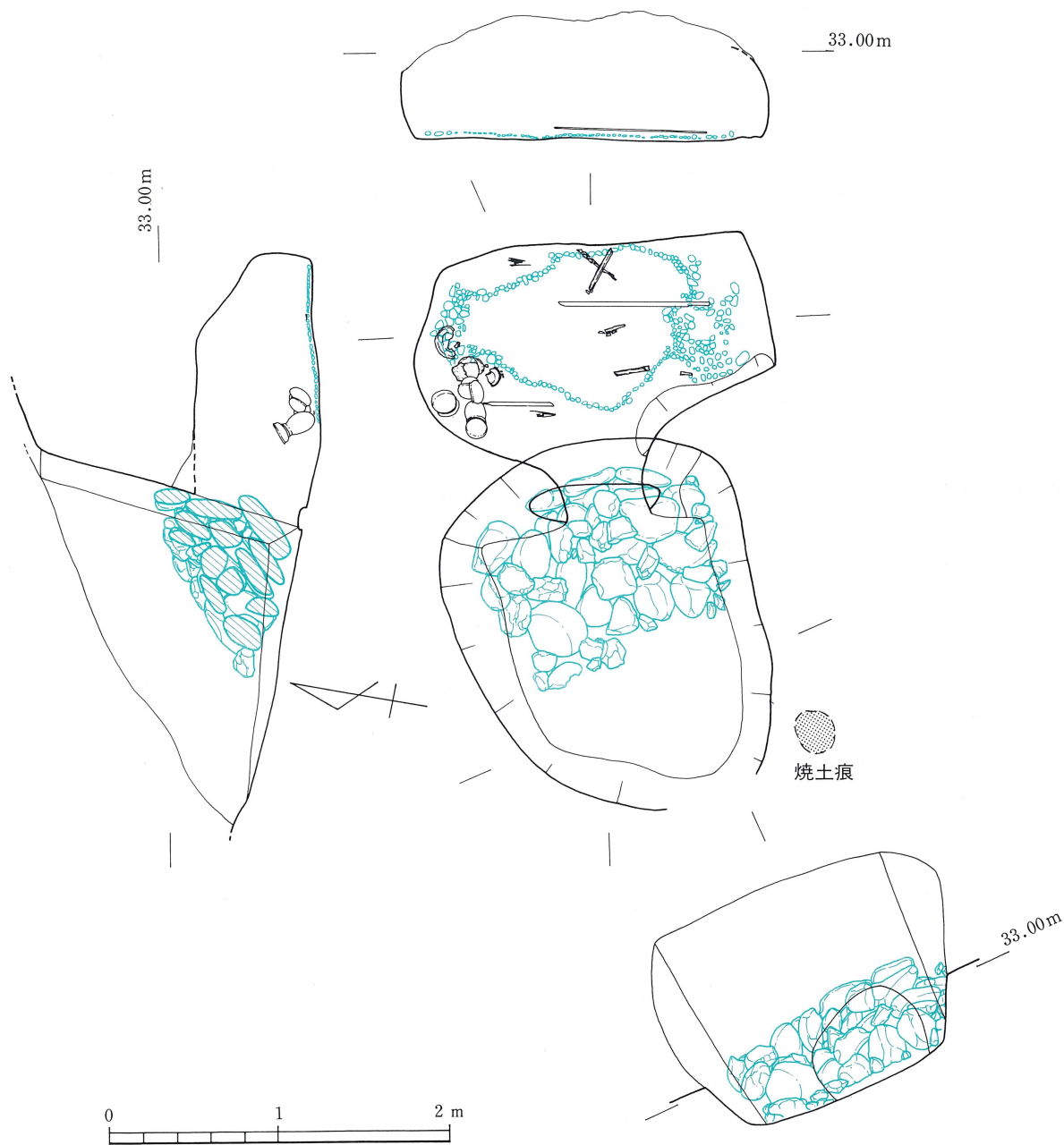
第1層群(Ⅳ層)は横穴墓形成以前の旧表土で前庭部掘方内には堆積していないことから前庭部形成時の築造直後に埋葬が行われたことが明らかである。

第2層群(Ⅴ層)は閉塞先端付近から約1.2mの範囲にほぼ水平に約10cm堆積している。本層群はさらに2層に細分される。下位から(1)基盤層の二次堆積土で固く締っており閉塞石最下面の下層に堆積する。(2)、(1)層が風化したもので漸移的变化が認められ部分的にのみみられる。

第3層群(Ⅱ~Ⅳ層)は羨門から約2mの範囲に約35°の傾斜を持ち最も厚い部分で約40cmの堆積が認められる。閉塞石全体を覆っている。性状は基盤層の二次堆積土であるが、軟質でパサパサしている。本層もまた上部風化層の2層に細分される。

第4層群(Ⅰ層)は羨門壁上部から約2.5m以上の範囲に約30°の傾斜を持ち、最も厚い部分で約60cmの堆積が認められる。性状は基盤層の二次堆積土に似ているが若干赤味を帯びる。本層は、本横穴墓の上部にあったと推定されるテラス状遺構のマウンドの一部と考えられる。(この層の上面で土師器壺、埴を検出した。)なお、本層は横断土層確認のためそのほとんどを削平した。

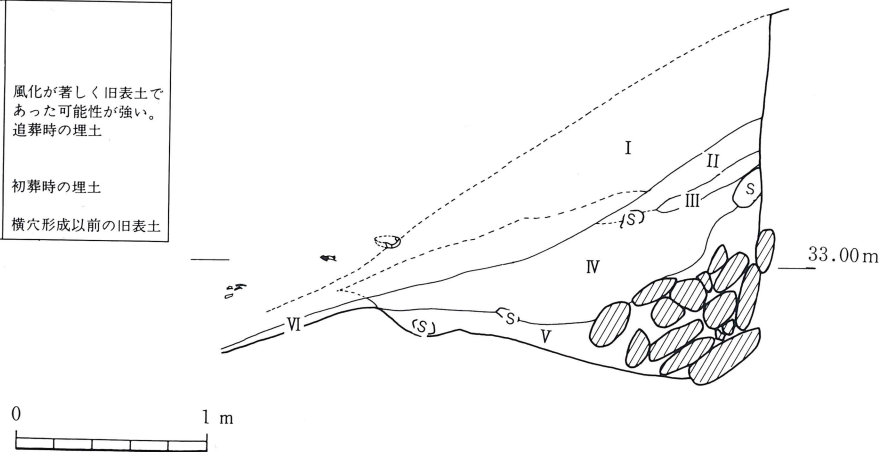
以上の観察結果から本横穴墓は上部にマウンドを持ち、少なくとも一回の追葬が行われたと考えられる。



第105图 19号横穴墓平·断面图

19号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
I	赤褐色	礫混り粘質土	地山に小円礫を含み乾燥するとクラックが生じる。	風化が著しく旧表土であった可能性が強い。追葬時の埋土
II	黄褐色	砂質土	ごく細かい粒子でバサバサする。	
III	暗褐色	粘質土	細かい粒子。風化土	
IV	黄褐色	礫入土	20cm前後の地山小礫を含む。	初葬時の埋土
V	黄褐色	礫入土層	2～3cm前後の地山小礫を含む。	
VI	暗褐色	粘質土	細かい粒子の風化土	横穴形成以前の旧表土



第106図 19号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

2) 羨道、玄室

羨道部は床面で幅0.45m、長さ0.43mを測る。床面は約15°のやや急な傾斜で玄室に向かって下降している。天井部は若干崩落しているが、推定高0.7m前後でほぼ水平に玄室天井部に接続すると思われる。玄室天井部とのくびれ等は認められない。玄室は平入り、略長方形を呈し、長さ1.27m、幅2.1mを測る。左裾部から左側壁部にかけては岩盤が硬かった関係上弧状を呈し、区切れが明確でない。高さは玄室中央で0.75mを測る。天井はドーム状を呈すると考えられるが、奥壁よりの岩盤が硬かったためにいびつである。床面は標高32.44mでほぼ平坦である。床面には2～3cm程度の埋土を玄室全面と羨道部に行っている。玄室中央部分には南北に長さ1.8m、幅0.9mの範囲で直径7cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。なお、礫床北側左裾寄りに、径12cm前後の平扁な円礫1個を置き、石枕としていた。羨道、玄室の天井および壁部には全面にベンガラが塗布されている。

3) テラス状遺構

本横穴墓羨門壁頂部の斜面上約3.4m東側付近に階段状の地山整形が認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、若干弧状を呈す。上端線は現状では標高34.81mであり、約20cmの段となっているが、この部分は後の造成で削平を受けており旧状はまだ段差があったと考えられる。整形に直行する土層観察が不十分なため盛土など墳丘に関する遺構の存在は不明であるが、前庭部の埋土の様相から墳丘が存在したと考えられる。また、横穴墓上方の近世初頭の溝より多量の須恵器が出土しており、これは本横穴墓のテラス祭祀に関わる遺物と推定される。(村上久和)

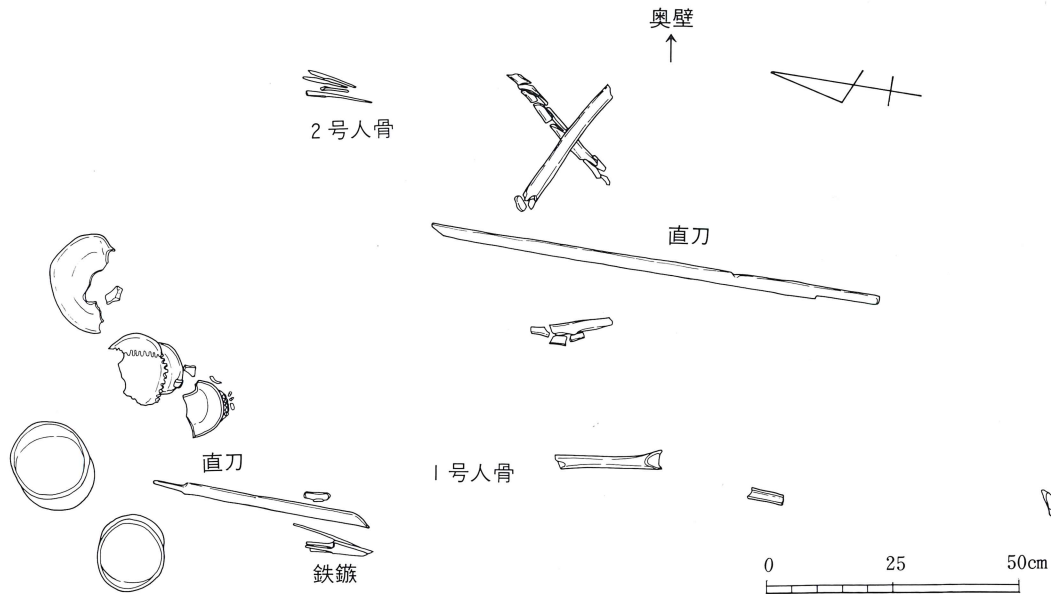
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 人骨は2体分が検出された。2体とも礫床上にあり、保存は良くない。羨門よりを1号人骨、奥壁よりを2号人骨とする。

1号人骨は、礫床左側に頭を向けた成年女性で、頭蓋骨と左右大腿骨および右脛骨片が遺存していた。頭は落石のため破損しているものの、下肢骨の位置関係は乱れていないことから、玄室内での位置も考慮して、最後に埋葬された被葬者と推定される。

2号人骨は、奥壁よりに1号人骨と平行した状態で検出された熟年男性で、頭蓋骨と左右大腿骨のみ残る。しかし、大腿骨は左右が交叉しており、埋葬されたままの状態ではないことを示している。(田中良之)



第107図 19号横穴墓玄室内人骨出土状態

以上の所見から、2号人骨→1号人骨の順に埋葬され、1号人骨が最後に葬られたことがわかる。しかし、遺存した人骨のみから判断すると男女2体の埋葬ということになるものの、副葬品、とりわけ武器類のあり方と上記の所見は整合しない。というのも、1号人骨頭蓋骨の手前に切先を右に向けた直刀と鉄鎌があり、2号人骨の両脇にも切先を左に向けた直刀と鉄鎌が存在するからである。上ノ原横穴墓群においては、女性に直刀・鉄鎌が副葬された例はなく、切先を頭の方に向けた事例もない。つまり、副葬品からみれば、1号人骨の他に差し違えに2体の男性が埋葬されていたことが想定されるのである。そして、1号・2号の2体が平行して順次埋葬されたとすると、2号人骨の大腿骨が動かされている点が不自然であったが、2体の男性人骨が玄室の奥に片付けられたとすると理解もしやすくなるし、2号人骨とした頭蓋骨と大腿骨は別個体の可能性もあるわけである。

この想定は、もう1体の男性人骨が確認されていないとはいえ、全体的に人骨の保存状態が悪いことから、その可能性を考慮する必要があるであろう。(田中良之)

b) 副葬品 玄室内には礫床上に二体分の成人人骨が北頭位で遺存していた。遺物はこの1号人骨の右腕に沿って鉄刀1振が、鉄刀の羨道側の右手付近に鉄鎌3点が重なった状態でそれぞれ検出された。ともに刃先を南向きとし、鉄刀は刃部を東向きに配置されている。頭位の右、左裾部コーナー付近にベンガラが集中したもの、土師器甕1個、同碗6個が葬送儀礼後一括埋置された状態で発見された。なお、この土器群の下面で若干の焼土塊と炭化材が検出され、甕内外面に二次的なススが附着していたことから玄室内においても食物を煮炊きした跡がうかがわれる。また、礫床中央で直刀1振、北側奥壁より鉄鎌4点で重なった状態でそれぞれ刃先を北向きに配置されている。このことからあと一体の埋葬人骨が想定でき、本横穴墓では3体以上の埋葬人骨があったと考えられる。しかしながら前庭部埋土状況は二回の埋葬しか認められないことから、最終埋葬は、第一次追葬に近い時期に行われたと想定される。

2) 前庭部

前庭部の埋土最上層で土師器柑、碗の破片を検出したがこれは原位置を保っておらず、追葬時に破棄したものと考えられる。さらに閉塞先端右で基盤直上にベンガラが集中して検出された。これは、玄室～羨道部にかけての天井・壁に塗布した際の祭祀に関わるものと考えられよう。また、前庭部先端より南に1.5mの地点、径0.6mの範囲で焼土および炭化材が検出された。これは玄室内に一括埋置した土師器群(特に甕)をここで一度使用し、再度玄室内に運んだものと考えられる。葬送における食物供献儀礼の一端を示すものである。(村上久和)

4. 19号横穴墓出土人骨の所見

ほぼ原位置にあると考えられる女性人骨1体と、片付けられているために確実なところは不明であるが、少なくとも男性が1体は含まれている。

19—1号人骨（女性・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：頭蓋冠、下顎骨体部片、歯牙28本。残存歯の歯式は以下のとおりである。

$$\begin{array}{c|c} \bigcirc M^2 M^1 P^2 P^1 \dot{C} / / & \dot{I}^1 \dot{I}^2 \dot{C} \dot{P}^1 P^2 M^1 M^2 / \\ \hline M^3 M^2 M^1 P^2 P^1 C I_2 I_1 & I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3 \end{array}$$

○ 歯槽開放 ・ 遊離歯 / 破損・不明

体部骨：左右大腿骨体中央部片、脛骨片、保存状態はいずれも不良であり、軀幹骨や上肢骨はほとんど消失している。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起および眉弓の発達が弱いことから女性と推定した。

年齢：歯の咬耗度（Brocaの1～2度）、特に下顎第3大臼歯の萌出と咬耗度、頭蓋主縫合の閉鎖の程度（内・外板とも離開）から成年前半（20代）と推定した。〈形質〉

全体に保存不良のため計測は出来なかった。非計測的形質の観察結果は付表に示すとおりである。大腿骨は粗線の発達も弱く、全体に細く華奢である。咬合型式は不明である。

19—2号人骨（男性？・成年～熟年）

〈保存部位〉

頭蓋冠の左半のみである。

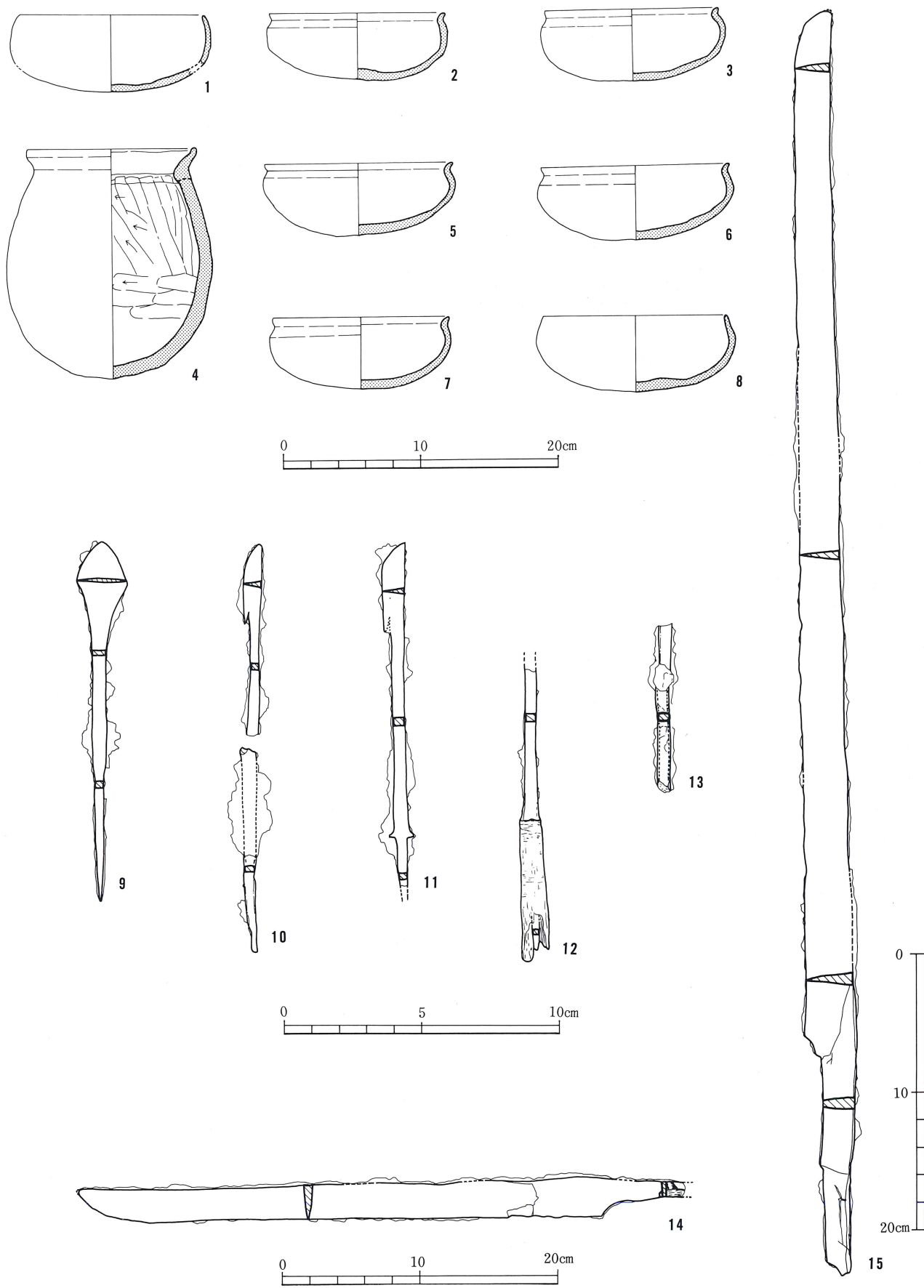
〈性別・年齢の推定〉

性別：骨質がもろく、サイズもやや小さいが、外後頭隆起は比較的発達している。所属のはっきりしない大腿骨がこの頭蓋骨に伴うものであれば明かな男性であるが、別個体の可能性も残るため男性（？）としておきたい。

年齢：頭蓋主縫合の内板はすべて閉じているが、外板は開離しており、成年～熟年程度と考えられる。

《所属不明大腿骨》

以上の他に、明かに男性のものと考えられる右大腿骨体部が検出されている。（土肥直美）



第108图 19号横穴墓出土遗物实测图

第36表 19号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	碗	・13.4 ・5.5 ・-	口縁部は、内湾しながらのび、端部は、丸い。底部は、やや浅く、平らである。	一部ヘラミガキ痕	不明	明黄褐色	精緻	良好	土師器 表面の風化が激しく調整不明	
2	碗	・12.4 ・16.5 ・15.1	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部は長丸で、胴部最大径と、口縁部の差は、あまりない。	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ、 荒いハケの のちナデ調整	黄褐色 明茶褐色	角閃石、長 石粒を含む	良好 堅緻	土師器 スス付着	
3	碗	・12.8 ・4.7 ・13.1	口縁部は、内湾しながらのび、端部は、外方に屈曲し、丸い。底部はやや深く、やや丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ、 ヘラケズリ	明茶褐色	1～2mmの 石英、雲母、 長石粒を含む	良好	土師器 一部、黒斑あり	
4	甕	・13.7 ・5.1 ・14	口縁部は、内湾しながらのび、端部は、外方に屈曲し丸い。底部は深く、やや丸みをおびる	ヨコナデ	ヨコナデ、 ヘラケズリ	明茶褐色 黄褐色	1～2mmの 石英、雲母、 長石粒を含む	良好 堅緻	土師器	
5	碗	・12.9 ・5.2 ・13.3	口縁部は内湾しながらのび、端部は外方に屈曲し丸い。底部は深く丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	明茶褐色	0.5～3mm の石英、雲 母粒を含む	良好 堅緻	土師器	
6	碗	・12.6 ・5.2 ・13.5	口縁部は、内湾しながらのび、端部は外方に屈曲し丸い、底部は深くやや平らである。	ヨコナデ	ヨコナデ、 ヘラケズリ	黄褐色	石英、雲母 粒を多量に 含む	良好	土師器 底部に黒斑が みられる	
7	碗	・13.8 ・5.3 ・14.4	口縁部は内湾しながらのび、端部は外方に屈曲し丸い。底部は深くやや丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ、 ヘラケズリ	明茶褐色	1～2mmの 石英、雲母 粒を多量に 含む	良好 堅緻	土師器 指圧痕が部分 的にみられる	
8	碗	・13.4 ・5.5 ・-	口縁部は内湾しながらまっすぐのび、端部は丸い。底部は、やや深く、わずかに丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	明茶褐色	1～2mmの 石英、雲母 粒を多量に 含む	良好	土師器	

第37表 19号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm, g)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
9	鉄鏃	13.0	3.9	1.9	0.5	0.15	0.25	木質残存
10	同上	14.8以上	2.8	0.7	0.35	0.2	0.3	
11	同上	12.4以上	3.2	0.8	0.4	0.2	0.3	
12	同上	10.4以上			0.4		0.3	桜樹皮巻き残存
13	同上	6.0以上			0.4		0.3	
14	小刀	22.0以上	19.0	1.3	6.55	0.3	0.2	木質柄残存
15	直刀	91.6以上	36.8	1.5	1.2	0.3	0.4	目釘穴あり